

青森県埋蔵文化財調査報告書 第365集

宮田館遺跡

- 青森環状野内線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

2004年 2月

青森県教育委員会

序

青森市東部の宮田地区では現在、青森県新総合運動公園の建設が進められております。

県総合運動公園の開園に伴い付近の交通量の増大が予想されたため、県道青森野内環状線の拡幅工事が必要となりました。

当センターでは工事に先立ち、当該地区に所在する宮田館遺跡の調査を平成12年度より行っております。

第1次から3次にわたる調査では縄文時代・古代・中世・近世以降と、多くの種類の遺構・遺物が検出され、宮田館遺跡周辺は幾度も先人の活動の舞台になっていたことが明らかとなりました。

本書は、第4次調査となる平成14年度の発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査区では主に、縄文時代や平安時代の遺構・遺物や、中世以降の溝跡等が検出されました。特に竪穴住居跡に外周溝が付随する建物跡は当地域では山下遺跡に次いで3例目のとなり貴重な発見であります。

これらの調査成果が今後の調査研究に役立ち、また、当地域の歴史学習の一端を担い、埋蔵文化財への関心をよりいっそう深めるものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査並びに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成16年2月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 良 治

例 言

1 本報告書は、平成 14年度に発掘調査を実施した県道青森環状野内線道路建設事業予定地内に所在する青森市宮田館遺跡の発掘調査報告書である。

2 本遺跡は、平成 10年 3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に青森県遺跡番号 01278(玉水(2)遺跡)として登録されていたが、平成 12・13年度に青森県動物愛護センター建設に伴い、玉水(2)遺跡に隣接する宮田館遺跡の試掘調査が実施された結果、遺構が連続して検出されることが明らかになったため、遺跡を統合することとし、従来の玉水(2)遺跡を含めて宮田館遺跡とすることになった。宮田館遺跡は青森県遺跡番号 01190である。

今回報告となる範囲は既報告の『宮田館遺跡』、『宮田館遺跡・三本木遺跡』における調査区に隣接している。既報告の調査区の呼称と今回報告の調査区の呼称は第 2 章第 1 節の 1 に詳しい。

3 本報告書の執筆・編集は茅野が行った。依頼原稿に関しては文頭に執筆者を記した。

4 資料の分析、鑑定、については、以下の方々に依頼した(敬称略)

出土石器の石質鑑定	弘前大学	柴 正敏
	八戸南高等学校	佐々木辰夫
出土炭化物の放射性炭素年代測定分析		(株)地球科学研究所
出土炭化材の樹種同定分析	木工舎「ゆい」	高橋 利彦

5 本書で利用した地形図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 の地形図「浅虫」・「青森東部」を合成・複製したものである。

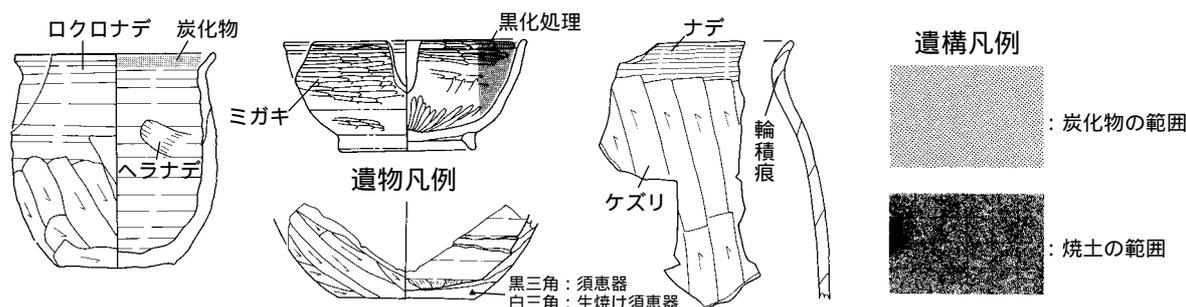
6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。

7 遺構・遺物の分章・挿図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

(1) 遺構内外の堆積土の注記には、『新版標準土色帖』(小山、竹原; 1994)を用いた。なお、土層注記における略号は次の通りである。千曳浮石層: T 浮石: H ブロック: B

(2) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類cm、石器類mm、重量はgである。

(3) 図中で使用したスクリーントーンの表示及び遺物の凡例は指示のない限り以下の通りである。



8 引用・参考文献については本文末に収めた。

9 出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10 本報告書作成に際して、下記の諸氏より御協力、御助言を受けた(敬称略)

石井 淳、宇部則保、遠藤正夫、大野 亨、小笠原善範、小野貴之、小保内淳一、角張淳一、木村淳一、小久保拓也、児玉大成、佐々木浩一、設楽政健、杉山陽亮、瀬川 滋、西澤正晴、藤田亮一、藤原宏明、星 雅行、丸山直美、村木 淳、山口義信、山崎 武、渡 則子

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査要項	
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査要項.....	2
第2章 調査方法と調査経過	
第1節 調査方法.....	3
第2節 調査経過.....	4
第3章 遺跡内の基本土層	
第1節 遺跡内における基本層序.....	6
第2節 地下流路跡と考えられる痕跡について.....	8
第4章 検出遺構と出土遺物	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	
1 竪穴住居跡.....	11
2 土坑.....	13
3 土器埋設遺構.....	15
4 遺物集中地点.....	17
第2節 平安時代の遺構と遺物	
1 建物跡.....	18
第3節 その他の遺構と遺物	
1 土坑.....	28
2 溝跡.....	30
3 柱穴跡.....	34
第5章 遺構外出土遺物	
第1節 遺構外における遺物の出土状況.....	39
第2節 縄文～弥生（続縄文）時代の遺物.....	39
第3節 平安時代の遺物.....	45
第4節 中世以降の遺物.....	45
第5節 石器.....	45
第6章 自然科学的分析結果	
第1節 青森市宮田館遺跡出土炭化材の樹種.....	48
第2節 出土炭化物の放射性炭素年代測定結果.....	51
第7章 調査成果に関する考察とまとめ.....	53
引用・参考文献.....	66
写真図版.....	71p
遺物観察表.....	67
報告書抄録.....	95

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

青森環状野内線は、青森市野内から青森平野の南域の丘陵縁辺を通る県道であるが、国道4号と交差して「みちのく有料道路」に至る区間は、青森県新総合運動公園の開園に伴い、交通量の増大が予想されることから、片側1車線の現道を2車線化することとなった。その工事予定範囲には宮田館遺跡（当時は玉水(2)遺跡と呼称）の一部が含まれていたことから、県土木部より県教育委員会に発掘調査の委託がなされ、平成12年度に県埋蔵文化財調査センターが宮田館遺跡の第1次発掘調査（既報告：青埋報第32集）を実施した。また、翌平成13年度には宮田館遺跡（第2次）と三本木遺跡の発掘調査（既報告：青埋報第34集）及び青森県新総合運動公園建設事業に先立つ宮田館遺跡（第3次）の発掘調査（既報告：青埋報第34集）が県埋蔵文化財調査センターによって行われた。翌平成14年度には、県動物愛護センター建設事業に先立つ調査も県埋蔵文化財調査センターにより行われ、また、今回調査区の隣接地（B4区）では、一般住宅建設に先立つ調査が青森市教育委員会により行われた（青森市69集）。

今回の調査は、県道青森環状野内線の拡幅に伴い、接続する市道の取り付け部分の付け替え工事範囲が宮田館遺跡の範囲内に及んだため、青森県県土整備部道路課の委託を受け平成14年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行ったものである。宮田館遺跡としては第4次調査となる。

なお、図1-1には年度ごとにおける調査区域を示した。



図1-1 調査区の位置

第2節 調査要項

1 調査目的

青森環状野内線道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する宮田館遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

平成 14年 4月 15日 ~ 平成 14年 6月 30日

3 遺跡名及び所在地

宮田館遺跡 (県遺跡番号 01190) 青森県青森市大字宮田字玉水 294- 4、外

4 調査面積 1,300m²

5 調査委託者 青森県県土整備部道路課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

6 調査体制

調査指導員 市川 金丸 (考古学)

調査員 葛西 勳 青森大学助教授 (考古学)

〃 工藤 一彌 青森県総合学校教育センター指導主事 (地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 佐藤 良治

次 長 (調査第一課長兼務) 福田 友之

総務 課長 工藤 和夫

調査第二課長 成田 滋彦

調査第一課 文化財保護主事 茅野 嘉雄

調査補助員 三上絵里子 (平成 14年 10月退職)

佐々木志野

浜田 綾

泉山 弥生

第2章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 グリッドの設定

本遺跡の位置する青森市宮田地区では、第1章で述べたとおり多くの遺跡の調査が行われている。いずれの遺跡の調査でも、グリッドの軸を公共座標にあわせて設定しているため、今回の調査でもグリッドの呼称はそれらの調査で用いた方法に準じた

グリッドの呼称は、平面直角座標第X系の $X = 92680.0000$ ・ $Y = 644.0000$ を「 A - 30」とし、座標X軸にはローマ数字(~)とアルファベット(A ~ T)の組み合わせを用い、Y軸には算用数字を付している。グリッドは4 m単位とし、X軸は正方向へ4 m北進する毎に「 A 」、「 B 」…とアルファベットが進み、「 T 」に達すると、次はローマ数字が繰り上がり「 A 」となる。Y軸は正方向へ4 m東進する毎に算用数字が1ずつ増える。グリッドの呼称は南西隅のグリッドライン交点を用いて表している。

今回の調査では、本遺跡の北東に位置する新総合運動公園建設用地内に設置されている、「新総合運動公園測量基準点」の 級(2 - 5)と 級(3 - 14)を基点とし、グリッド杭の設置及びBM測量を業者(株式会社コンテック東日本)に委託した。

なお、本遺跡調査区内に設置したグリッド杭の座標を下表に3点のみ示しておく。

グリッド杭の名称	X	Y
O - 38	92656.000	676.000
O - 47	92656.000	712.000
Q - 47	92664.000	712.000

2 調査方法

調査の開始にあたっては、まず各地点で試掘を行うことにした。試掘では試掘坑壁面の土層観察により、土壌の層位的な堆積状況と遺物の包含状況を把握した後、スコップやジョレン、移植ベラ等を用いて層位毎に掘り下げていった。状況に応じてはバックホーも適宜導入した。

基本土層の名称は、表土から下位に順にローマ数字を付すこととした。

包含層から出土した遺物の取り上げは、基本的にグリッド・層単位に行い、必要に応じて写真撮影と平面図作成、標高の測定を行い、番号を付した。

遺構の調査は、規模や形態、付属施設等の有無に応じて適宜セクションベルトを設定し、土層を観察しながら精査を進めた。土層の名称は基本的に上位から下位に算用数字を各々付すこととした。

遺構の平面図作成及び遺構内出土遺物の出土地点や出土状態の図化に関しては、遣り方測量と光波トランシットを用いて行った。縮尺は20分の1を基本としたが、種類や規模の大小により10分の1、40分の1等とした。

3 調査区内における分割区の名称

分割区の名称は、調査段階では命名していないが、整理・報告の段階で、青森市教育委員会調査部

分も含め、過去の報告を踏襲する形で下記のように設定した。また、報告書未刊行であるが、平成8年度に県新総合運動公園内の遺跡試掘調査において一部調査された玉水遺跡（現在は宮田館遺跡に統合）については、青埋報第34集調査区（C2区）の東側にあたるため、仮にC4区としておく。

報告書（巻次）	A区	B区	C区
青埋報第322集	A1区 A2区 A3区	B1区	C1区
青埋報第340集	A0区	B2区	
青埋報第344集			
青市教委第69・74集		B4区	C4区
第365集（本書）		B3区	
平成8年試掘（未刊）			

4 遺構の名称

調査段階での遺構番号は、種別毎・検出順に「1」から始まるようにした。しかし、今回調査区域は第1次調査区の隣接地区であること、両地区間にまたがる遺構があることから、整理作業の際に遺構番号の付け替えを行った。遺構名の略記号は以下のとおりである。

SI : 竪穴住居跡・建物跡	SK : 土坑	SD : 溝跡	SP : ピット	SR : 土器埋設遺構
----------------	---------	---------	----------	-------------

遺構名の変更については、基本的に調査時における全ての遺構名の前にB3区の名称を付記した。但し、下表の遺構については、遺構名を変更している。

調査段階の遺構名	報告書段階の遺構名
SI-05	B3・SI-06に統合
ISD-04	B3・SI-04・SD-1

5 写真撮影

基本的に35mmのモノクローム・カラーリバーサル（ISO100）の2種類のフィルムを使用し、必要に応じて6×7版（ISO100）、35mmカラーネガ（ISO400）及びポラロイドフィルムを併用した。

撮影にあたっては、主に土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況を記録し、必要に応じて作業状況等の記録にも努めた。また、ラジコンヘリ・高所作業車による俯瞰撮影も行った。

第2節 調査の経過

4月15日：機材等搬入

5月10日：人力及び重機による表土除去終了。建物跡、土坑、溝跡、土器埋設遺構、柱穴群等を検出。

5月9日：青森県県土整備部道路課より、隣接する私有地の一部分の調査追加を要請される。

5月31日：私有地部分において建物跡2軒、土坑2基、溝跡2条、遺物集中地点1カ所を検出。

7月4日：調査終了。

第3章 遺跡内の基本土層

第1節 遺跡内における基本層序

宮田館遺跡は、青森平野の北東部、野内川の下流右岸に位置する。遺跡の東方には東岳（標高 684 m）がそびえ、その西麓には青森湾に向かう複数の山稜が発達している。

第2章にも述べたとおり、第1～3次にわたる調査では、調査区内を大きくA～C区に区分けしている。地形的にはA区・C区は沖積地・B区は丘陵上（低位段丘面）というように区分することが出来る。今回の調査区は、第1次調査におけるB1区の南東側に接している。過去の調査区における基本層序については、既刊の報告書を参照されたい。以下今回の調査区分について記述する。

・B3区の基本層序（図3-2）

図に示した4地点で基本土層を確認したが、I Q 45杭付近では主に千曳浮石相当層（層）より下位の土層を確認し、残り3地点では千曳相当層より上位の層順を確認した。調査区内は図-1で示した範囲で層または層より上位の土層が削平され、層がその直上に堆積している。

それらを統合すると本調査区の基本層序は以下の通りになる。

層 黒褐色（10YR2/2）…現代の耕作土である。

層 黒褐色（10YR3/2）…近代の耕作土であり、基本土層～の2層に相当する。層上面に食い込み等高線に直行する方向に畝跡の痕跡が確認できた箇所（SD-12付近）があった。

層 黒褐色（10YR2/2）…やや砂質な黒色土と砂質土が所々で互層に堆積している。層厚は斜面下位ほど厚くなり、調査区北端では約1mを測る。砂質土の入り具合と微妙な色合いで細分した部分もあるが（基本土層～の3・4層）本調査区内では明確な対比・細分は不可能であった。層との層理面はほぼ平坦で、見かけ上もはっきりと分離できる。砂質土が互層に入る事などから水の影響を多分に受けた堆積状況だと考えられる。

層 黒色（10YR1.7/1）…細粒の黒色土が母材となる。手触りから火山灰（十和田aか白頭山）が混入している可能性もある。層は、基本土層付近のやや地形的にくぼんでいる部分にしか見られない。本調査区では極狭い部分でしか見られず、青森市教育委員会調査部分でしっかりと把握できる。

層 黒色（10YR1.7/1）…層厚約20～40cmであり、斜面上位と下位の差があまり無く概ね均一に堆積している。上下2層（基本土層～の5・6層）に細分したが、層からの漸移的な変化で、下層ほど千曳浮石をや多く含んでいる。全体的に粘性を持つ土質であり、調査区北端付近ではこの層から円筒下層d式土器が出土している。

層 黒褐色（10YR2/3）…層厚約10cm程度でほぼ均一に堆積している。粘性に富む土層であり、千曳浮石粒をやや多く含む。層との層理面はやや凹凸が見られ、はっきりしない部分も多い。

層 褐色（10YR4/6）…浮石質の硬く締まった層で、千曳浮石層にほぼ相当する。基本土層～では3層に分層出来た。上層ほど浮石の含有量が多く、下層になるに従い砂質土主体に変化している。上層の浮石に関しては、粒径が3～10mm程度のもが多く、あまり大きなものはない。本遺跡周辺の千曳浮石層については、降下したものが二次堆積によるものが意見が分かれるところであるが、層中に含まれる浮石の大きさ等から考えるに二次堆積の可能性が高いと考えられる。

層 赤褐色（5YR）…粘土質火山灰層。最上部に水の影響により白色化した部分が薄く見られる。硬く締まり粘性有るが、乾燥するとひび割れ、吸水すると溶け出す。大谷火山灰層に相当？

層 赤褐色（5YR）…風化した岩辺と粘質土の混合層。最上部は水の影響で白色化している。田代平溶結凝灰岩層の風化帯に相当？

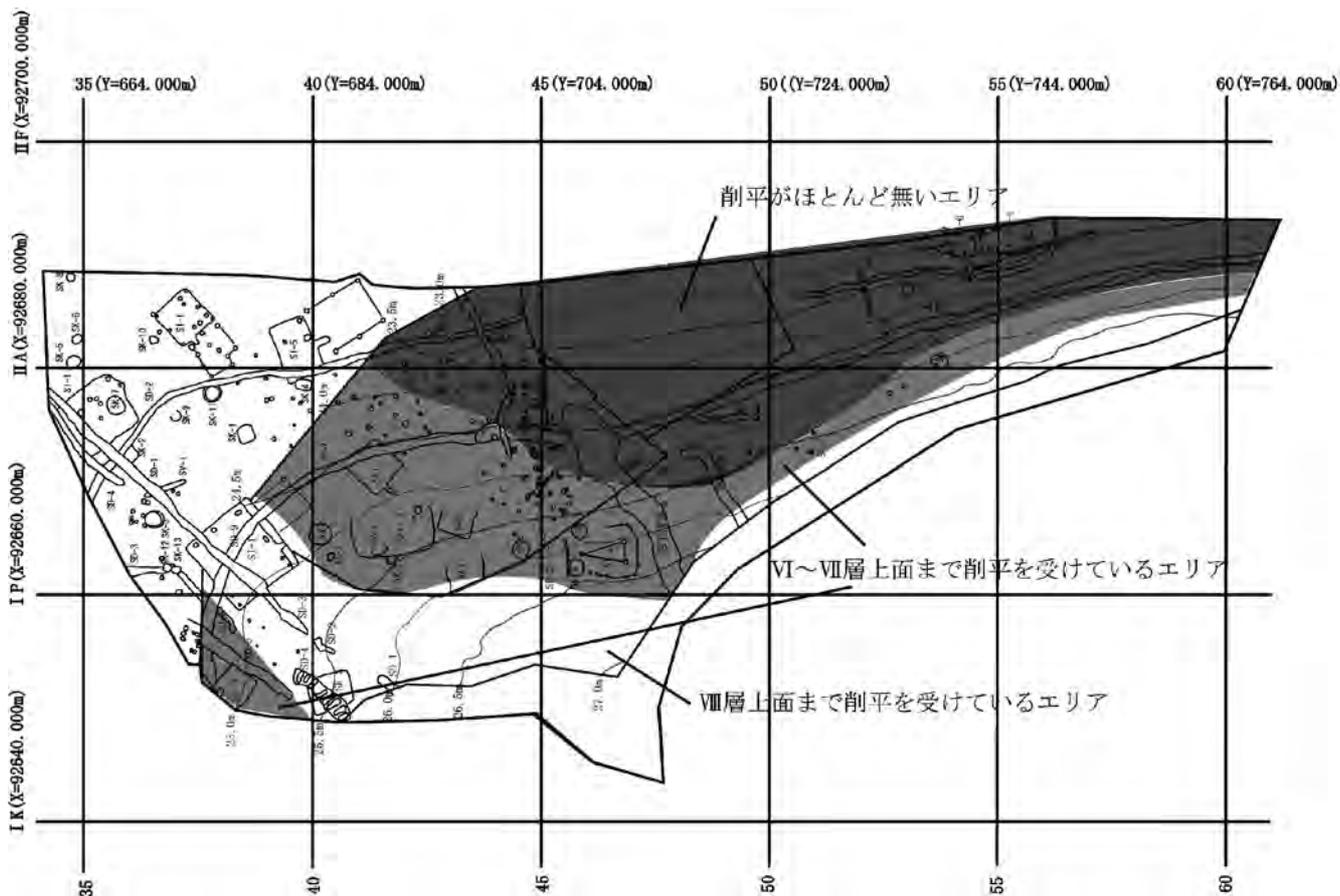


図3-1 調査区内における土層の削平状況

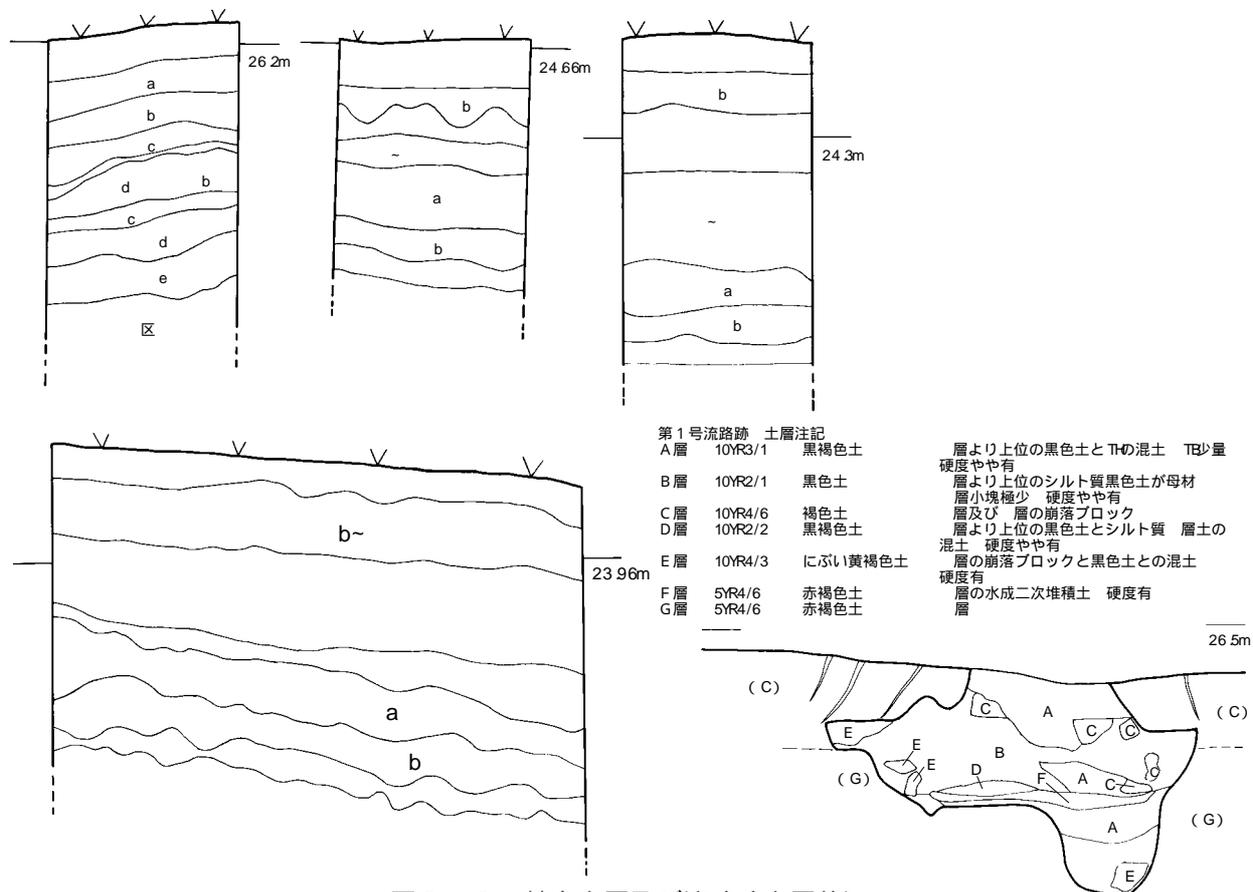


図3-2 基本土層及び流路跡土層状況

第2節 地下流水路と考えられる痕跡について

調査区中央付近において、人為的とは考えにくい溝跡が発見された。確認時点では溝跡もしくは土坑として各々番号を振り調査したが、調査が進むにつれ、通常の以降では見られない点がいくつか判明したため、地質学の調査員などに助言を求めるなど多方面から検証した結果、これらの遺構？は現時点で地下水の流れた痕跡であるとの判断に至った。通常の遺構ではないと判断したため、詳細な平面図は作成しなかったものの、土層断面の写真や図面、完掘時の写真があるため、これらを元にその特徴について以下に記述する。

第1号地下流路跡

[位置・確認] IP - 47グリッドから IR - 46グリッドに向かい、北西方向にやや蛇行しながら走行している。 ~ 層面で確認した。確認時は南側と北側の一部分しか地表面に現れていなかったため、溝跡と土坑の2つの名称を付したが、同一の痕跡であることが判明したため名称を統一している。

[土層] 2箇所の土層断面図を作成し、そのうち南側で作成したものが典型的であったため図 - 2 に示した。土層の特徴としては、開口部付近の層がオーバーハングし、その付近で層に亀裂が見られること、層の大きな崩落塊が堆積土中に見られること、堆積土中にかなりの量の黒色土（ ~ 層と層起源のものが見られる）が堆積していること、一部に水成堆積と考えられる堆積状況が見られること等が挙げられる。

[壁・底面] 壁・底面の特徴は次の通り。層部分の壁はほとんどが崩落により出来たものであり、本来の壁ではない。逆に層部分の壁は層崩落以前に形成されていたものである。壁面には工具痕等は見られず、なめらかな仕上がりである。また、壁面の立ち上がりは層下面に沿ってやや広がりを見せはっきりしない。底面には工具痕は見られず、平面プランは複雑に蛇行している。底面は平坦ではなく、所々段差が見られる。なお、本流路跡は青森市教育委員会調査区域（02年度分）まで延び、その区域内の第7号竪穴住居跡床面中央部を陥没させている（青市教委69集）。

[小結] 以上の情報を総合すると、層が崩落する以前にすでに層が何らかの要因で浸食され空洞が出来ていた可能性が高い。また、底面が段差を持ちながら蛇行している様子はさながら山間の小河川が小規模な滝と淵を作りながら細かく蛇行する様子を想起させるため、このような状況は水が流れたことに起因すると考えられよう。

第2号地下流路跡

[位置・確認] IQ - 49グリッドから IS - 48グリッドに向かい、北西方向にやや蛇行しながら走行している。 ~ 層面で確認した。

[土層] 1箇所の土層断面写真を撮影している。土層の特徴は次の通り。開口部付近の層がオーバーハングしている。層の大きな崩落塊が堆積土中に見られる。堆積土中に黒色土（層起源？）が堆積している。

[壁・底面] 壁・底面の特徴は次の通り。 層部分の壁はほとんどが崩落により出来たものであり、本来の壁ではない。 逆に 層部分の壁は 層崩落以前に形成されていたものである。 壁面には工具痕等は見られず、なめらかな仕上がりである。 底面には工具痕は見られず、平面プランは複雑に蛇行している。 底面は平坦ではなく、所々段差が見られる。 北端部には 層下面に空洞が存在する。 空洞内には場所により黒色土が堆積したり、 層の崩落土が確認できた。

[小結] 以上の情報を総合すると、本遺構は第1号流路跡同様に、水が流れることで形成されたものと考えられる。また、実際に 層下面に空洞が見られることもこの考えを指示するものと考えられる。

地下流路跡の形成過程 (図3 - 3)

第1号・2号地下流路跡が形成された要因は、遺跡の所在する宮田地区の水量の豊富さによるところが大きいと見られる。また、遺跡周辺の台地を形成する地山の土壌特性も重要である。図 - 3には遺跡内の土層模式図と流路の形成過程を示した。

土層図の黒色土は ~ 層に相当し、砂質で透水性のある土壌である。また、第 層も浮石砂質であり、透水性の高い硬く締まった土壌である。対して第 層はシルト質の粘土層であり、半乾燥状態では硬くしまりがあるが、完全に乾燥するとひび割れが生じ、吸水すると締まりを失い、水と一緒に溶け出す性質がある。したがって建物跡などの壁面についても、 層が上に乗っている遺構は調査中の風化・崩壊が少ないが、 層が欠失した部分において 層で確認・調査した遺構は調査中に乾燥・吸水を繰り返すたびに壁面が崩落していくのが確認できた。また、降雨の際 層が露出している部分では雨水が地表面を激しく流れることはなかったが、 層が露出している部分では地表面を雨水が流れ、溝状に地表面を削っていく様が見られた。

したがって、これらの遺構は、表土を浸透して第 層上面まで達した雨水が、何らかの要因により局所的に勢いを増して第 層を浸食しながら斜面を下っていく現象が長期間断続的に繰り返されたことにより形成されたトンネル状の空洞が、自然作用もしくは後世の開墾等の人的影響などによって、天井である第 層とその上位の黒色土の崩落を引き起こし、我々の目に触れたものと結論づけられる。

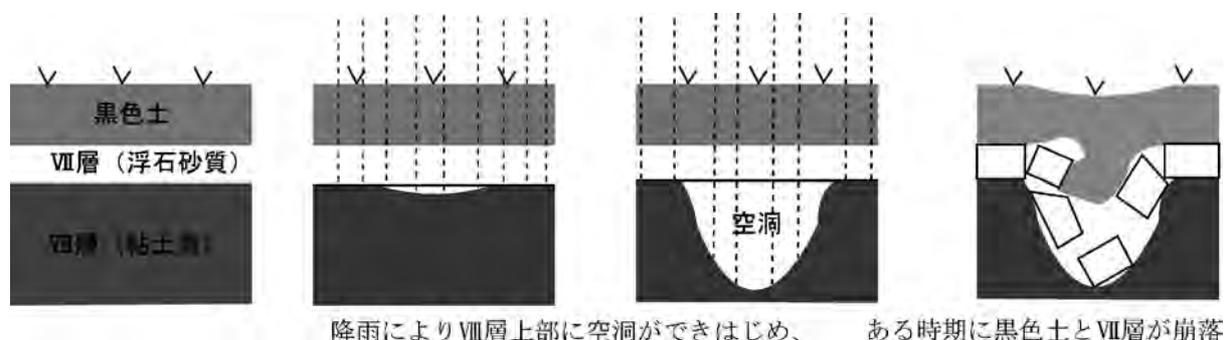
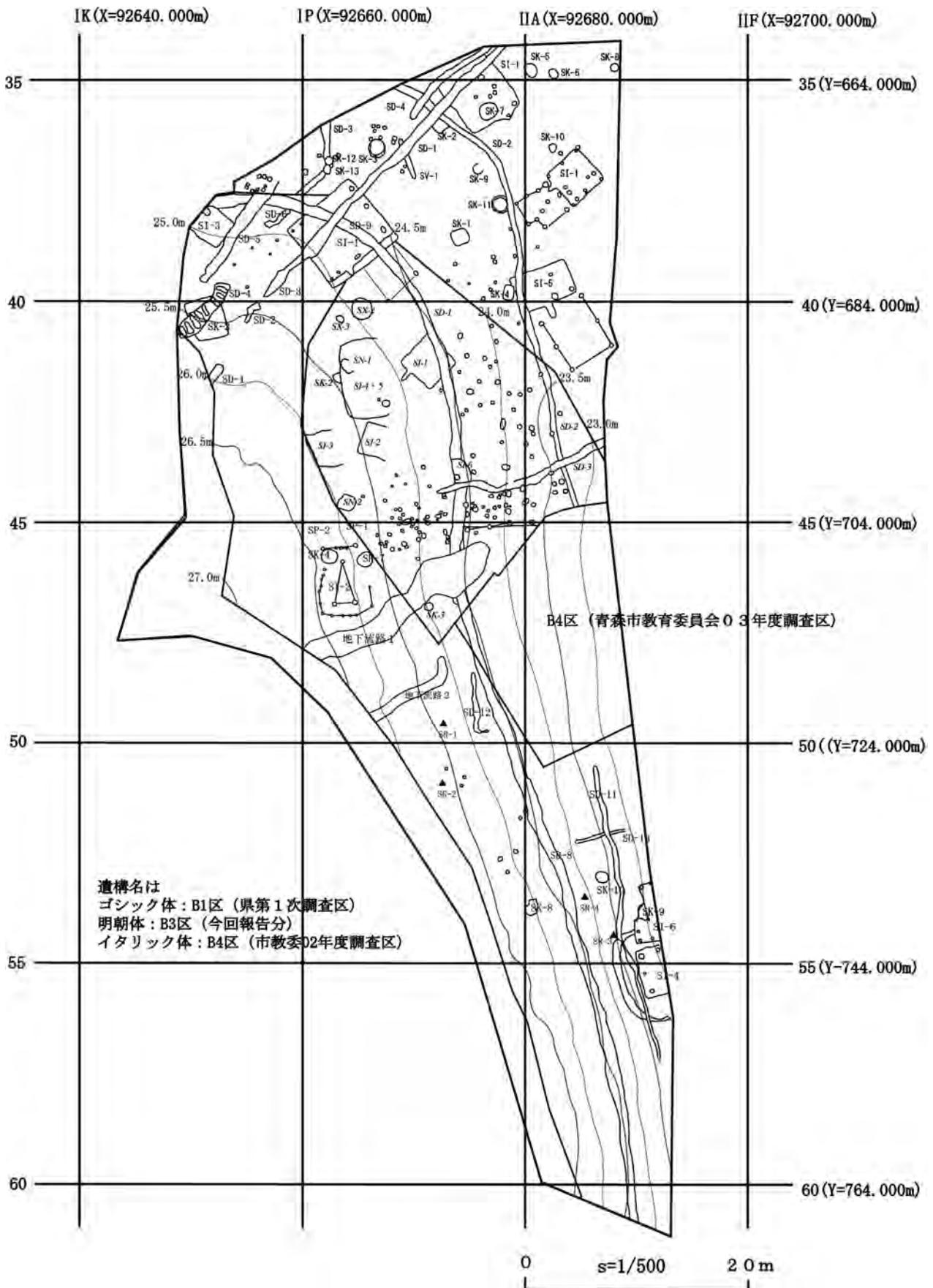


図3 - 3 地下流路の形成課程模式図



宮田館遺跡 B区遺構配置図

第4章 検出遺構と出土遺物

はじめに

本調査で確認・調査した遺構は、竪穴住居跡（建物跡）5軒（縄文時代1・平安時代4）・土坑5基（縄文時代3・平安時代1・その他1）・溝跡10条（平安時代2・中世～近世2・近世～近代5・時期不明1）・土器埋設遺構4基（全て縄文時代）・柱穴群4カ所（そのうち1カ所は近世～近代？・その他は時期不明）・遺物集中地点1カ所（縄文時代）である。また、第1章で触れたように、地下水の流路跡と考えられるものが2カ所で確認できた。縄文時代の遺構は、主に縄文時代前期末の円筒下層d式期に属する。平安時代の遺構に関しては、白頭山・苫小牧火山灰等の時期を示すテフラが存在しないため、遺構の時期に関しては出土遺物の特徴などから白頭山・苫小牧火山灰降下以降の所産と考えられる。それ以外の時期については、時期を特定できる情報に乏しい。

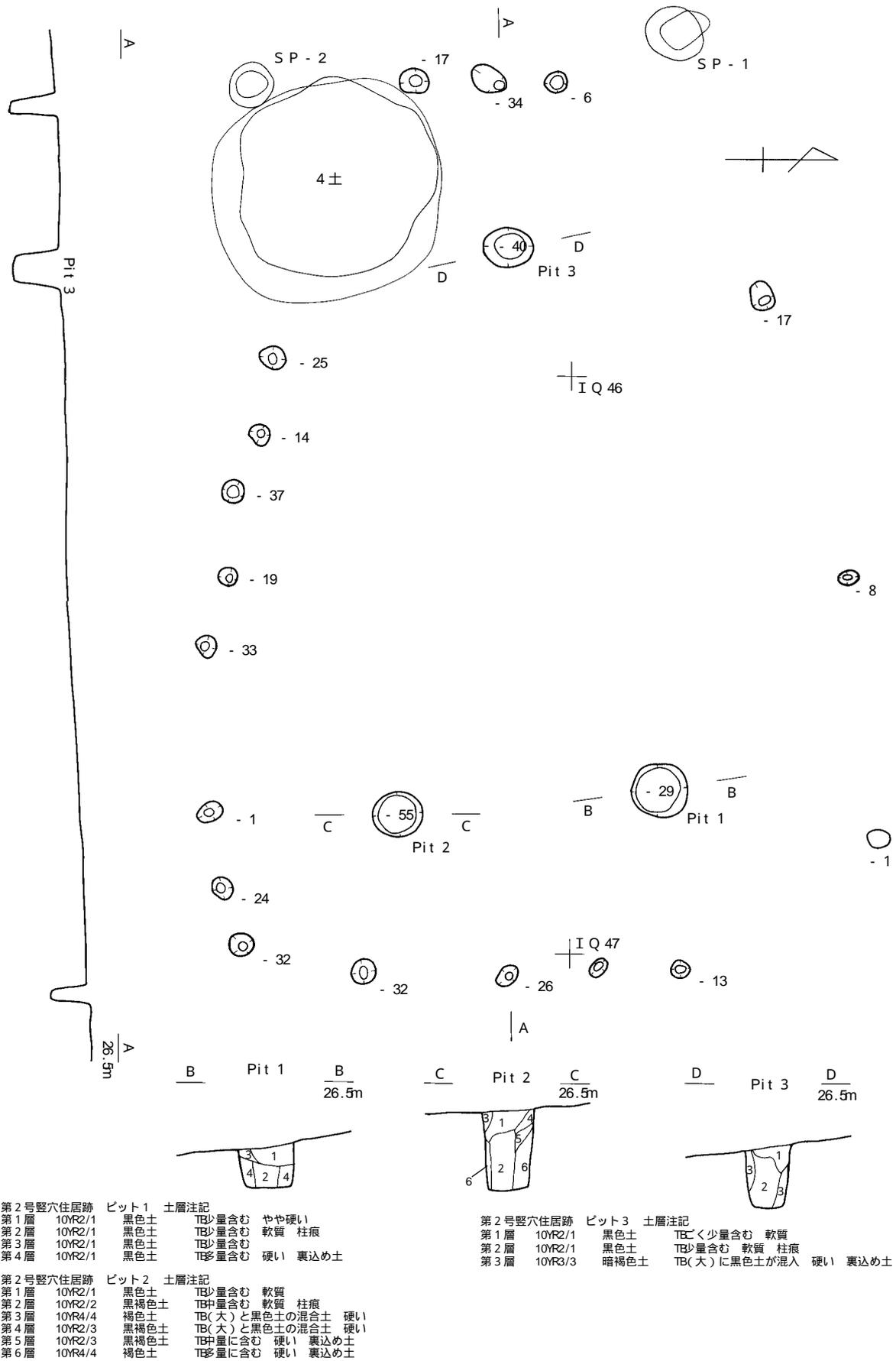
第1節 縄文時代の遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡（図1）

[位置・確認] IP～IQ - 46～47グリッドに位置する。表土直下の層で確認した。[重複] 第4号土坑・第7号土坑と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。[形態・規模] 平面形は隅丸方形に近いが、西側の辺がやや東側より短いため、正確には台形状である。長軸の方位は、PIT1と2の中心を結んだ線と直角に交わる線で算出しN - 85° - Eであった。長軸の規模は6.4m、単軸の規模は単軸長辺が推定2.4m、単軸短辺の規模が4.6mである。[壁・床面] 壁は確認されなかった。床面も一部が削平されていると考えられる。[堆積土] 竪穴本体部分は削平のため確認されず。主柱穴および壁柱穴には、層の黒色土を母材とした土が堆積している。また、PIT1から3では断面に柱痕と裏込め土が確認できた。[柱穴] 床面中央寄りに3本の主柱穴（Pit1～3）、壁際にはほぼ等間隔（0.4～0.6m）に小柱穴が確認された。主柱穴はPIT3を頂点とするほぼ2等辺三角形の配置であり、竪穴の形状も主柱穴の配置に引っ張られてPIT3側に向かってすぼまるような形状になっている。

[出土遺物・遺構の時期] 遺物は出土していないため、時期を決定することは困難である。また、竪穴の平面形や柱穴配置も特異であり、遺構形態からの時期推定も難しい。主柱穴の配置が三角形または台形を指向するのは縄文時代中期末～後期後葉くらいと考えられるが、その時期の遺物は本調査区にはほとんど出土していない。また、中期末～後期後葉にかけては、どちらかというと言円形から円形の平面プランを呈し、本遺構のように長軸方向に間延びするプランはほとんど見られない。住居平面プランが長方形などの細長い形を指向するのは縄文時代前期から中期の円筒土器文化期に多い。本調査区では、市教委調査部分から縄文前期末の住居跡が2軒発見され、また本調査区からは同時期の遺物集中地点が一箇所発見されている。また、平成8年度に行われた県新総合運動公園建設事業にかかる試掘調査では、隣接区域（旧玉水(1)遺跡）において同時期の遺物が多量に出土している。このことから、本遺構の時期は縄文時代前期末の可能性がある。

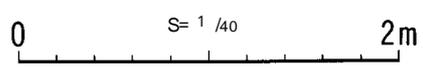


第2号竪穴住居跡 ビット1 土層注記
 第1層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む やや硬い
 第2層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む 軟質 柱痕
 第3層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む
 第4層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む 硬い 裏込め土

第2号竪穴住居跡 ビット3 土層注記
 第1層 10YR2/1 黒色土 TBごく少量含む 軟質
 第2層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む 軟質 柱痕
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 TB(大)に黒色土が混入 硬い 裏込め土

第2号竪穴住居跡 ビット2 土層注記
 第1層 10YR2/1 黒色土 TB少量含む 軟質
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 TB中量含む 軟質 柱痕
 第3層 10YR4/4 褐色土 TB(大)と黒色土の混合土 硬い
 第4層 10YR2/3 黒褐色土 TB(大)と黒色土の混合土 硬い
 第5層 10YR2/3 黒褐色土 TB中量に含む 硬い 裏込め土
 第6層 10YR4/4 褐色土 TB少量に含む 硬い 裏込め土

図1 第2号竪穴住居跡



2 土坑

第4号土坑(図2)

[位置・確認] IP - 45グリッドに位置する。第2号竪穴住居跡の範囲内で、円形、黒色の落ち込みを確認した。確認面は 層である。[重複] 第2号竪穴住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

[形態・規模] 平面形は開口部が1.35m × 1.34mの不整な円形、底面が1.7m × 1.66mのほぼ円形である。開口部がオーバーハング気味にせり出すため、断面形状はいわゆるフラスコ形である。底面は第 層を約20cm掘り込みほぼ平坦である。[堆積土] 層の黒色土に 層の千曳浮石粒が混合した土層が母材で、6層に分層した。ほぼ人為堆積であると考えられる。[出土遺物・時期] 2～6層中から散発的に石器が出土した。1は縦長石匙である。縦長剥片を素材とし、打点側に摘みを作出している。裏面と正面の一部には使用による光沢が明瞭に確認できる。正面は横圧剥離により全面が覆われ、右側縁中央部付近には1回の剥離がなされ縁辺が抉れている(この部分のみ風化度が異なっている)。裏面は右側縁と先端両側に規模の小さい平坦な剥離が施される。この部分には光沢が明瞭ではない。

2は凹み石である。表裏面のほぼ中央部に明瞭な凹みが見られる。全体の半分以上が欠損しているが、折損面の観察から正面の凹み底面に打点が見られるため、人為的に(もしくは使用のため)折損していることがわかる。また、6層最下部には炭化物の集中があり、その中から板状の炭化材が出土した。出土した石器より本遺構は縄文時代前期に帰属すると考えられる。

第7号土坑(図2)

[位置・確認] IQ - 45グリッドに位置する。第2号竪穴住居跡の範囲内で、円形、黄褐色の落ち込みを確認した。確認面は 層である。[重複] 第2号竪穴住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

[形態・規模] 平面形は開口部と底面の規模がほぼ同じで1.36m × 1.35mのほぼ円形である。断面形状は箱形である。底面は 層であり、ほぼ平坦である。[堆積土] 第1層は 層(千曳浮石層)が主体であり、その下位2層には 層の黒色土を母材とする土層が堆積している。概ね人為的な堆積様相と判断できる。[出土遺物] 出土遺物は無いが、隣接する第4号土坑と規模、形状ともに類似するため縄文時代前期末に帰属する可能性がある。

第10号土坑(図2)

[位置・確認] B - 52・53グリッドに位置する。 層下位から 層中で、黒色・円形の落ち込みを確認した。[重複] 無し。[形態・規模] 平面形は開口部が1.16m × 1.0mのほぼ楕円形、底面が0.77m × 0.6mのほぼ楕円形である。断面形状は逆台形に近い。[堆積土] 全体的に 層を母材とした黒色土が主体を占めている。[壁・底面] 底面は斜面の傾斜に併せるようになだらかに傾斜している。[出土遺物・時期] 剥片石器が1点出土している。直接打撃により得られた剥片であるが、正面右側縁下部付近に小規模な剥離が見られるのみで明瞭な刃部加工等は見られない。以上より本土坑は、遺物集中地点の中から検出されたが、明確に時期を表す遺物が出土しないことや、形態的にも他の土坑との共通点が見いだせない。したがって詳細な時期は不明であるが、確認状況から縄文時代に帰属する可能性は高い。

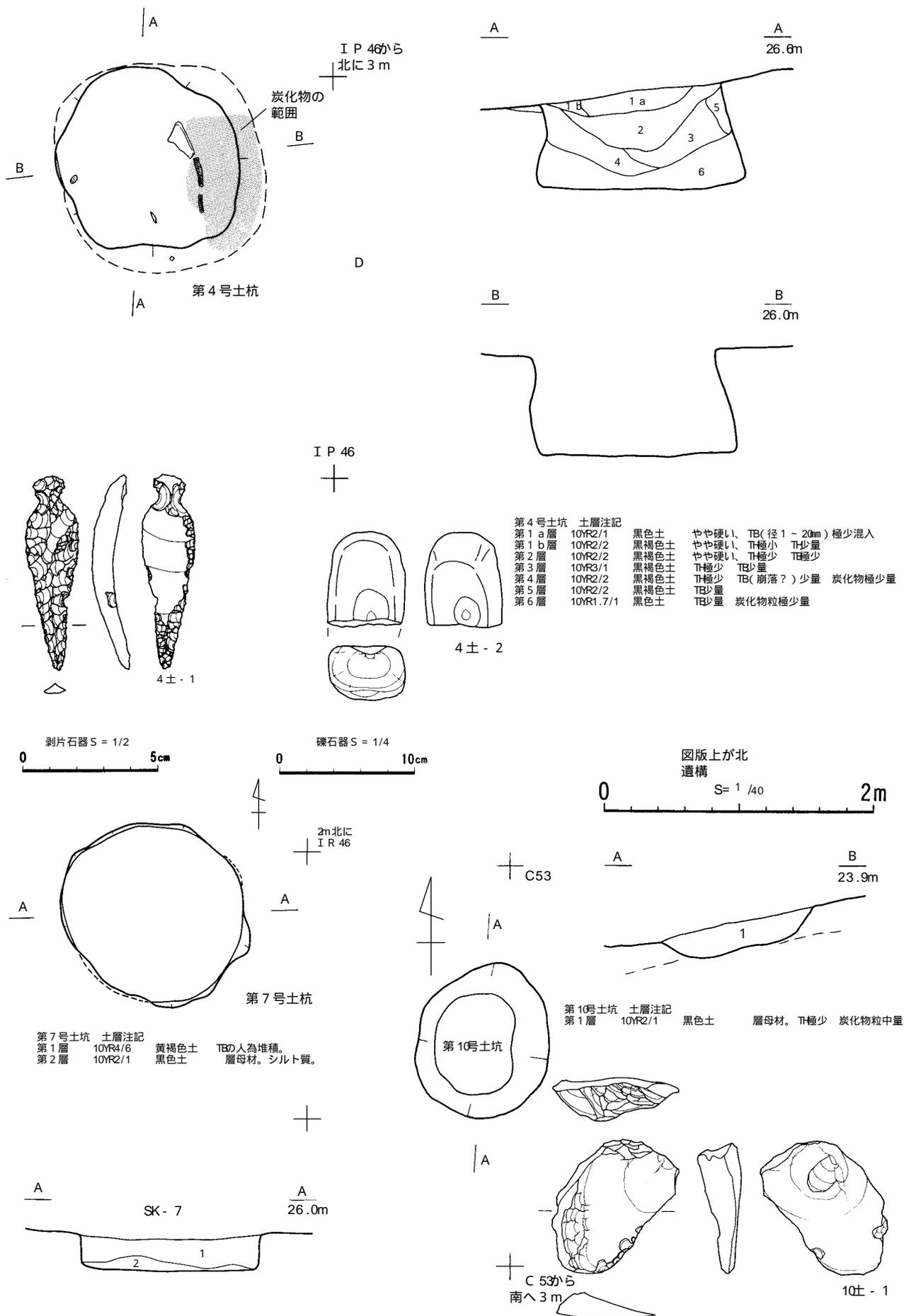


図2 縄文時代の土坑

3 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構(図3)

[位置・確認] IS-49グリッドに位置する。層下位から層中で、土器の口縁部が立った状態でほぼ1周しているのを確認した。[重複]無し。[埋設状態・堀方・堆積土]口縁部が上を向いた正立状態で、土器全体の約1/5弱が埋設されていた。堀方は確認面では不明瞭であり、土層断面でかろうじて確認できた。全体的に層を母材とした黒色土が主体を占めている。[土器の特徴と時期]器形の全体像はおそらく円筒形の深鉢と考えられるが、詳細は不明。土器胎土中には繊維が多量に含まれ、黒色を呈する。土器内面は丁寧に磨かれ光沢を帯びている。口唇端部前面にはLRが回転施文されている。口縁部には単軸絡条体第1類もしくは自縄自巻き(1段)の原体が押圧されている。口縁部文様と胴部文様は口縁部文様と同一の原体が口縁部直下に1周施文される事で区画されている。その直下にはLRとRLの結束第1種が横方向に回転施文されている。以上の特徴から、この土器は縄文土器 群2類aに分類される。[その他の出土遺物]有茎の石鏃が土器内部から1点出土している。

第2号土器埋設遺構(図3)

[位置・確認] IS-50グリッドに位置する。層下位から層中で、土器が立った状態で出土しているのを確認した。[重複]無し。[埋設状態・堀方・堆積土]口縁部が上を向いた正立状態で、土器全体の約1/5弱が埋設されていた。堀方は確認面では明確ではなく、断面でも不明瞭である。1~3層を堀方ないし土器内部の覆土とした。全体的に層を母材とした黒色土が主体を占めている。1層は被熱しているため赤みを帯びている。これは、本遺構が屋外炉として使用されたことを示すものである。[炉体土器の特徴と時期]意外と接合するパーツが無く、破片のみでの報告となった。器形はおそらく円筒形深鉢であるが、詳細は不明。土器胎土中には繊維を多量に含み黒色を呈する。土器内面は丁寧に磨かれている口縁部には単軸絡条体第1類もしくは自縄自巻きの原体が押圧されている。口縁部文様と胴部文様を区画する区画帯は明瞭に見られない。口縁部直下にはLRとRLの結束第1種が横方向に回転施文されている。胴部文様はこの原体とLRとRLの結束第2種が交互に横位回転施文されている。以上の特徴からこの土器は縄文土器 群2類に分類される。

第3号土器埋設遺構(図3)

[位置・確認] B-54グリッドに位置する。層下位から層中で、土器が立った状態で出土しているのを確認した。[重複]無し。[埋設状態・堀方・堆積土]口縁部が下を向いた倒立状態で、土器全体の約3/4弱が埋設されていたが、確認状態ですでに堀方のほとんどを除去してしまったため、詳細は不明である。土器内部は全体的に層を母材とした黒色土が主体を占めている。

[土器の特徴と時期]器形は円筒形の深鉢である。土器胎土中には繊維が多量に含まれ、黒色を呈する。土器内面は丁寧に磨かれている。口唇端部前面にはRLが回転施文されている。口縁部にはLRが押圧されている。口縁部文様と胴部文様は口縁部文様と同一の原体が口縁部直下に1周施文される事で区画されている。区画帯直下にはLRとRLの結束第1種が横方向に回転施文されている。その直下にはRLが斜位に回転施文されている。以上の特徴から、この土器は縄文土器 群2類に分類される。

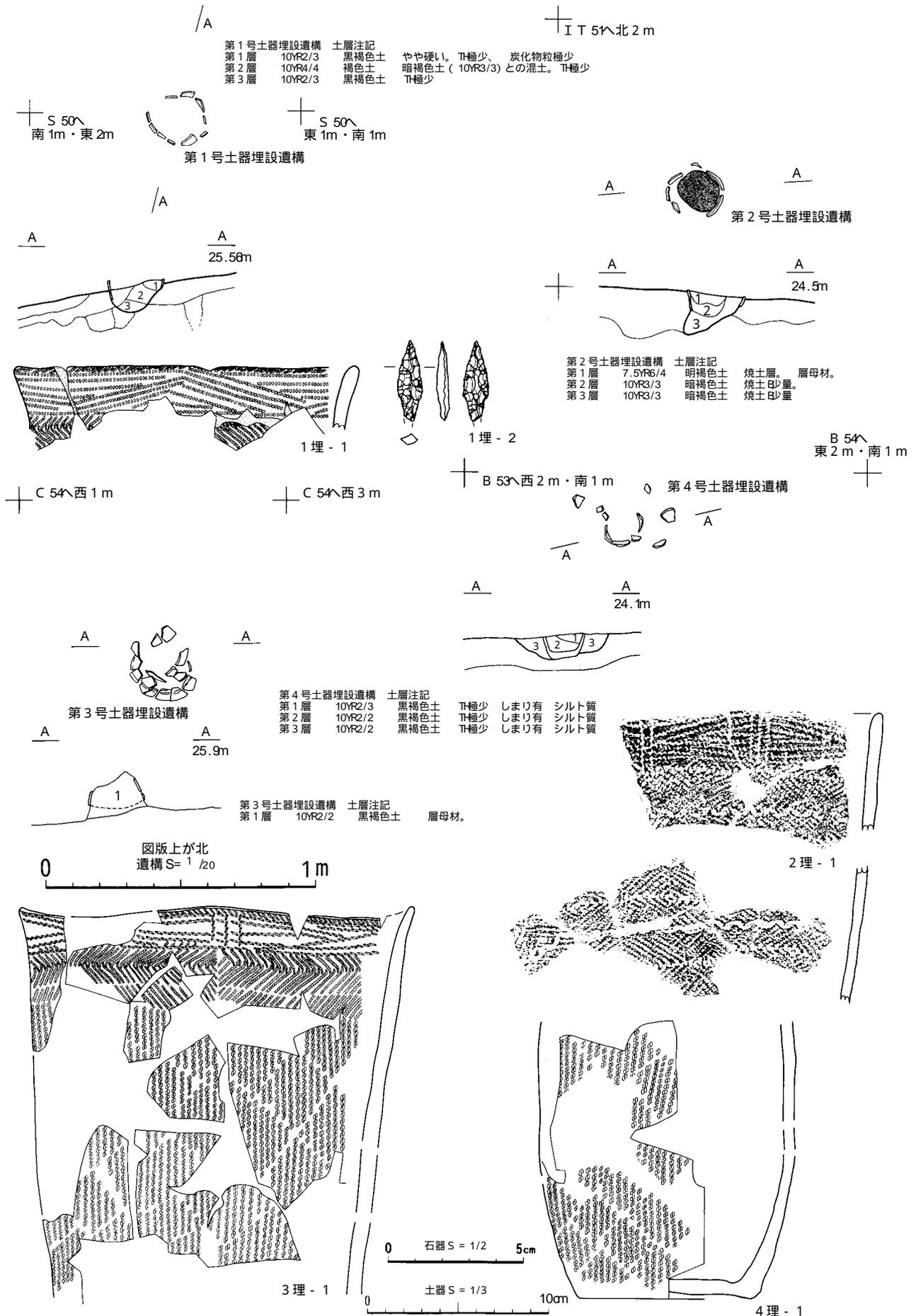


図3 縄文時代の土器埋設遺構と出土遺物

第4号土器埋設遺構(図3)

[位置・確認] B-53グリッドに位置する。層下位から層中で、土器が立った状態で出土しているのを確認した。[重複]無し。[埋設状態・堀方・堆積土]確認段階ですでに口縁部は無くなっており、底部付近のみ(全体の約1/2程度残存)が正立状態で埋設されていた。掘方は確認面では明確ではなく、断面でかろうじて確認できた。全体的に層を母材とした黒色土が主体を占めている。[土器の特徴と時期]器形はおそらく円筒形深鉢であるが、詳細は不明。土器胎土中には繊維を多量に含む。土器内面及び底部外面は丁寧に磨かれている。胴部にはR L Rが斜位に経典施文されている。底部付近約1cmの位置には施文が及ばない。以上の特徴からこの土器は縄文土器群に分類される。

4 遺物集中地点

[位置・層位] B3区東側、R~D-48~600の範囲内で、層除去後に層中から縄文土器が出土するのを確認した。下図にその範囲を示したが、ほぼ等高線に沿うように東西に約40m、南北に約6mの範囲に遺物の広がりが見られた。遺物は主に層上位~中位のレベルで出土した。

[出土状況] 大小の破片がB-53グリッド付近を中心にややまとまって出土した。完形個体が横転したような状況ではなく、破片が散乱しているような状況であった。

[出土遺物] 縄文土器第群が出土している。破片数にして約1200個程の遺物が出土した。現行の土器型式では、一部円筒下層c式らしきものも存在するが、大半は円筒下層d式~d2式に相当すると考えられる。出土遺物の詳細については、図と共に第章に掲載している。

B3区の市道を挟んだ反対側では、平成8年度に青森県新総合運動公園建設事業に伴う試掘調査が行われている(旧玉水(1)遺跡・報告書未刊)。この調査では、円筒下層d式土器がややまとまって出土しているが、これらの遺物は今回発見された遺物集中地点の延長部分と考えられる。また、青森市教委調査部分においては、同時期のものと考えられる竪穴住居跡がされ、今回本書で報告した遺構を併せるとこのエリア内には竪穴住居跡3軒・フラスコ状土坑2基(可能性のあるものを含めると7基)・土器埋設遺構4基・遺物集中地点1箇所が存在することになる。



第2節 平安時代の遺構と出土遺物

1 建物跡

第1号建物跡（図4～6）

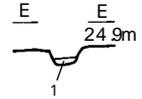
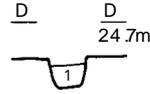
[概要] 竪穴部・掘立部から構成される。北西側約1/5は第1次調査におけるB1区・第3号建物跡（B1・SI03）として調査されている。[位置・確認] J～Q-37～39グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複] 第3・9号溝跡と重複関係にあり、これら全ての遺構より本遺構が古い。また、本遺構は2つの建物跡が重複しており、新しい方を第1A号建物跡、古い方を第1B号建物跡とした。

竪穴部

[形態・規模] 第1A号建物跡は長辺約7.2m、短辺約6.2mの正方形に近い長方形を呈する。カマドの方位を基準とし、東・南コーナーを結んだ線に直交する線から求めた主軸方向はN-48°-Eである。第1B号建物跡は、そのほとんどが第1A号建物跡に壊されているため、現存するのは北東壁から内側へ約70cm程である。北東壁は7.4mを測り、コーナーを結んだ線と直交する線から求めた主軸方位はN-52°-Eである。[壁・床面] 第1A号建物跡の壁は北西～西側で約0.3m残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。東側は後世の削平のため残っていない。床面は層を掘り込みほぼ平坦に構築されている。中央部付近に若干の凹凸が見られ、その部分にわずかながら床構築土が充填されていたが、その他の部分において明確な貼り床は無い。第1B号建物跡の壁は約0.2m残存している。床面は層を掘り込みほぼ平坦である。[堆積土] 9層に分層した。黒褐色土と層・層のブロックが混在した土層が主体であり、堆積状況は人為的だと判断した。[柱穴・土坑] 第1A号建物跡床面には10基の小穴と壁際に巡る幅の狭い溝が確認できた。PIT1を除くといずれも深さ20cm未満と浅いため、用途は不明である。しかし、PIT1・2に関しては、掘立部と考えられる柱穴と対応する間隔に配置されているため、何らかの関係がありそうである。溝に関しては、深さが約20～30cmであり、カマド部分を除き壁際を全周している。また、北東コーナー付近では、焼土範囲が確認できた。用途などは不明であるが、第1B号建物跡のカマド火床面である可能性も捨てきれない。第1B号建物跡床面には小穴1基（Pit11）が確認できた。[カマド] 北東壁南寄りに構築されている。白色粘土と大振りな礫を主なカマド構築材としている。礫が残存しているため袖が確認できたが、建物跡廃絶時にカマドを破壊したと見られ、使用時の形状をとどめていない。カマド構築にあたっては礫を芯材として床面に直接設置した後、その周りを白色粘土で肉付けしている。火床面は壁面から約60cmのところであり、直径約20cmの範囲が、皿状に最深約10cm被熱し、赤化している。煙道は竪穴の外側に延びており、第1B号建物跡の覆土を一部壊している。本来さらに外側に延伸するのであろうが、現状では第1B号建物跡の範囲内でしか確認できなかった。[出土遺物] 第1B号建物跡の範囲からの出土遺物はない。第1A号建物跡竪穴部からは、カマド付近（図5-1～4）、床面（図5-5）、覆土および確認面（図6）の各所から遺物が出土している。図5-1は高台付きの土師器椀である。身の部分はロクロ成形後に内外面を丁寧に磨いている。また、内面は黒化处理されているが、二次的な被熱により底面付近の一部を除き黒色が失われている。高台部分は身の部分を回転系切り技法で回転台から切り離した後、ナデつけられている。高台の高さは外部底面から約0.6mである。2・3は土師器甕の胴部破

×

- 第1号建物跡 A・Bライン土層注記
- | | | | |
|-----|----------|------|--------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粗砂と 層粒の混合土 |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 粗砂、層粒多量に含む |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | TB 層粒中量～多量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | TB 層粒B(小さい)少量 |
| 第5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | TB 層粒B(大きい)多量 |
| 第6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 壁際周溝覆土 層粒中量含む |
| 第7層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | TB 粗砂、層粒多量 |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 第8層より砂が多く、層粒B粒径小さい |
| 第9層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 層B |



第1号建物跡 ビット1 土層注記
 第1層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒中量 層小粒量。やや硬い

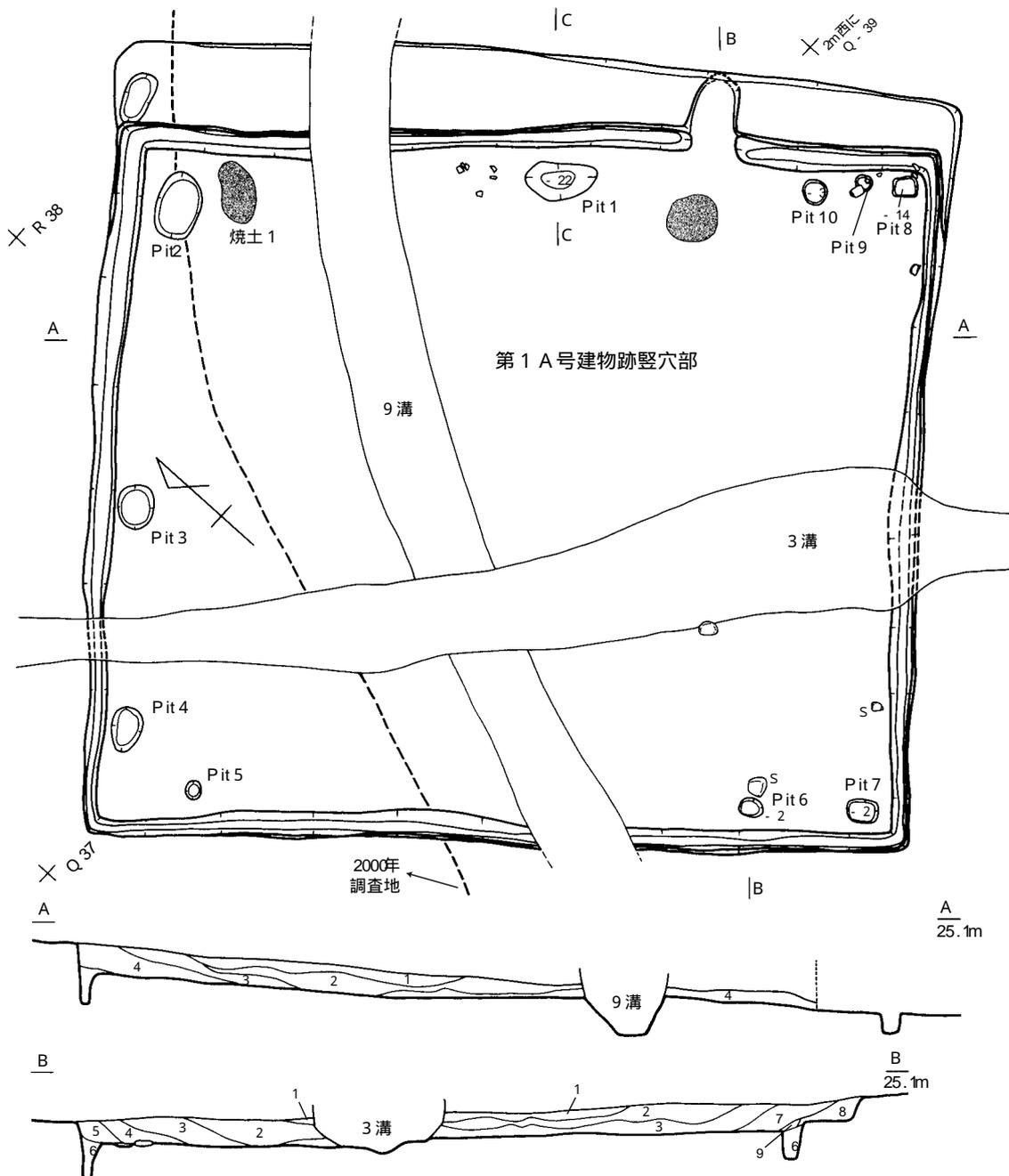


図4 第1号建物跡

0 S = 1/60 2m

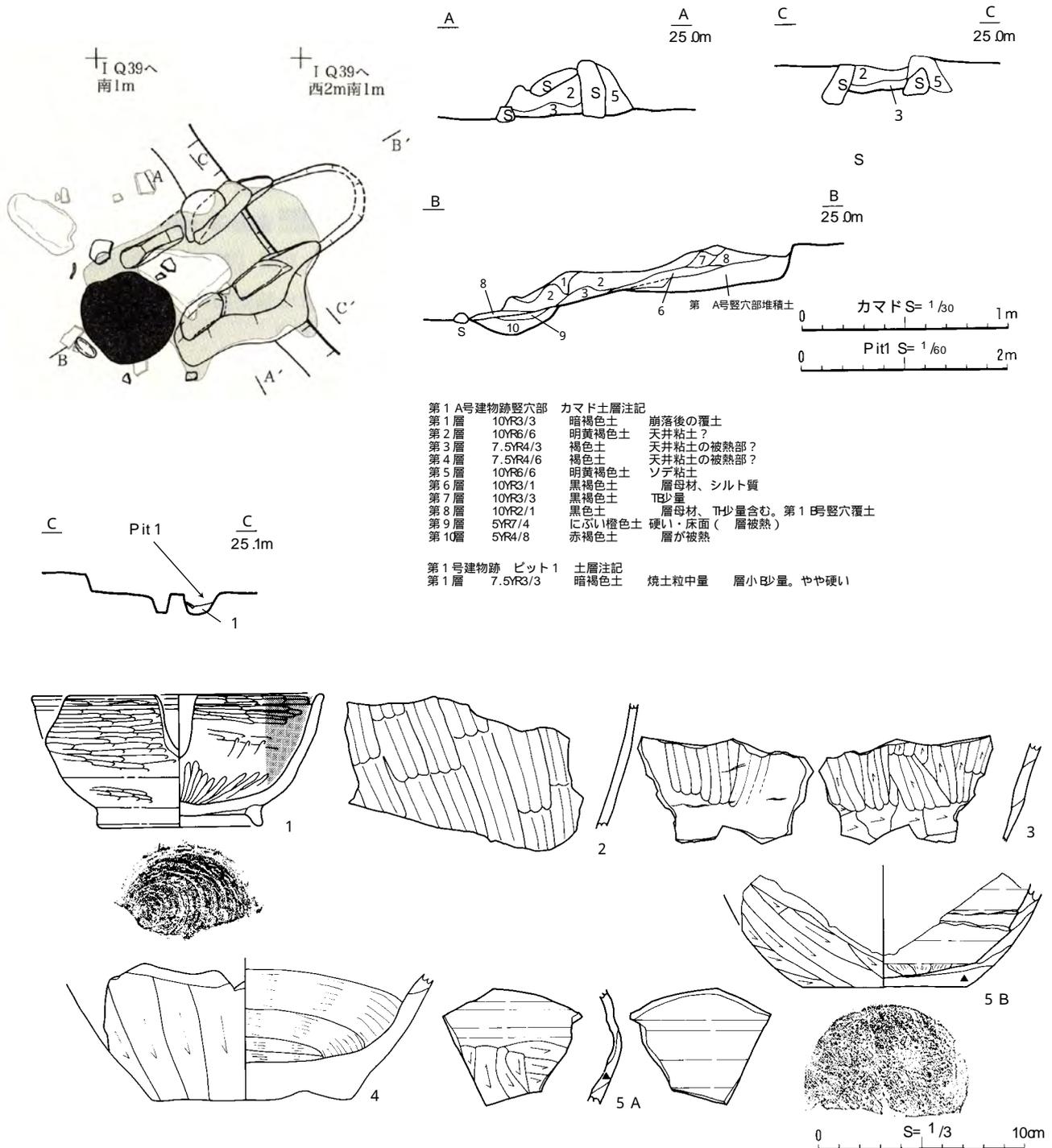


図5 第1号建物跡

片であり、同一個体である。2が胴部中位?であり、3はその下位に位置する。これらの内外面にはミガキが施されている。特に外面は、ケズリに近いような粗いミガキである。先端が滑らかな板状の工具を使用していると考えられるが、詳細は不明である。3の破片下部は底部付近と見られ、ヘラケズリが横位に施されている。5は須恵器壺の破片である。輪積み成形の後ロクロ成形が行われており、底面は切り離し後にヘラナデが施されている。外面上半はロクロナデが見られ、外面下半にはケズ

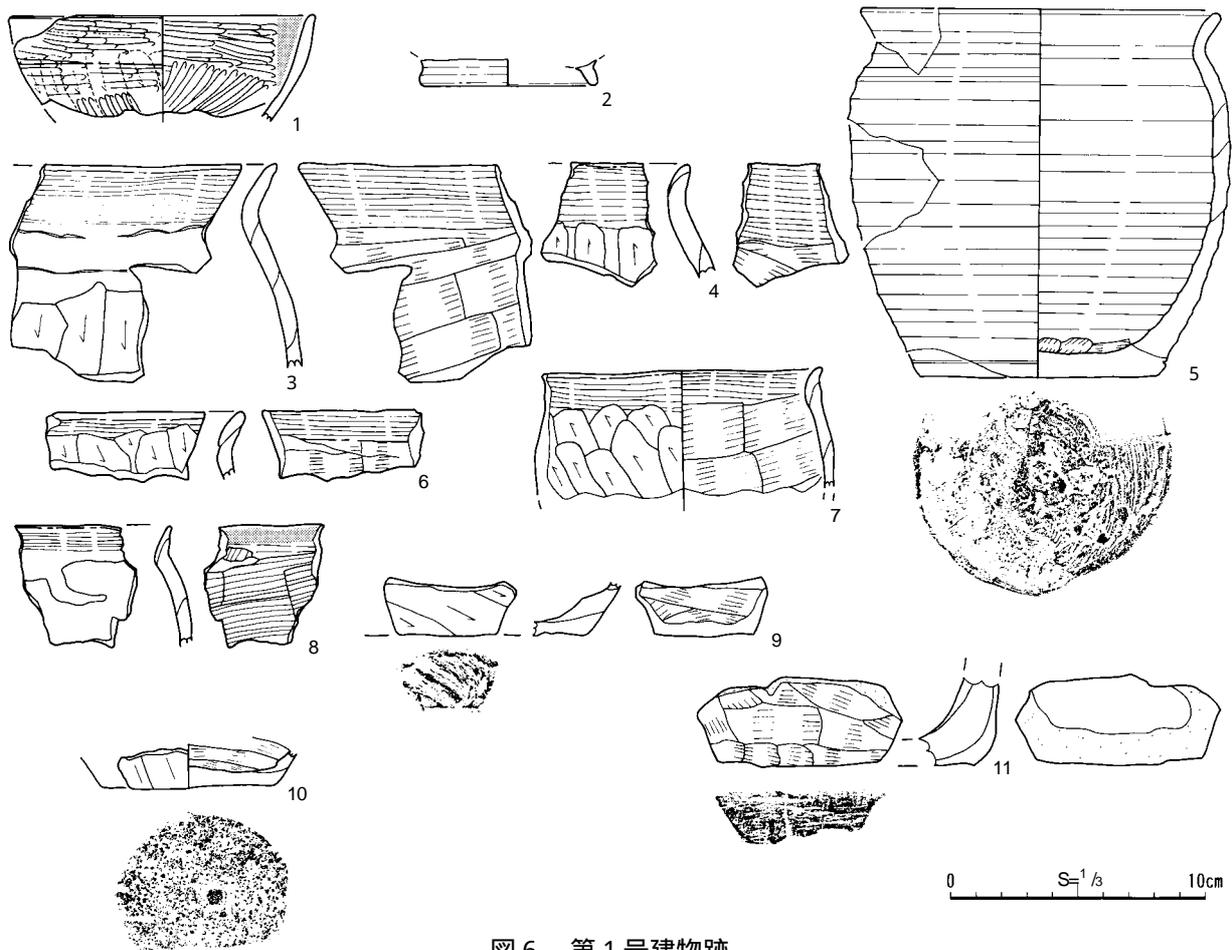


図6 第1号建物跡

リが見られる。内面は底面付近にヘラナデが見られる以外はロクロナデが施されている。図6 - 1は土師器である。第1次成形技術は不明であるが、おそらくロクロナデ成形である。その後体部下半を削った後に内外面全体を磨いている。内面には黒化処理が施されている。図6 - 5は土師器小甕である。ロクロナデ成形により器壁が立ち上げられ、さらにロクロナデにより器面が整えられているが、特に口唇部断面形状が丸みを帯びているように、ロクロナデ特有の硬質さは全体的に見られない。底部と回転台は回転糸切り技法により切り離されている。使用痕の点で言うと、6・7も同様であるが、内面口縁直下約1cmの幅に炭化物が煤状に付着しているが、これらは小型長胴甕の特徴でもある。図6 - 9・10は土師器甕の底部である。9の底面には筵圧痕、10の底面には砂の付着がそれぞれ見られる。11は製塩土器である。二次被熱をうけたせいか風化が激しい。底部外面には柱目圧痕がみられる。

掘立部

[形態・規模] 2基の小穴で構成される。間隔は3.3mである。[堆積土] きめ細かい黒色土(層由来?)が堆積していた。自然堆積の様相を呈する。[付属施設] 無し。[出土遺物] 無し。

第3号建物跡(図7・8)

[概要] 現状では竪穴部のみが確認できたが、南西側が調査区域外であると同時に農業用水路により削平をされているため掘立部の存在は不明である。[位置・確認] IM~IN-37~38グリッドに位置する。層~層上面で確認した。[重複] 第5・9号溝跡と重複関係にあり、これら全ての遺構より本遺構が古い。

竪穴部

[形態・規模] 長辺約2.9m、短辺約2.7mのほぼ正方形を呈する。竈の方位を基準とし、南・東コーナーを結んだ線で求めた主軸方向はN-219°-Eである。[壁・床面] 壁は約0.5m残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。東側コーナー部分は第9号溝跡と農業用水路双方の影響を受けており壁と竈の一部を失っている。床面は層~層を掘り込みほぼ平坦に構築されている。[堆積土] 9層に分層した。層起原の黒色土を主体とし、所々で層起原の土と混合している。自然堆積と人為堆積双方の要素が見られる。[柱穴・土坑] 床面には1基の土坑(Pit1)を確認した。開口部の長軸0.9m、短軸0.62mを測り、底面は0.35m×0.3mのほぼ隅丸方形を呈する。床面からの深さは23cmであり、底面は南西壁面側に緩く傾斜している。内部からは土師器片が出土している。[カマド] 南西壁北寄りに構築されている。煙道部は調査区域外の農業用水路に壊されているため構造は不明であるが、地下式カマドの可能性はある。建物跡廃絶時にカマドを破壊していると思われる。使用時の形状をとどめてはいない。カマド本体は白色粘土と大振りな礫を主なカマド構築材としている。構築にあたっては、まず床面を掘削し掘方を作り、掘方の外側ラインに沿って礫を配置し、それに白色粘土を盛りつけ袖を構築している。火床面は壁面から約30cmにあり、この部分の床面が直径30cmの範囲で最深5cm被熱し赤変している。カマド完掘時に火床面付近に垂角礫が出土したが、これは支脚としての用途が考えられる。[出土遺物] 覆土中から4が、床面で1が、PIT1から2・3が出土している。1は土師器甕である。胴部がふくらみを帯びる器形である。口縁部は欠損している。輪積み成形により器壁が立ち上げられ、外面は底部付近にケズリ、胴部は輪積み痕の上にヘラナデが施されている。内面はヘラナデにより輪積み痕が丁寧に消されている。外面底部にはムシ口圧痕が見られる。4は高台付き土師器坏の底部破片である。高台部と体部欠失している。ロクロ成形後に内面には放射状のミガキが施され、黒化处理が施されている。底面は回転糸切りにより切り離された後、底部外縁に高台をなでつけ、その後ミガキをかけている。

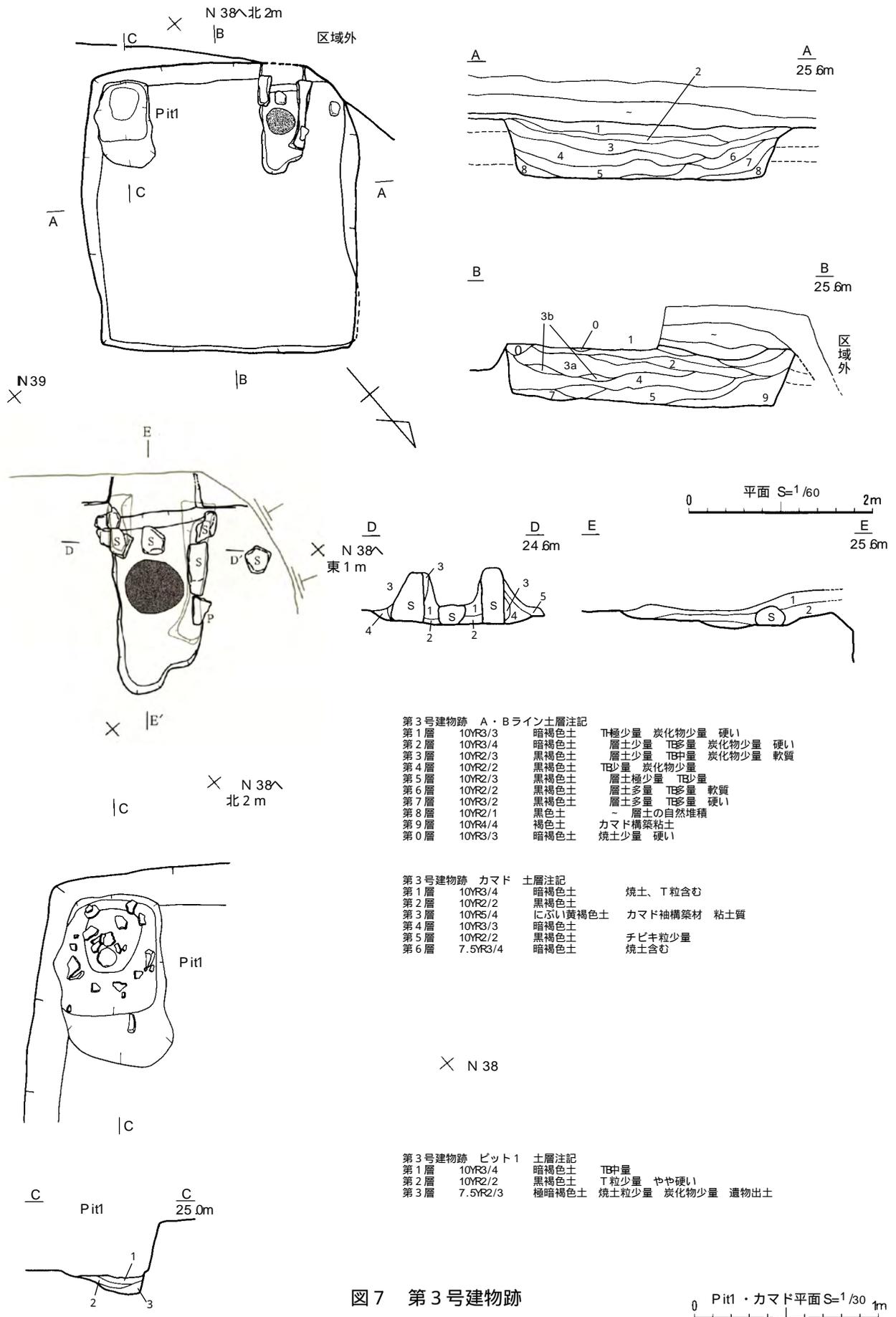


図7 第3号建物跡

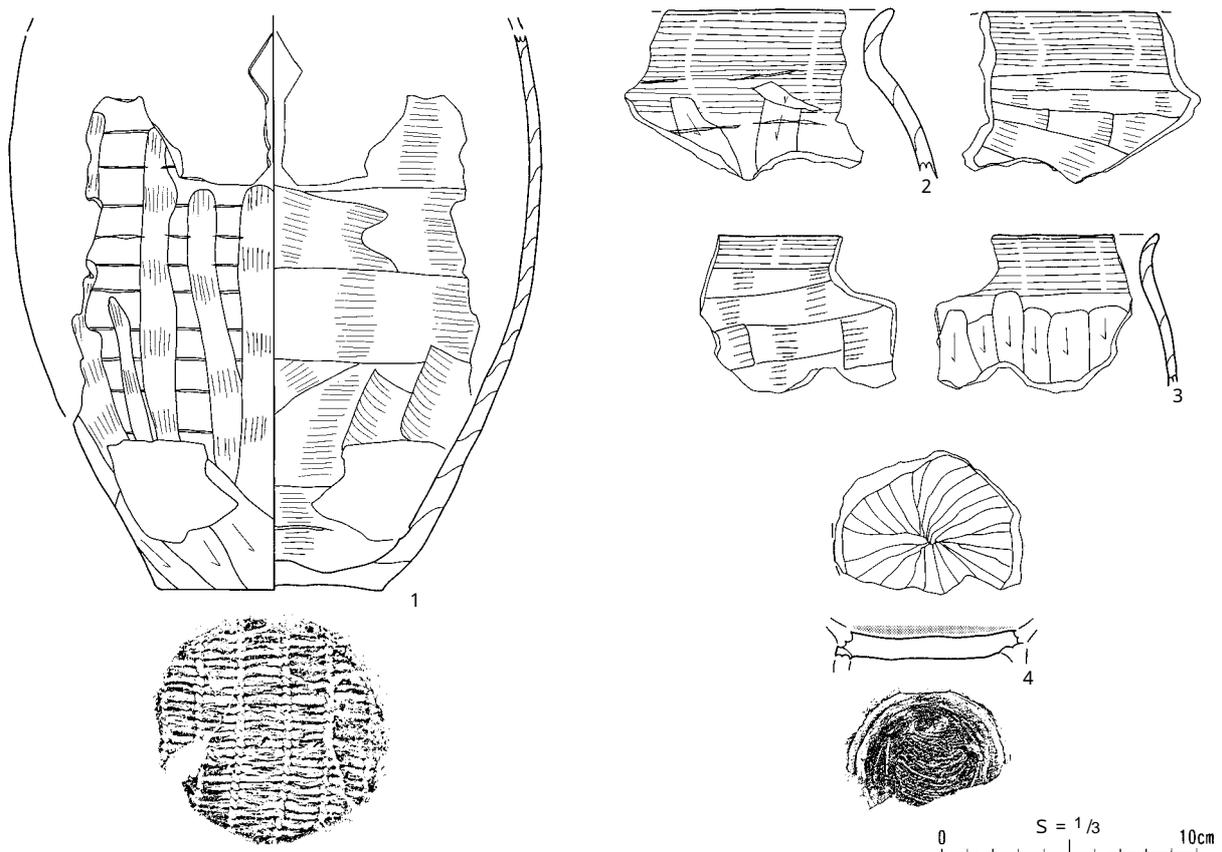


図8 第3号建物跡

第4号建物跡（図9）

[概要] 竪穴部・外周溝から構成される。竪穴部の北側約半分は調査区域外の市道下部に延びている。
 [位置・確認] IC - 54~ 55グリッドに位置する。層から層上面で確認した。[重複] 第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が古い。

竪穴部

[形態・規模] 現状では1辺約4.3mの方形を呈するものと考えられる。PIT1と3の中心を結んだ線と直角に交わるラインを主軸方位とした場合、主軸方向はN - 18° - Wである。[壁・床面] 壁は北西～西側は約0.6m残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は層を掘り込んだ掘方の上に床構築土を充填し、ほぼ平坦に構築されている。[堆積土] 8層に分層された。層起源の黒色土を主体とする。[柱穴・土坑] 床面には4基の小穴が確認出来た。いずれも壁際であり、コーナー部分とその中間に等間隔に配置されている。[カマド] 本調査区内では確認できなかったため、調査区域外に存在すると想定される。[出土遺物] 出土遺物はない。

外周溝

[形態・規模] 竪穴部を「コ」の字状に囲むように北側に開口する。先端部は上場の幅は最大0.69m、底面の幅は約0.18mであり、断面形状はほぼV字形である。深さは最大0.7mである。層～層を掘り込み底面は層である。底面には全体的に鋤痕が見られた。[堆積土] 上位層は～層起源の黒色土を主体としており、自然堆積の様相を呈する。底面付近は層などの崩落土と混合しており、堆積状況は人為と自然の2者が想定される。[付属施設] 無し。[出土遺物] 縄文土器片が出土しているが図示しうるものはない。

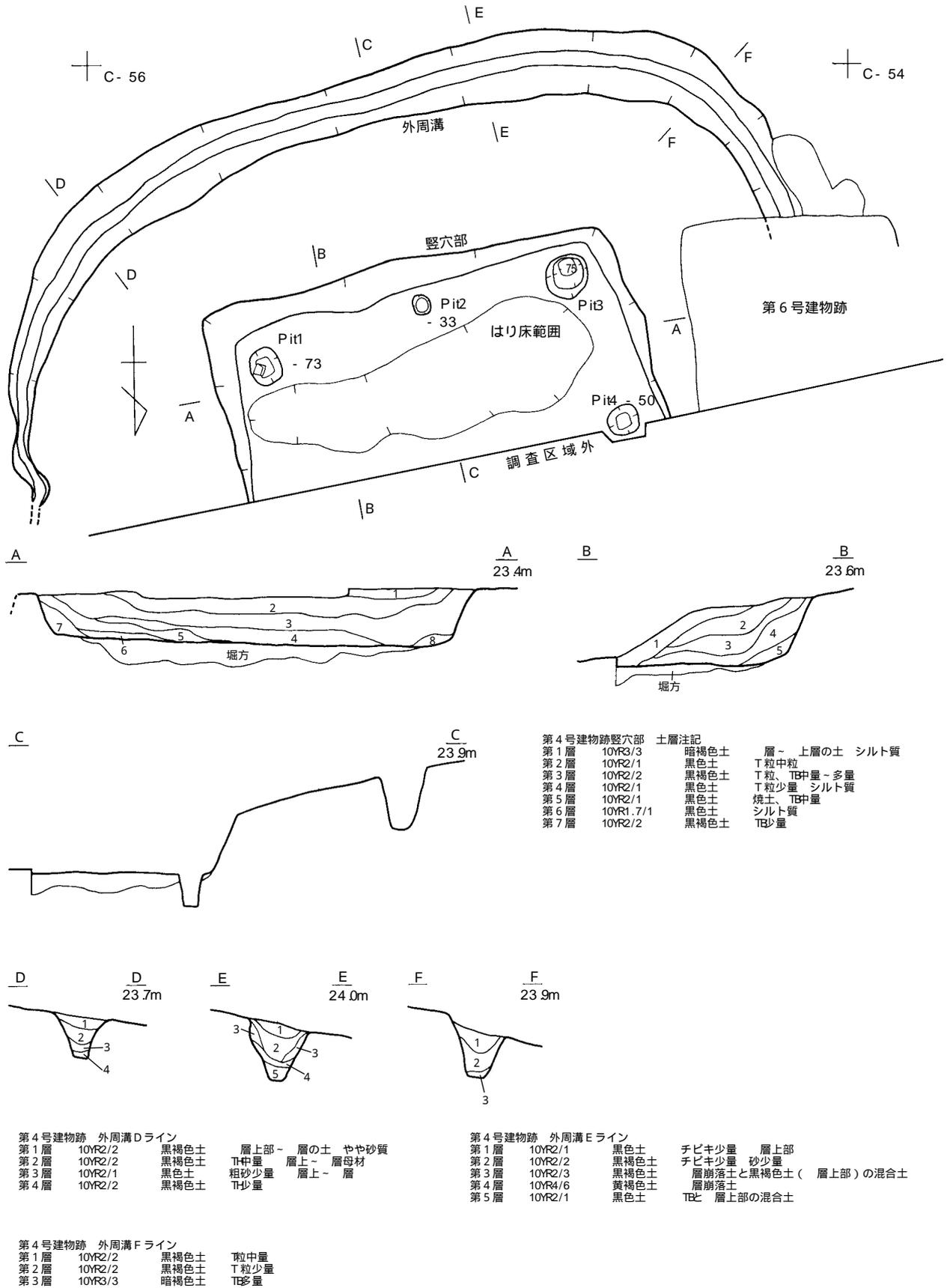
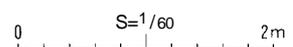


図9 第4号建物跡

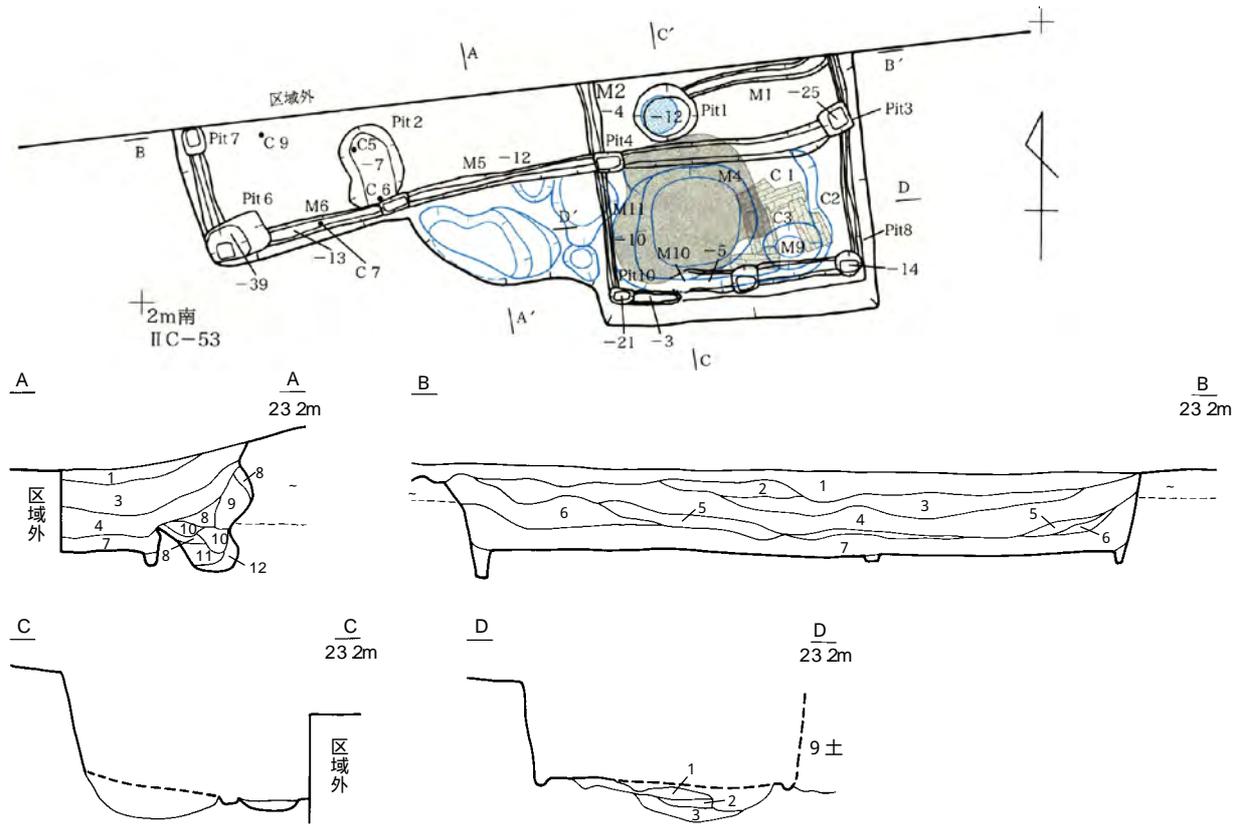


第6号建物跡(図10・11)

[概要] 現状では竪穴部のみが確認できたが、北側約2/3以上が調査区域外にあるため、掘立部の有無は不明である。[位置・確認] C-53~54グリッドに位置する。層~層上面で確認した。[重複] 第4号建物跡外周溝部分と重複関係にあるが、重複関係は不明である。また、竪穴部と張り出し部の連結部分に土坑状の部分(第9号土坑)が存在しているが、これは風倒木痕の可能性がある。

竪穴部

[形態・規模] 現状では長辺約5.2mの方形竪穴の南壁東端部に1.3m×2.1mの張出部が付属する。確認当初は2軒の竪穴住居跡が重複していると判断したため、張出部を第5号竪穴住居跡(SI-05)とし、それ以外を第6号竪穴住居跡(SI-06)として調査したが、調査終了時に一体のものとして判断したため両者を第6号竪穴住居跡として統合した。PIT3・6の中心同士を結んだ線を主軸とした場合主軸方位はN-77°-Eである。[壁・床面] 壁は約0.5~0.7m残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。竪穴部床面は~層を掘り込み、ほぼ平坦に構築されている。掘方は無い。張出部床面は層まで掘り込んだ掘方に床構築土を充填して床面を概ね平坦に仕上げている。[堆積土] 7層に分層した。・層起源の黒色土を主体とする。また、竪穴部東寄り中央付近では堆積土2~5層あたりで、大きめの礫がまとまって廃棄されている部分の確認された。これらがカマドと関連するものかどうかは不明である。[柱穴・土坑] 床面には10基の小穴と壁際を全周する溝が確認出来た。そのうちPIT3~10・溝3~10等は壁や柱を構築するための柱穴と考えられる。その中でも、PIT3・6は掘方が方形であるのに対し、PIT4・5・7は掘方が長方形であることから、柱材の形状が異なる可能性を指摘できる。PIT1・2はそれらとは異なり、やや大きめなプランと浅い掘り込みが特徴である。PIT1の堆積土中からは炭化物(粒子が層状に確認できた)が出土している。また、竪穴部床面近くからは住居構築材の一部と見られる炭化材が出土しているが、その一部を樹種同定した。結果は第6章第2節に詳しいが、張り出し部分(旧SI-5)と竪穴部分(旧SI-6)で検出された炭化材の樹種に違いが現れている。[カマド] 本調査区内には存在しない。[出土遺物] 張り出し部掘方(図10-1~8)、・覆土(図11-1~4)、竪穴部覆土(図11-5・6)から遺物が出土している。図10-1・2は土師器坏である。器壁はロク口成形で、底部から概ねまっすぐ斜めに立ち上がる。外面はロク口成形後ロク口ナデが施され、ロク口目はあまり明瞭ではない。内面は丁寧に磨いた後に黒化处理が施されている。1の底面は回転系切り技法により切り離されている。3は土師器坏であるが、1・2とはやや趣が異なる。1次成形技術は輪積みと考えられ、外面体部にはヘラケズリ、口縁内外面にはヨコナデ、内面体部にはヘラナデが見られ、土師器甕の整形技術が採用されている。4は土師器小甕である。ロク口成形の後体部下半の外面にケズリを施している。ロク口目はあまり整っておらず、全体的に軟らかな印象を受ける。底部の切り離し技術は不明であるが、底面にはナデの痕跡が見られる。7は土師器埴口縁部破片である。輪積み成形の後外面にヘラナデが散発的に施されるが、1次成形時の指頭押圧痕が明瞭に器面に残っている。内面にも輪積み痕が残るが、全体にヘラナデにより平坦に仕上げられている。



第6号建物跡 土層注記

第1層	10YR1.7/1	黒色土
第2層	10YR2/1	黒褐色土
第3層	10YR2/2	黒褐色土
第4層	10YR2/2	黒褐色土
第5層	10YR2/3	黒褐色土
第6層	10YR2/1	黒色土
第7層	10YR2/3	黒褐色土
第8層	10YR6/8	黄褐色土
第9層	10YR2/1	黒色土
第10層	10YR3/2	黒褐色土
第11層	10YR3/1	黒褐色土
第12層	10YR2/2	黒褐色土

表土 ビニール含む

TE少量	炭化物極少量
T粒少量	やや硬い
TB中量	炭化物中量
チビ土崩落土 (8-12層は第9号土坑堆積土)	
層土?	軟質
層土?	軟質
TE少量	

第6号建物跡張出部 掘方土層注記

第1層	10YR2/1	黒色土
第2層	10YR2/2	黒褐色土
第3層	10YR4/4	褐色土

掘方土層注記

TE少量	焼土粒多量	硬い
TB中量	遺物少量	
TE少量	焼土B少量	硬い

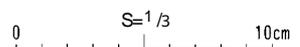
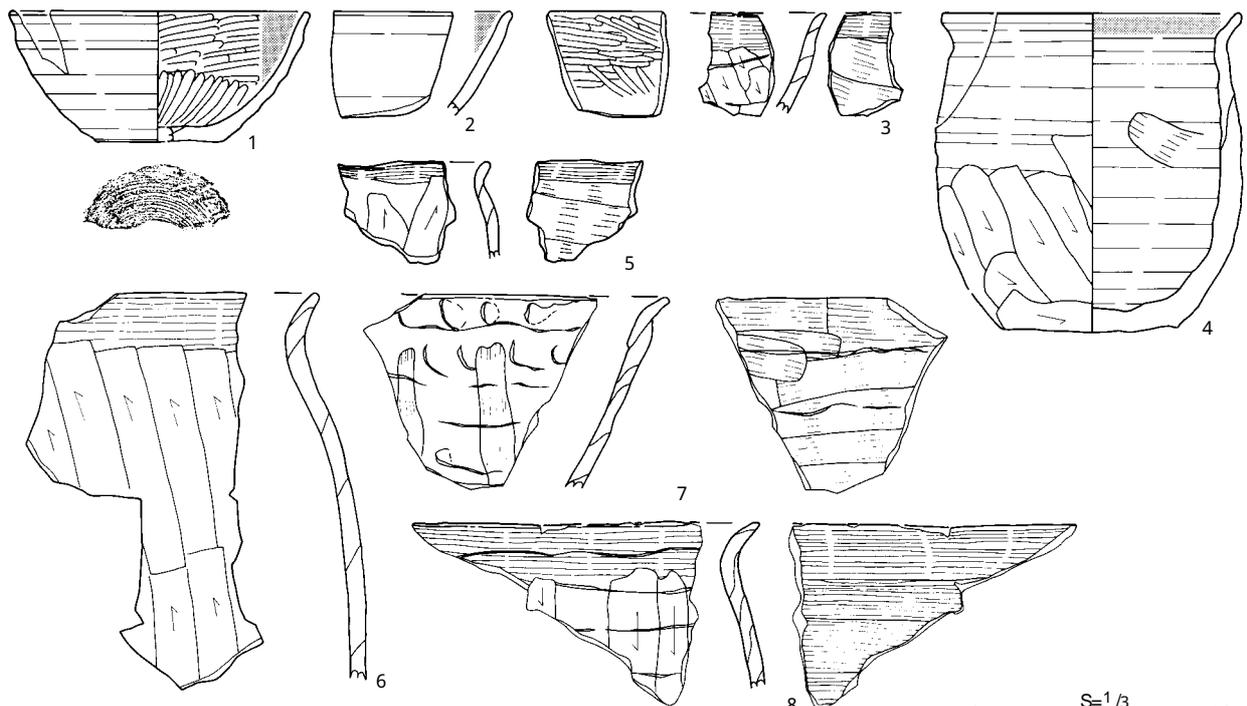
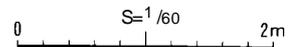


図10 第6号建物跡

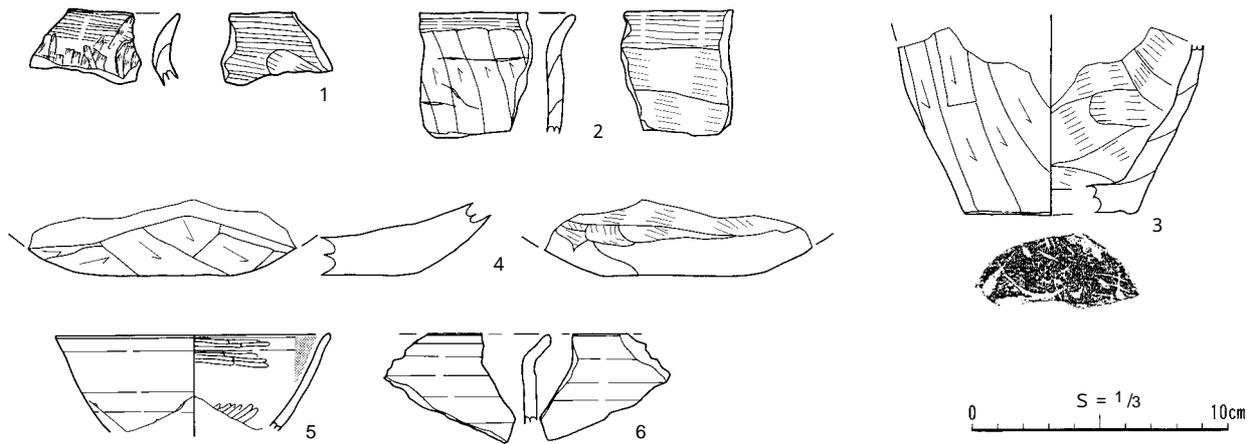


図 11 第 6 号建物跡

第 3 節 その他の遺構と出土遺物

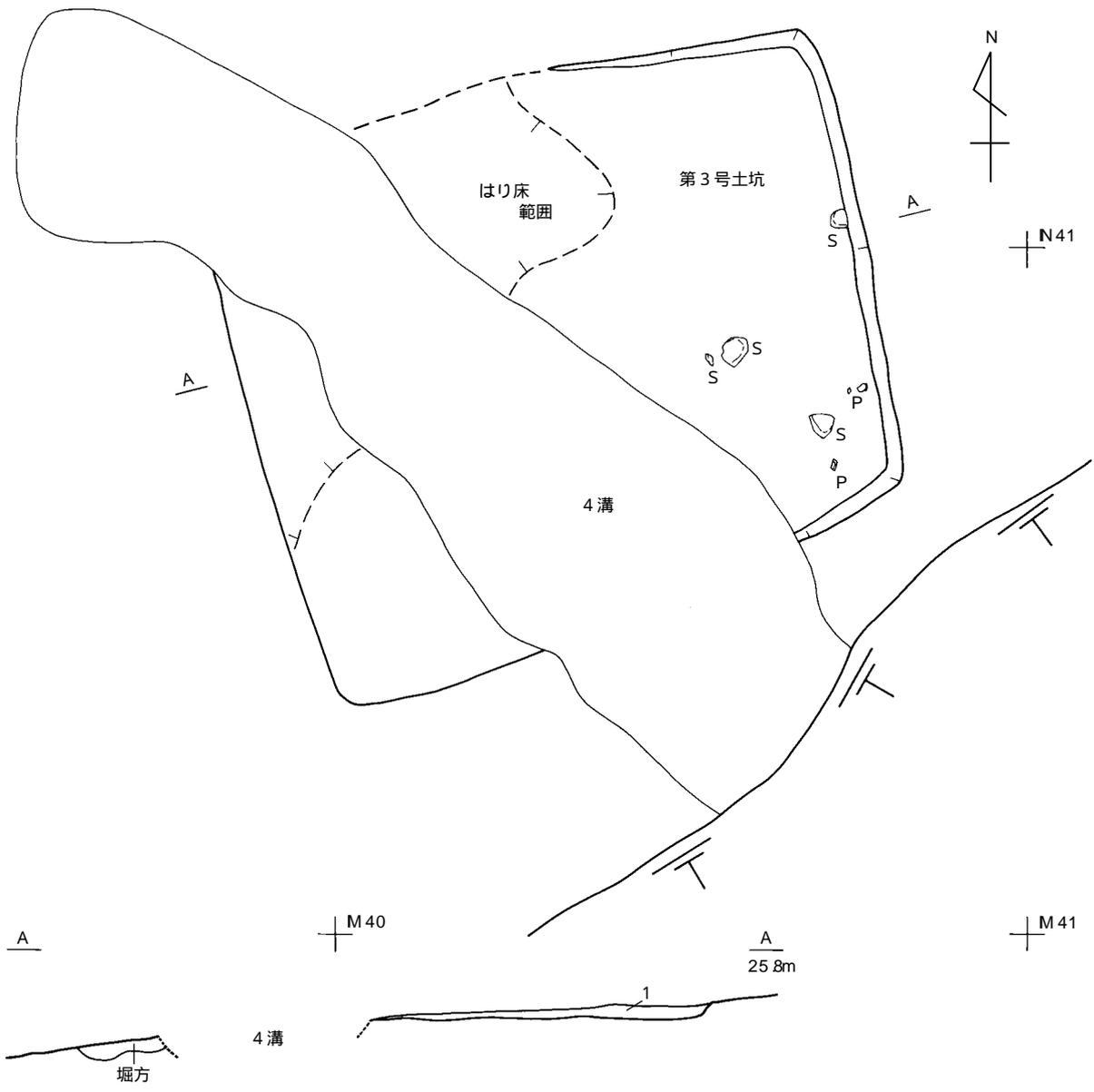
1 土坑

第 3 号土坑 (図 12)

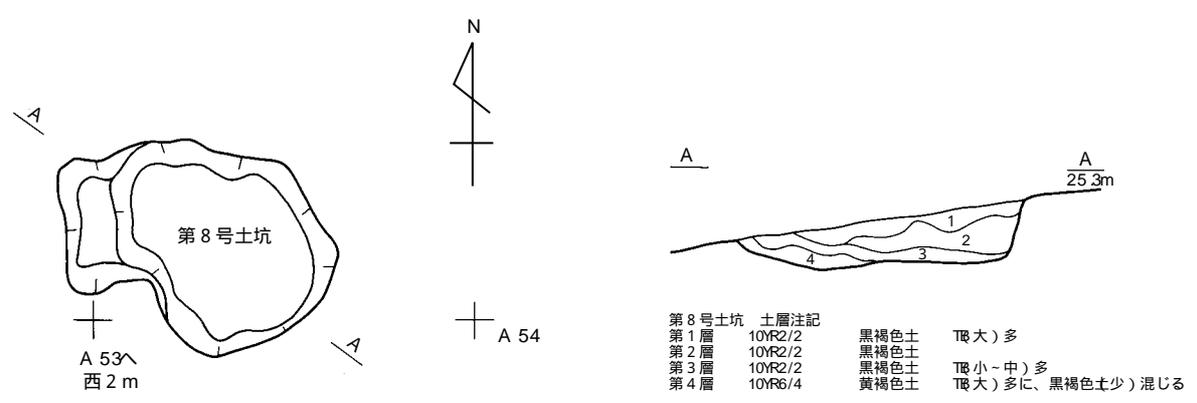
[位置・確認] I M - 40グリッドに位置する。 ~ 層で確認した。[重複] 第 4 号溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。[形態・規模] 平面形は 3.5m × 2.7m のほぼ方形を呈する。[堆積土] 東側の約半分近くのみで堆積土が確認できた。 ~ 層を母材としたややきめの細かい黒色土が主体を占めている。[壁・底面] 壁は東壁周辺のみ残存しほぼ垂直に立ち上がる。底面は東側約半分で ~ 層を掘り込んだ掘方に床構築土を充填して概ね平坦に仕上げている。[出土遺物] 土師器・須恵器の小片や礫が出土しているが、図示しうるものはない。

第 8 号土坑 (図 12)

[位置・確認] A - 53グリッドに位置する。 層で確認した。[重複] 無し。[形態・規模] 平面形は開口部が 1.4m × 1.1m の不整形、底面が 1.1m × 0.9m の不整形である。[堆積土] 全体的に ~ 層を母材とした黒色土が主体を占めている。[壁・底面] 底面は凹凸が見られる。壁のラインは不明瞭な部分が多く、風倒木痕の可能性も否定できない [出土遺物] 無し。



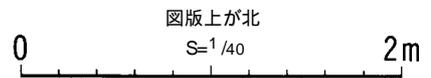
第3号土坑 土層注記
 第1層 10YR2/3 暗褐色土 細砂質、- 層母材。



第8号土坑 土層注記
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 T_大多
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 T_大多
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 T_{小-中}多
 第4層 10YR6/4 黄褐色土 T_大多に、黒褐色土(少)混じる

A 53へ
 西2m

図12 古代以降の土坑



2 溝跡

第1～3号溝跡(図13・15)

[位置・確認] I N - 42杭付近から I P - 39杭に向かって第1号 第3号の順で直線状に位置する。第3号溝跡は第1次調査のB区第1号溝跡(B1・SD01)の延長である。おそらく同一の溝跡が後世の削平により見かけ上3つに分かれて確認されたものである。本調査区内では全て 層上面で確認した。

[重複] 第1号建物跡縦穴部・第9号溝跡と重複関係にあり、本遺構がそれら全ての遺構より新しい。
[形態・規模] 第1次調査の分も含めると第1号溝の端部からB1区第1号溝端部までは約39mを測り、概ね北西-南東方向に延びている。最大幅は第3号溝跡と第1号建物跡が重複する部分で約1.4mである。断面形は底面付近がやや丸みを帯び、全体的には逆台形状を呈する。

[堆積土] 場所により堆積土の母材に違いがある。特に第3号溝跡では、底面付近に砂質の土層が層状に堆積しているのが確認できたため、堆積土の一部は水の作用により堆積したことがわかる。

[壁・底面] 底面には鋤などの工具痕が見られる箇所もある。全体に平坦ではなく、場所により高低差が激しい箇所もある。[出土遺物] 土師器・縄文土器等各時期の遺物が出土している。

第4号溝跡(図13・15)

[位置・確認] I M - 39~40グリッドに位置する。第3号土坑と同時に 層~ 層で確認した。[重複] 第3号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。[形態・規模] 平面形は確認できた範囲で長さ4.6m、最大幅1.6mの長楕円形である。長軸の方向はほぼ隣接する第1～3・5号溝跡と平行しており、本溝は第1～3号溝跡と第5号溝跡の中央よりやや第5号溝跡寄りに位置している。その平面プランの内側には長軸方向にほぼ直交するように幅約35~40cm、長さ40~70cm、深さ約5~10cmの溝がほぼ等間隔に並んでいるのが確認できた。[堆積土] 全体的にきめの細かい黒色土(層~ 層?)を主体としている。底面で確認した溝に堆積している土層は上層よりやや硬くしまっている。[出土遺物] 須恵器甕体部破片が出土している。

第5号溝跡(図13)

[位置・確認] I M - 3杭付近からほぼ北西方向に9.8m延びている。 ~ 層中で確認した。[重複] 第3号建物跡・第9号溝跡と重複関係にあり、どの遺構よりも新しい。[形態・規模] 平最大幅1.1mの溝が約9m確認できたが、第1次調査区では確認されていない。底面は凹凸が確認でき、所々高低差も見られる。断面形は概ね逆台形である。[堆積土] 全体的に ~ 層を母材とした黒色土が主体を占めている。[出土遺物] 無し。

第6号溝跡(図13・15)

[位置・確認] I O - 37・38グリッドに位置する。 層で確認した。[重複] 第9号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。[形態・規模] 平面形は長さ24m最大幅0.56mの長楕円形である。底面は凹凸が激しい。[堆積土] 全体的に ~ 層を母材とした黒色土が主体を占めている。[出土遺物] 土師器甕体部破片が出土している。

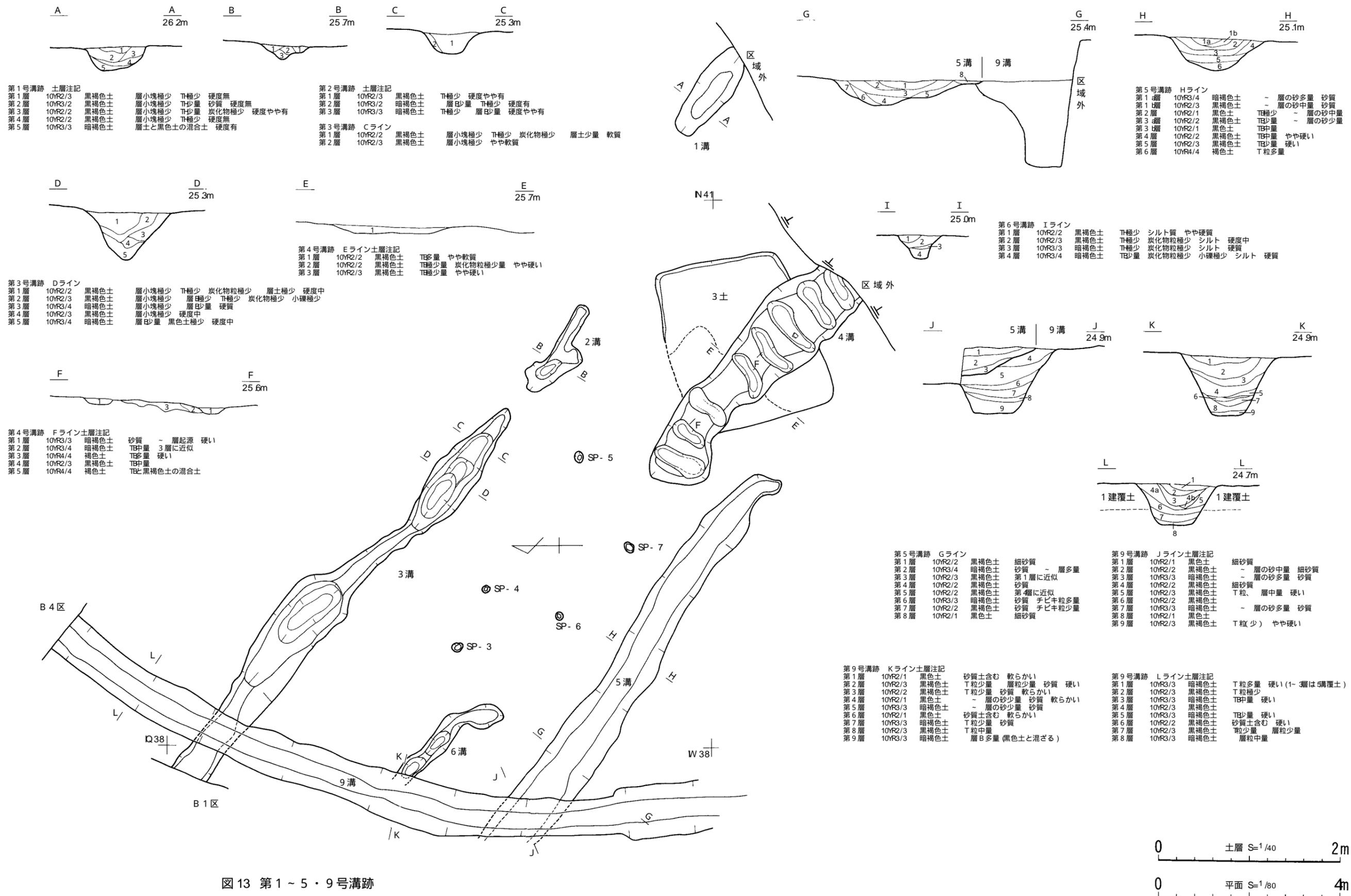


図13 第1～5・9号溝跡

第8・9号溝跡(図13・14・15)

[位置・確認] 同一の溝が、別調査区を挟んで確認されたため、違う番号を付している。西側から第9号溝跡・青森市教委第1号溝跡(S D 01)・第8号溝跡の順で続いている。西側では 層上面、東側では 層～層上面で確認した。[重複] 第9号溝跡部分で第1・3号建物跡、第3・5号溝跡と重複関係にあり、建物跡より新しく溝跡より古い。[形態・規模] 最大幅(上場の)1.4m・確認面からの深さは最深1mを測る。断面形はほぼ逆台形の部分が多い。底面には鋤と見られる工具痕が2列並んでいる部分が見られる。[堆積土] 第8号溝跡部分では基本層第 層に類似した砂質土が底面近く等に層状に堆積しているのが確認できたため、本遺構は埋没過程で水の影響を受けた可能性がある。[出土遺物・時期] 第8号溝跡からは、縄文土器・土師器・須恵器・古代の製塩土器・支脚・陶磁器・古銭など様々な時代・種類の遺物が出土している。特に製塩土器は本遺構周辺にまとまって出土している。また、第4号土器埋設遺構付近の確認面からは寛永通宝(図15-8溝-25)が、堆積土からは肥前系磁器皿の口縁部破片が出土している。第9号溝跡では、第1号建物跡と重複する箇所から古代の遺物がややまとまって出土している。また、その付近から得られた炭化材を放射性炭素年代測定にかけた(第6章第1節参照)が、この炭化材はおそらく第1号建物跡に伴うものであると考えられる。以上、堆積状況・他の遺構との重複関係・出土遺物から、本遺構は古代以降近世以前に構築・廃絶された溝跡と考えられる。

第1号溝跡(図14)

[位置・確認] C - 57グリッド付近から B - 50グリッド付近に位置する。層上面で確認した。[重複] 無第4号建物跡・第13号溝跡と重複関係にあり、本遺構がどの遺構よりも新しい。[形態・規模] 最大幅約30cmの溝がやや蛇行しながら概ね東西方向に約21m走行している。確認面からの深さは最大で40cmで、断面形は皿状または逆台形である。[堆積土] 全体的に 層を母材とした黒色土が主体を占めている。[出土遺物] 無し。

第12号溝跡(図14・15)

[位置・確認] S-48・49グリッドに位置する。層で確認した。[重複] 無し。[形態・規模] 最大幅60cmの溝がL字に屈曲している。溝全体の長さは6.2mであるが、屈曲した部分を境に長い部分は5m、短い部分は1.2mを測る。断面形状は半円形に近い。[堆積土] 全体的に灰・炭化物・焼土粒などが主体である。[出土遺物] 無堆積土中及び確認面から土師器・須恵器・陶磁器が出土している。図15-12溝-2は播鉢の体部破片である。胎土には砂粒を多く含み、硬質である。内外面には鉄釉が塗布されている。内面にはハケメが見られる。釉調から近代に属する播鉢の可能性はある。

第13号溝跡(図14)

[位置・確認] B - 51・52グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複] 第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。[形態・規模] 最大幅40cmの溝がほぼ南北方向に約5m走行している。断面形は箱形であり、確認面からの深さは最大30cmである。[堆積土] 灰や 層を母材としている。人為的な堆積状況を呈する。[出土遺物] 無し。

3 柱穴跡 (図 16)

本調査区内では、4カ所で小規模な柱穴群を確認した。そのうち第1号柱穴群は、青森市教委2002年度調査区で発見されたS B - 02の続きと考えられる。以降の重複関係からは、古代の建物跡であるS I - 7の上面に位置することから古代以降の所産であることは確実であろう。その用途は、調査区内にかつてあった（現在は宮田の大イチョウの脇にある）庚申年（文化四年〔1808〕五月十九日銘）青面金剛童子の石碑を祀る施設（参道など？）に関連する可能性がある。青森市教委調査区のS I - 7第1層（遺構外扱い）から出土した陶磁器は18～19世紀のものと考えられている。他の柱穴群はその配置や堆積土から規則性は見いだせないため、性格等は不明である。

第1号柱穴群 (S P - 1・2)

[位置・確認] I P・I Q - 45グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複]無し。

[形態・規模・堆積土]それぞれの形状と規模については下表を参照。堆積土には柱痕と裏込め土が明瞭に確認できた。[出土遺物]無し。

遺構名	確認面の規模 (cm)	底面の規模 (cm)	確認面からの深さ (cm)	平面形	断面形
SP-1	40x 38	35x 25	62	円形	長角箱
SP-2	30x 30	20x 16	50	円形	長角箱

第2号柱穴群 (S P - 3～7)

[位置・確認] I N・I O - 38・39グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複]無し。

[形態・規模・堆積土]それぞれの形状と規模については下表を参照。[出土遺物]無し。

遺構名	確認面の規模 (cm)	底面の規模 (cm)	確認面からの深さ (cm)	平面形	断面形
SP-3	24x 20	15x 12	8	円形	長角箱
SP-4	16x 15	9x 8	5	円形	長角箱
SP-5	25x 20	11x 7	20	円形	長角箱
SP-6	17x 15	12x 8	6	円形	長角箱
SP-7	15x 20	19x 14	30	円形	長角箱

第3号柱穴群 (S P - 8～10)

[位置・確認] I S - 50グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複]無し。

[形態・規模・堆積土]それぞれの形状と規模については下表を参照。[出土遺物]無し。

遺構名	確認面の規模 (cm)	底面の規模 (cm)	確認面からの深さ (cm)	平面形	断面形
SP-8	28x 24	14x 12	27	円形	長角箱
SP-9	32x 23	12x 9	15	円形	長角箱
SP-10	25x 24	9x 8	27	円形	長角箱

第4号柱穴群 (S P - 11～15)

[位置・確認] I T - 51・52グリッドに位置する。層上面で確認した。[重複]無し。

[形態・規模・堆積土]それぞれの形状と規模については下表を参照。[出土遺物]無し。

遺構名	確認面の規模 (cm)	底面の規模 (cm)	確認面からの深さ (cm)	平面形	断面形
SP-11	18x 16	9x 9	19	円形	長角箱
SP-12	23x 24	10x 10	17	円形	長角箱

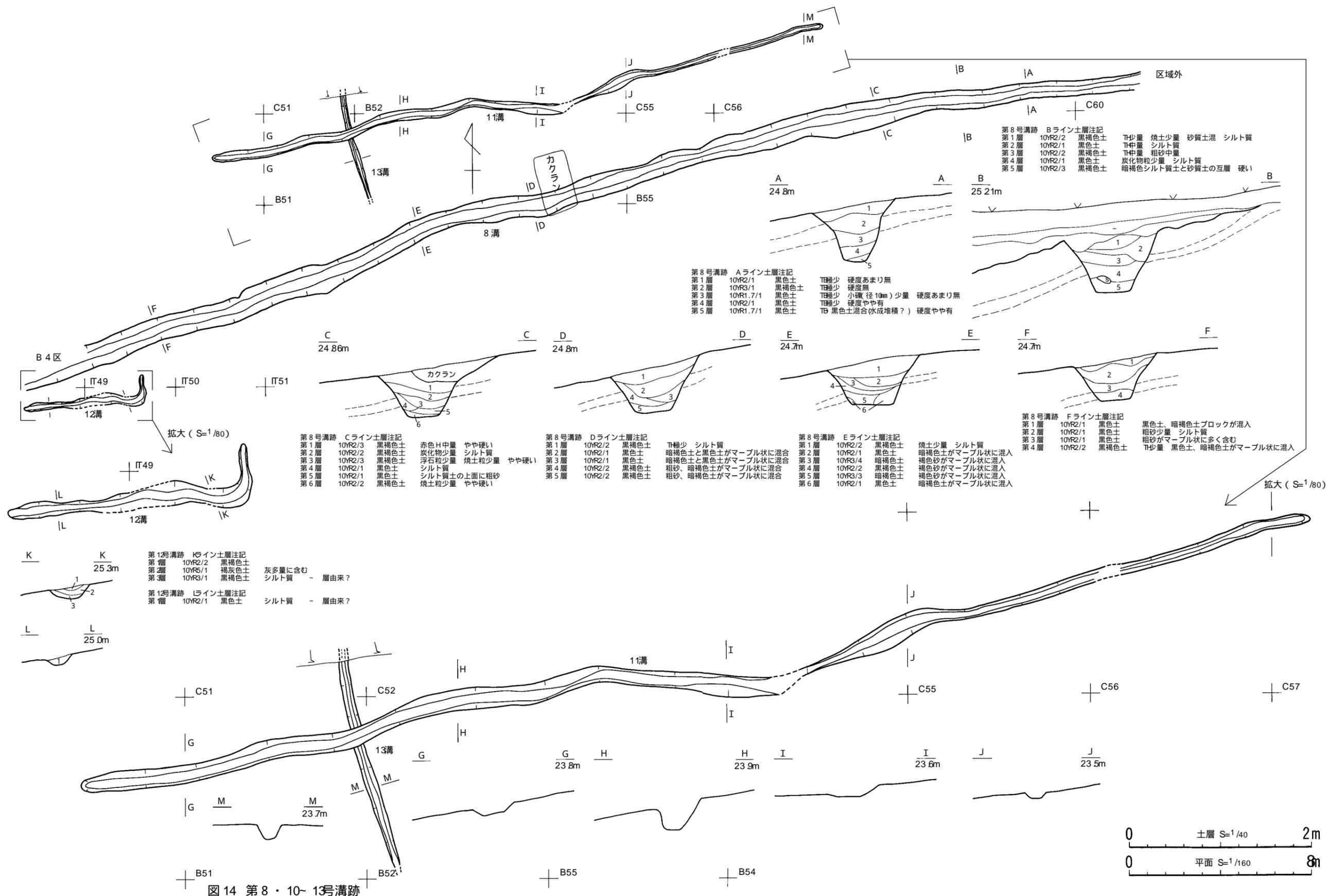


図14 第8・10~13号溝跡

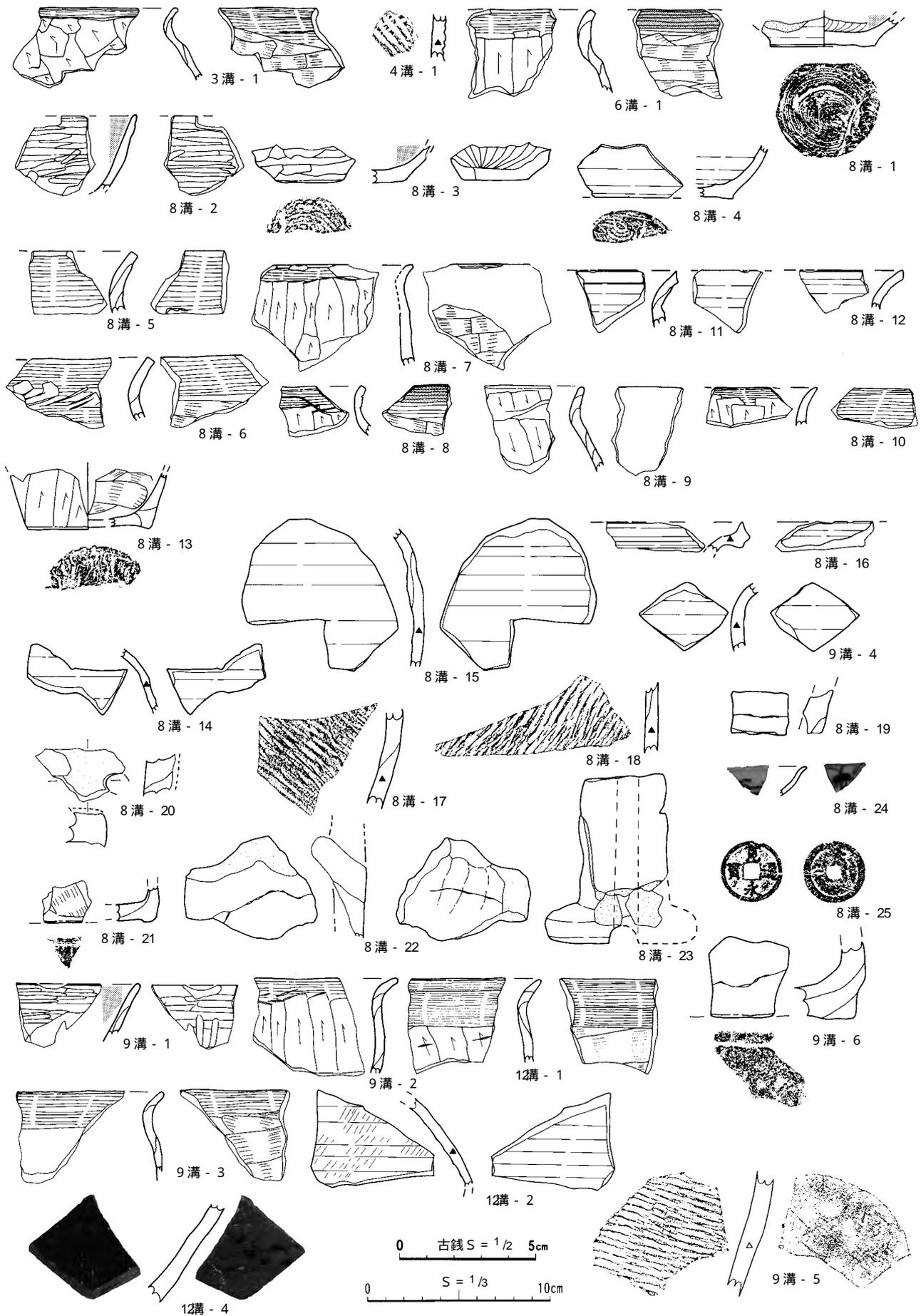


図15 溝跡出土遺跡

遺構名	確認面の規模 (cm)	底面の規模 (cm)	確認面からの深さ (cm)	平面形	断面形
SP-13	24x 20	11x 10	17	円形	長角箱
SP-14	35x 34	22x 20	14	円形	長角箱
SP-15	30x 24	16x 12	17	円形	長角箱
SP-16	45x 37	16x 13	27	円形	長角箱

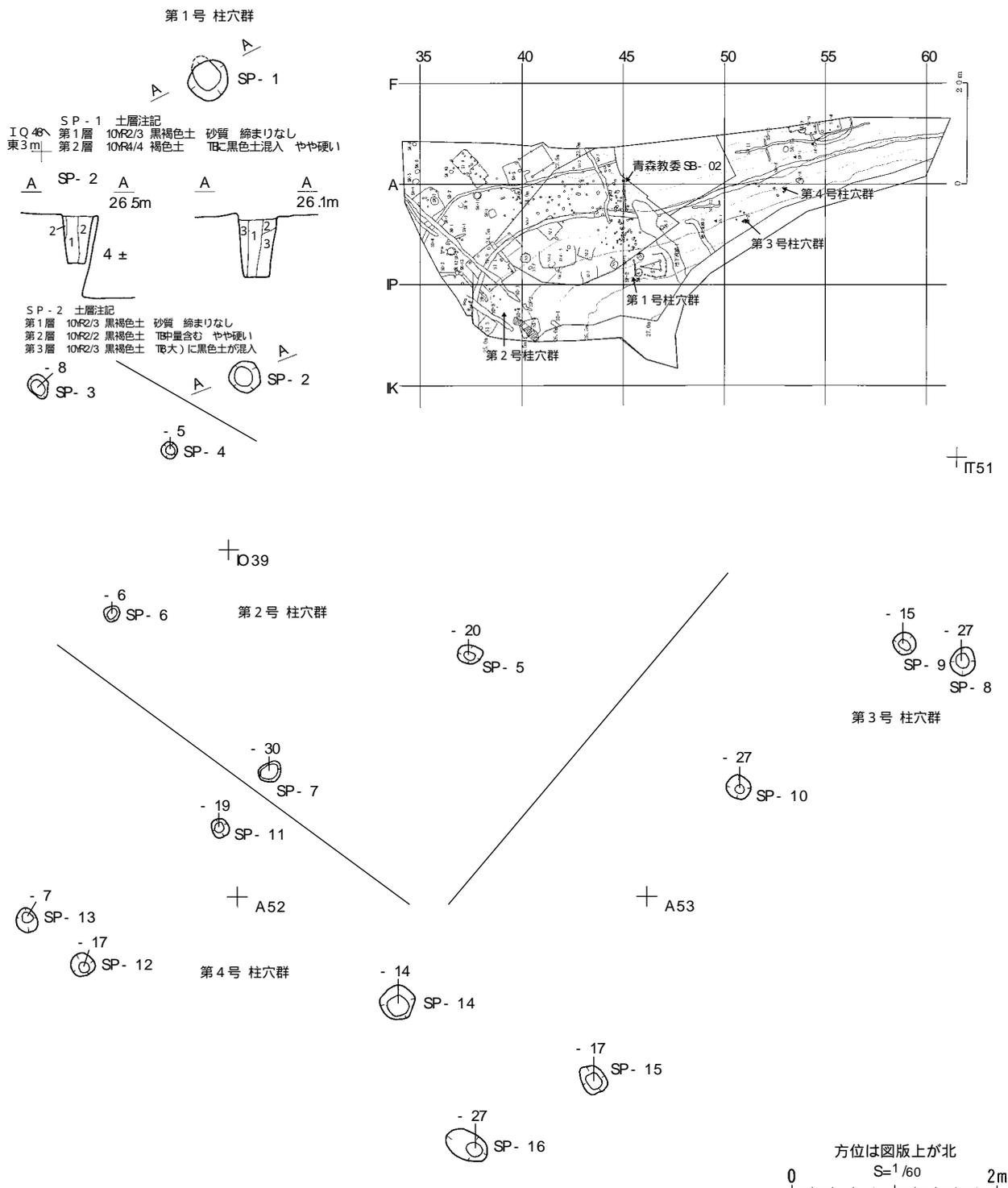


図16 柱穴跡

第5章 遺構外出土遺物

第1節 遺物の出土状況

遺構外における遺物の出土状況

第3章図3-1に示したように、調査区の大半は耕作による削平が激しい。したがって、削平を受けた部分（調査区西側）では、遺構外からの遺物出土が極端に少ない。またこの部分では近現代のものと考えられる陶磁器の出土が多い。逆に削平による影響が少ない部分（調査区東側）については、斜面地であるため厳密ではないものの、ある程度層位的に遺物の出土状況を確認できた。この箇所については、層中に縄文時代前期末葉の円筒下層d式土器の遺物集中地点が確認され、層上部から層より上位で古代の遺物と近世遺構の遺物が散発的に出土している。なお、古代以降の遺構内から出土した縄文土器・石器は遺構外扱いとして本章で紹介している。詳しい出土状況については観察表を参照されたい。

第2節 縄文～弥生（続縄文）時代の土器

本調査で出土した遺物の分類については、第322集『宮田館遺跡』の分類を一部変更し、以下の様に大別した。

縄文土器	
群...前期後葉の土器	群...中期前葉～後葉の土器
群...中期末葉～後期初頭の土器	群...後期前葉の土器（今回出土せず）
群...後期中葉～晩期前葉の土器	群...晩期中葉以降の土器（今回出土せず）

弥生土器	
群...今回出土せず。	群...中期末から後期初頭の土器。 群...後期の土器。

縄文土器

群土器（図17・18-30～34）

本調査で最も数多く出土した土器である。42ページ下段には遺構外における破片の分布状況を示した。この分布はそのまま遺物集中地点の範囲を示している。詳しくは第4章を参照されたい。

出土した土器は、主に文様及び原体の種類と口唇部断面形状との組み合わせにより下記のように分類できた。なお、器形に関しては復元できたものが少数であったためはっきりとしたことは言いえないが、ほとんどが円筒形深鉢になると考えられる。しかし、中には図17-17・22のように口縁部直下でふくらみを持つものも見られる。これらは円筒土器以外の異系統土器群（大木式か？）の影響が考えられる。特に17の口縁部下端につけられたボタン状の貼り付けや、22の口縁部突起や頂部への刺突文・口唇端部の比厚状況は大木6～7a式に見られる属性である。

各属性の分類項目及び土器の観察項目は次の通りである。

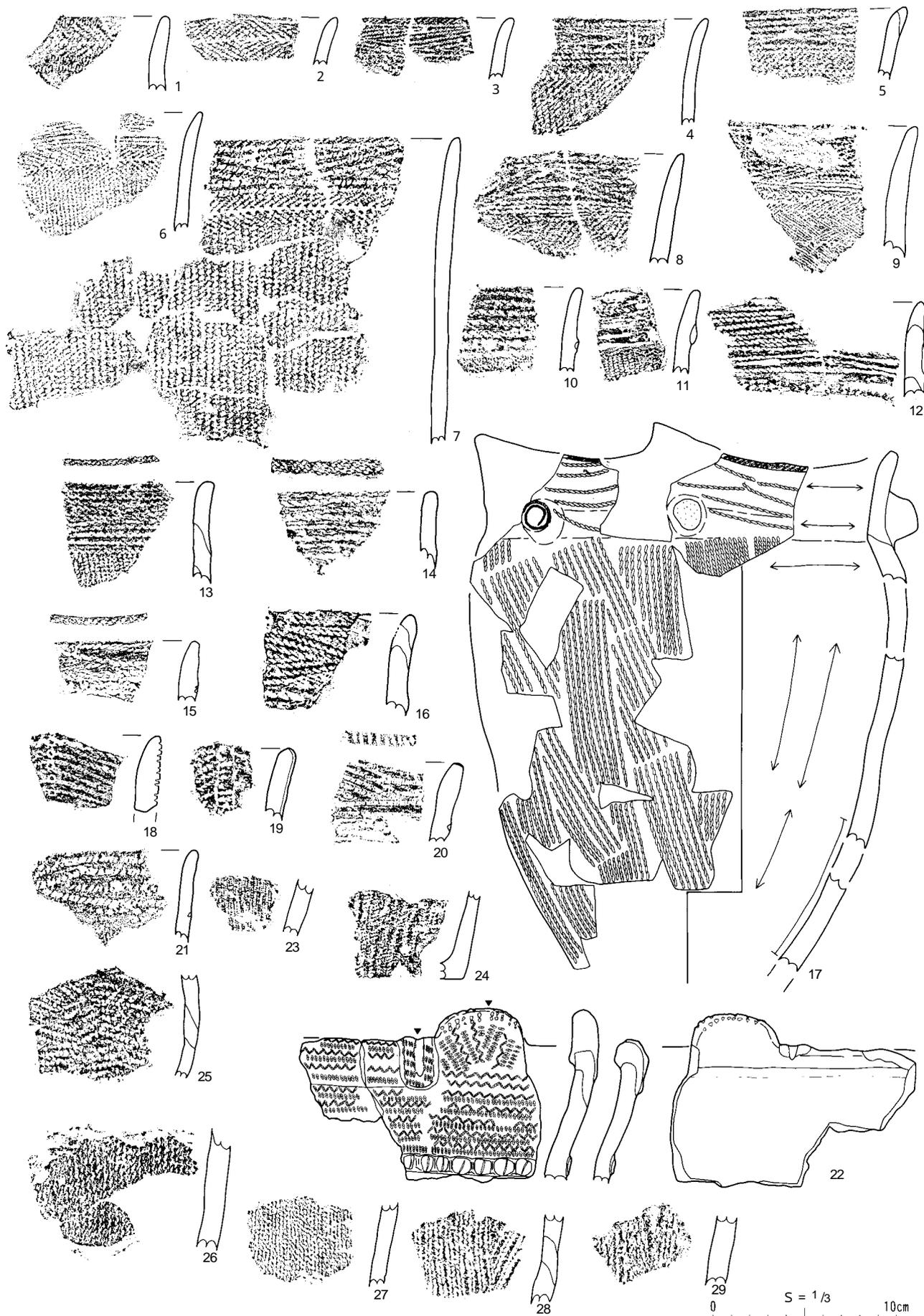


図 17 遺構外出土遺物

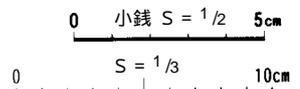
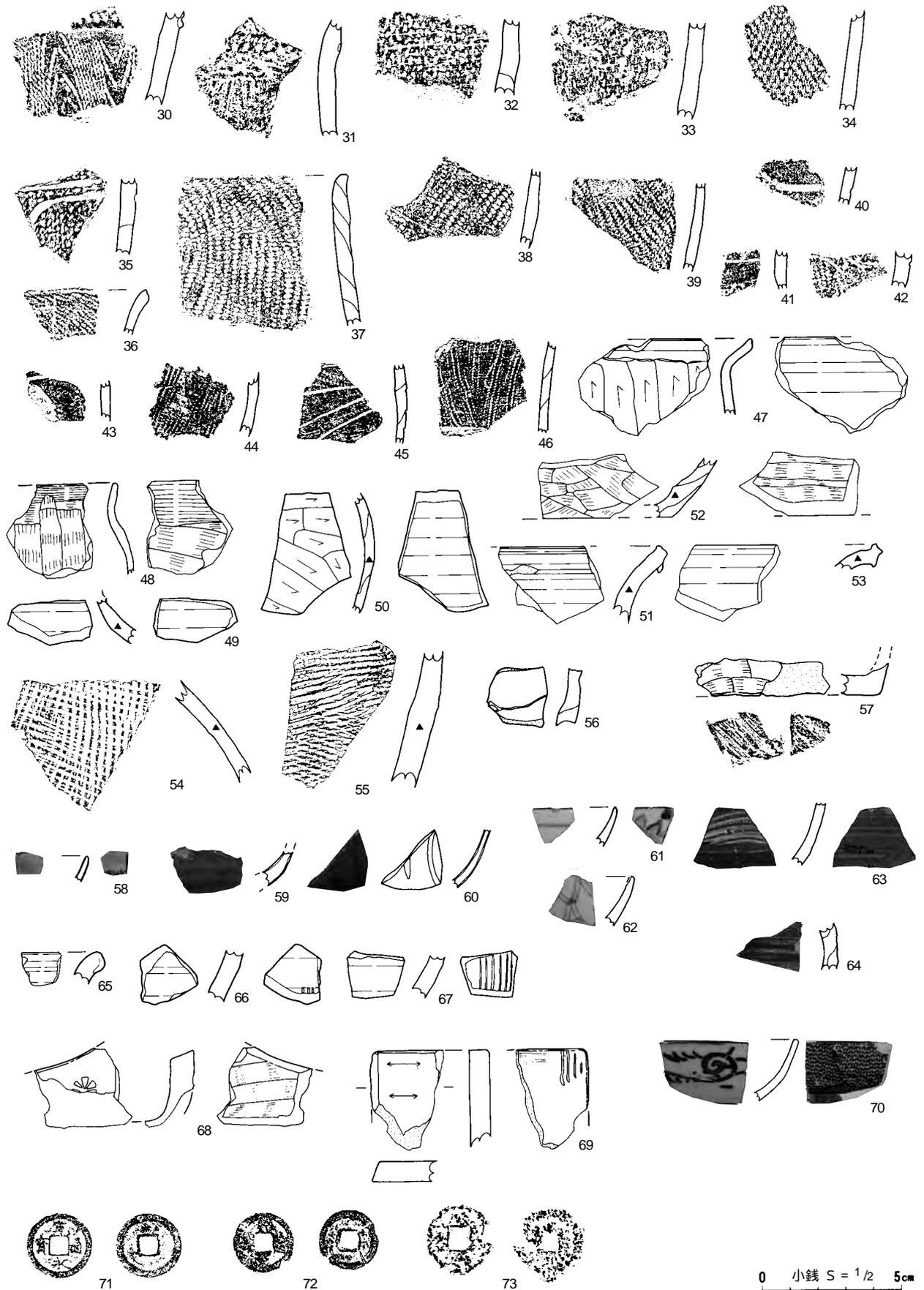


图 18 遺構外出土遺物

縄文土器 群の属性観察項目

器形

- A : 円筒形深鉢
- B : やや胴部にふくらみを持つ深鉢

口唇部断面形状

- a : 先端部が内削ぎ状に尖るもの。
- b : 先端部が丸みを帯びるもの。
- c : 先端部がやや角張るもの。
- d : 先端部が剣先状に尖るもの。
- e : 先端部が内側に比厚するもの。

口縁正面形状

- a : 平口縁。 b : 弱波状口縁。 c : 波状口縁。
- d : 平口縁 + 突起附加。

口唇端部加飾位置と装飾の種類

- a : 縄文原体の回転施文。
- b : 縄文原体の側面厚痕。
- c : 断面の丸い棒状工具による刻み。

区画帯の種類

- a : 隆帯 b : 微隆帯 c : 縄文原体の側面圧痕
- d : 区画帯無し

口縁部文様帯の幅 (区画帯上面まで)

刺突の工具と施文方法

- a : 丸棒状工具。 b : 角棒状工具。 c : 管状工具。 d : 半裁管状工具。 e : 縄文原体
- 1 : 先端が尖るもの。 2 : 先端が丸いもの。

胴部文様の構成

- a : 全面単一文様。 b : 上下2分割。
- c : a + アクセント的施文。

底部付近の調整

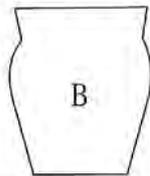
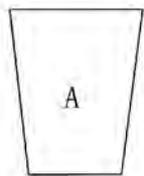
- a : 調整無し。 b : ミガキ調整。

胎土中への繊維の混入度合い

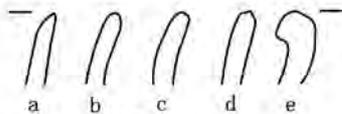
- a : 無し。 b : 少量。 c : 多量。

内面調整

- a : ミガキ。 b : ナデ。



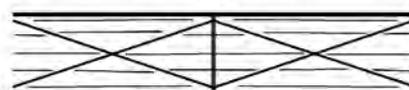
縄文土器第 I 群の器形



口端部の断面



口縁部文様構成 1 類 a



口縁部文様構成 2 類 a



口縁部文様構成 3 類 a



口縁部文様構成 4 類



口縁部文様構成 1 類 b



口縁部文様構成 2 類 b



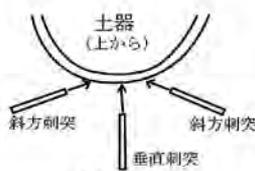
口縁部文様構成 3 類 b

- 口縁端部ライン
- 縦位区画
- 主文様
- 従文様

口縁部文様帯の文様構成模式図



押圧の手法



刺突の手法



口唇端部の施文部位

縄文時代第 I 群土器の観察項目及び分類

以上の観察をした後、主に口縁部文様・口唇部断面形状等により以下のように細分した。

1類(図17-1・4) ... 口縁部に縄文原体の回転施文と側面圧痕が見られるもの。

口唇部断面形状はaが基本である。口縁部には結束第1種・単軸絡条体第5類などが横位に回転施文される。縄文原体の口縁部への横位回転施文は、円筒下層b2~c式の津軽地方によく見られるが、下層d式直前においてもわずかに残る要素である。ちなみにこの類はちょうど下層c式と下層d1式の間のような様相を持つと考えられる。

2類(図17-3・5~16・18~21) ... 口縁部に縄文原体の側面圧痕による文様が展開するもの。

口唇部断面形状と器厚により2つに細分される。

a: 口唇部断面形状がa。器厚が6~8mm前後のもの。(図17-3・5~8・10・11)

口縁部文様帯には縄文原体の側面圧痕による幾何学的な文様が展開する。具体的には連続する山形の側面圧痕の間を水平ないし斜行する側面圧痕で埋めていくもの(文様構成1類)(3~8)が多い。胴部文様との区画には縄の側面圧痕が2条ないし3条使用されるものや微隆帯(10・11)によるものがある。側面圧痕の原体にはLRやR・Lの他に単軸絡条体第1類(自縄自巻きの可能性もあり)等も見られる。口唇端部にはLR等の縄が回転施文されているものがあるが、施文位置は基本的に端部前面である。内面はきれいに磨かれているものがほとんどで、胎土中には繊維を多量に含んでいる。

b: 口唇部断面形状がb~c(aも少量)。器厚が10mm前後のもの。(図17-9・12~21)

a同様に口縁部文様帯には縄文原体による側面圧痕により幾何学的な文様が展開するが、文様構成1類(9)に加え、文様構成2類(山形の頂部がずれ、横方向に連続する菱形文を形成し、その間を側面圧痕で埋めるもの)(13・16)が見られる。また、aと比して文様構成3類a(単純に水平基調の文様構成)(12・14)や、文様構成3類b(波状の口縁部に沿った平行圧痕)(18・19)が増え、その波頂部から縦位に側面圧痕や隆帯・刺突列などが垂下するものも見られる。口唇端部には縄文原体の回転施文や棒状工具による刻みなどが見られるが、その施文位置は端部上面が基本である。なお、18は透かし孔を持つ。口縁部文様帯と胴部の区画には縄文原体の側面圧痕に加え、微隆帯が見られる。胎土には基本的に繊維を多量に含むが、18・19などにはそれほど含まれていない。

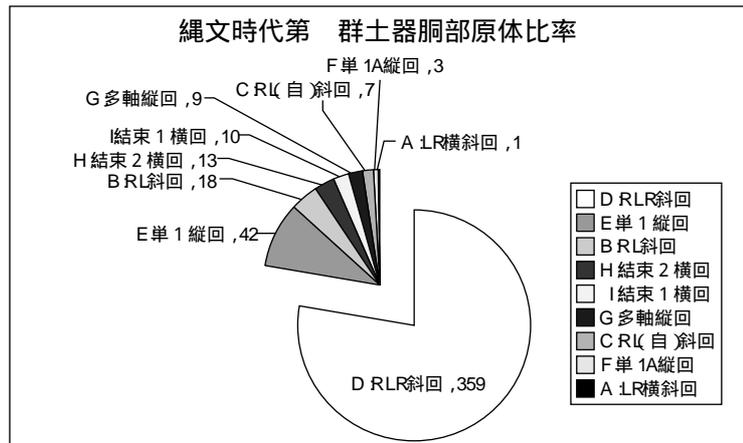
3類(図17-17・22) ... 器形Bの深鉢形土器を一括した。

17は波状口縁を持ち、口唇端部上面にはLRが回転施文されている。口縁部文様構成は3b類で、波頂部及び波底部の口縁部文様帯下端には大振りなボタン状突起が附される。胴部には単軸絡条体第1類が縦位に回転施文されている。胎土には繊維を大量に含み、断面内部は黒色を呈する。22は口縁部破片である。平口縁に半円状の突起が付き、その脇にはU字状に粘土紐が附加される。突起の端部には半裁管状工具と見られる工具による刺突が施される。口唇部は内側に比厚する。口縁部文様帯は下端が隆帯で区画され、その上位に単軸絡条体第1・5類の側面圧痕が見られる。隆帯上面には指頭押圧が見られる。胎土には繊維がほとんど含まれず、砂粒が目立ち、全体に硬質な感じがする。

胴部及び底部破片(図17-23~34)

1,200点出土した中から代表的なもの12点を図示した。本調査で出土した群土器の胴部文様にはLR斜位回転・RLの斜位回転・RLRの斜位回転・単軸絡条体第1類縦位回転・単軸絡条体第1類縦位回転・多軸絡条体縦位回転等の種類が見られた。各文様は原体の細かな観察と組み合わせによりさらに数種類に分けられる。次ページのグラフにはその種類毎の出現率を示した。

- A L R 横位・斜位回転。
- B R L 斜位回転。
- C R L (自条自巻的) 斜位回転。
- D R L R 斜位回転。
- E 単軸絡条体第 1 類縦位回転。
- F 単軸絡条体第 1 A 類縦位回転。
- G 多軸絡条体縦位回転。
- H 結束第 2 種横位回転。
- I 結束第 1 種横位回転。
- J 文様判別不能。



グラフから読みとれるのは、圧倒的にRLRの斜位回転が多いことである。また、結束第1種羽状縄文は単独で器面全体に施文されることはなく、口縁部直下や胸部中位などにアクセント的に用いられる事が多い。

群土器 (図 18- 35・ 36)

縄文時代中期中葉～後葉に属する破片が2点出土した。35はR L R 斜位回転後に沈線を施文している。概ね榎林式ととらえられる。36は口唇端部が角頭状に仕上げられており端部外面にLRが横位に回転施文されている。概ね円筒上層e式ととらえられる。

群土器 (図 18- 37~ 40)

37はやや胸部中位が膨らみ気味の器形になりそうである。外面にはR L R が横位または斜位に回転施文されている。断面観察では接合痕が外傾しているのが確認できた。39は直前段多条のR L が横位に回転施文されている。40は断面の丸い幅広な沈線が施文されており、他の部分は沈線施文後に磨かれている。

群土器 (図 18- 41~ 43)

41は内外面共に磨かれており、幅が狭く施文の浅い沈線も見られる。器種は不明であるが、頸部付近の破片である可能性がある。42には節の細かいR L が斜位回転された後沈線が施文されている。

弥生土器

群土器 (図 18- 44・ 45)

44は胸部破片のためこの時期かどうか不確定であるが、縄文の施文状況と胎土等の特徴から本群に収めた。45は甕もしくは壺形土器の胸部破片である。斜位及び横位に施文された沈線間に縄文が施文されている。この縄文は条の間隔が広く、一見巻きの疎な単軸絡条体第1類に思えるが、節の傾きが条に対して90°に近いくらい鈍角であることから、単軸絡条体第1類ではないことがわかる。この文様の原体は「不均等撚り合わせの縄」(石本 1984)、自縄自巻の縄文(遠藤 1988)等と呼ばれているものである。その正体は様々な可能性が考えられるが、現時点では自条自巻の縄文の可能性が高いと考えている。(詳しくは第 2 章第 2 節参照)

群土器 (図 18- 46)

46は甕の口縁直下の破片である。破片下端には沈線が横位に施文されている。表面には図 18- 45と同じ文様が縦位に見られる。

第3節 平安時代の遺物

遺構外における平安時代遺物の出土状況は、遺構周辺にまとまり、他の部分では極少量であった。図18-47・48は土師器甕の口縁部破片である。図18-49～55は須恵器破片である。図18-56・57は製塩土器の破片である。製塩土器は、第1号建物跡・第8号溝跡から出土している。製塩土器の遺構外における分布状況については、第8号溝跡周辺にまとまる傾向がある。これはこの付近が削平の影響が少ないためであり、本来的には他の地区にも分布していた可能性がある。平安時代の遺物に関する分類等詳細については第4章第4節を参照されたい。

第4節 中世以降の遺物

中世の陶磁器…中国産青磁碗の破片が3点出土した。58は碗?の口縁部破片である。色調は全体的に淡い緑である。59は碗の体部破片である。60には体部に蓮弁文が見られる。表面は透明釉で覆われ、貫入が見られる。釉厚は約0.5mm程度である。胎土は灰色もしくは灰白色であり胎土中には黒色の粒子が所々に見られる。14～15cの所産と考えられる。

近世の陶磁器…陶器と磁器が出土した。ほとんどが破片であるため、そのうち代表的なものを7点実測し、他に5点の写真を掲載した。61・61は磁器碗の口縁部である。筆により文様が描かれている。62は外面に網目文が見られる。両者とも肥前系 期の所産と考えられる。63は陶器碗の体部破片である。外面体部上半には鉄釉の上に白化粧土で文様が描かれる。体部下半は、白化粧土の下位約5ミリを無釉にし、その下位には鉄釉がかかっている。内面は全体に鉄釉が見られる。64は陶器壺の体部破片と見られる。内外面に褐色の鉄釉が見られる。65～67は陶器擂鉢破片である。外面には黒色の鉄釉が見られる。表面は光沢が弱い。これらは唐津に分類される。その他に帰属時期は不明であるが、風炉(図18-68)・火鉢(図18-69)の破片が出土している。68の表面には印花文が見られる。

近代の陶磁器(図18-70・写真図版20・21)

刷り絵(型紙刷り)(図18-70・写真図版21・)、刷り絵(銅板転写?)、擂鉢が出土している。

現代の陶磁器

調査区西側地区より主に出土している。

銭貨(図18-71～73)

寛永通宝(銅銭)(71)、判読不明の銭貨(銅銭)(72)、鉄銭(73)が出土している。いずれも調査区東側の 層よりの出土である。また、近代の硬貨(一銭銅貨?)も出土している。

第5節 石器

剥片石器

調査区内から43点出土し、内22点図示した。いわゆる定型的な石器はあまり多くなく、ほとんどが剥片や、器体のごく一部に連続的な二次加工の施された石器である。74・75は石匙である。双方とも素材剥片の打点側を摘み部に加工している。74は正面左側縁・下端領側縁、裏面左側縁に小規模な剥離が連続して施される。75は器体の周縁にごく小規模な(微細剥離痕の可能性有り)剥離が断続的に

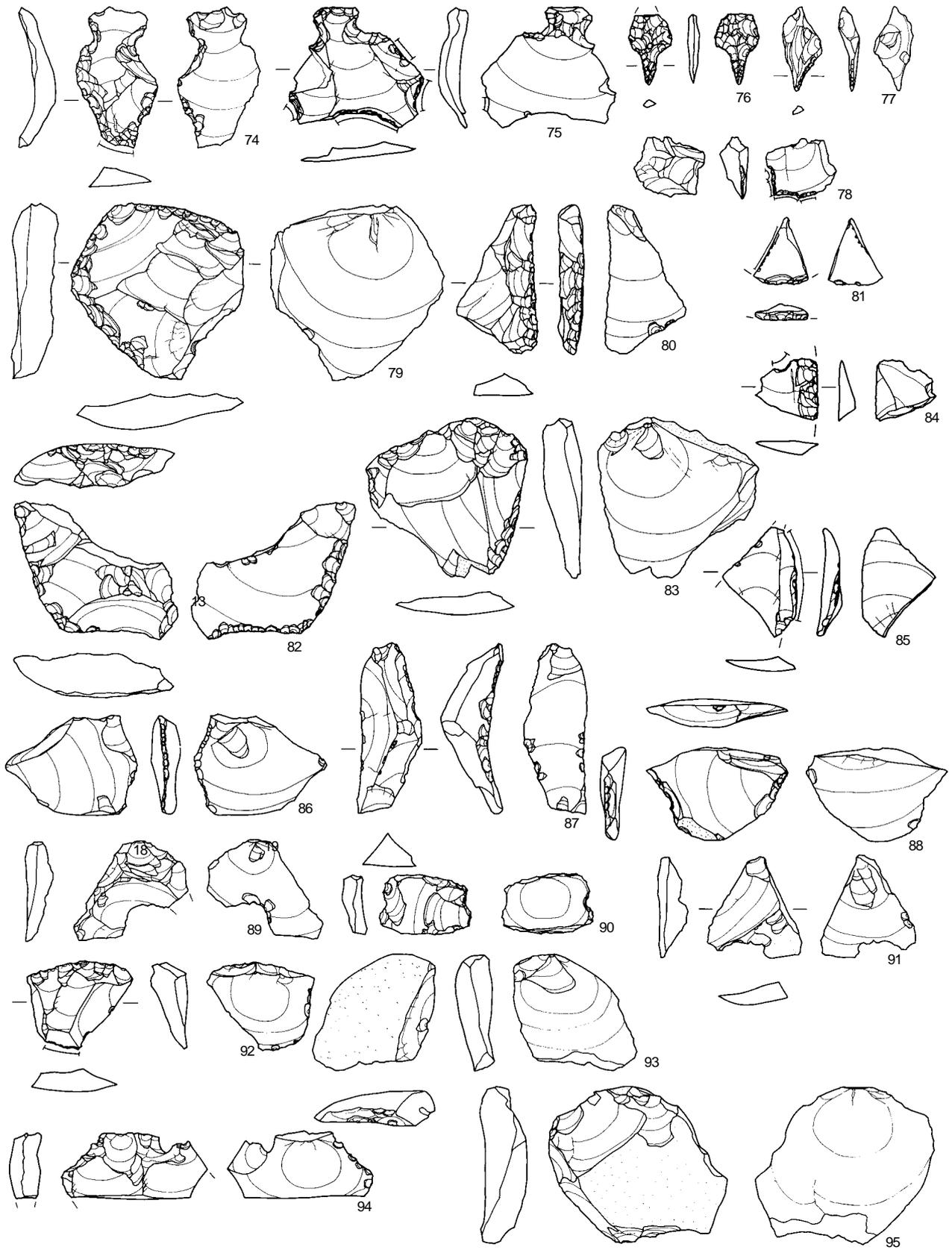


図 19 遺構外出土遺物

0 S = 1/2 5cm

施され、その部分が弱く抉れている。7dは有茎石鏃の基部である。押圧剥離による二次加工が全面を覆っている。7fは小剥片の端部を利用した石錐である。錐部右側縁にごく小規模な剥離が裏面側から連続して施されている。7gも石錐と考えられる。方形に近い形状の剥片端部にごく小規模な剥離が正面側から連続して施されている。79~ 92は削器である。79~ 81は二次加工の剥離角度がやや急なものである。79は正面左側縁に直接打撃による二次加工が連続的に施される。正面上端の剥離は打面調整時のものである。8dは正面右側縁端部に直接打撃による二次加工が連続的に施される。側面図に見られるように、剥離の開始部は他の小規模な剥離により消滅している。これらの剥離は使用に伴う可能性がある。81は正面下端に裏面側からの剥離で小規模な剥離面が構成されている。左右両端は折損している。82~ 84は浅い角度の二次加工が器体縁辺の一部に施されるものである。85~ 92は小規模な剥離面が器体の一部に連続的に見られるものである。93~ 95は二次加工などの見られない剥片である。

礫石器

調査区内から98点の礫を採取、内6点を石器と認定した。9dは擦石である。ほぼ半分が欠損する。使用面は正面右側縁で、直接打撃で縁辺を大まかに直線的に整えた後、「叩く・擦る」といった作業を行ったと見られる。対象物と接した部分に断続的な敲打痕が見られる。折損面使用面側端部には摩耗痕が見られるが、これが直接的な使用痕か折損した石器を紐などで補修したまま使用した為に生じた痕跡（埋文文報326集、『畑内遺跡 第1分冊第7章第2節参照）かは不明である。但し、このような痕跡が縄文時代前期中葉~後期の、「半円状扁平打製石器」・「擦石」等の石器に見られることは確かである（茅野2000）。97は凹み石である。長楕円形の礫表裏面中央付近に敲打痕が不整形形状に見られる。凹み石に分類したが、明瞭に凹みというより、ごく浅い凹面がやや広い範囲で観察されるのみである。98は石錘である。上下両端を打欠いているわけではないが、下端に見られる剥離が石錘の挟り部分と類似する。99は擦痕のある礫である。約半分を折損する。表面に見られる擦痕は、幅約2~3mmのものが多く、幾重にも重複している。擦痕の底面は丸みを帯る。流紋岩質凝灰岩製。

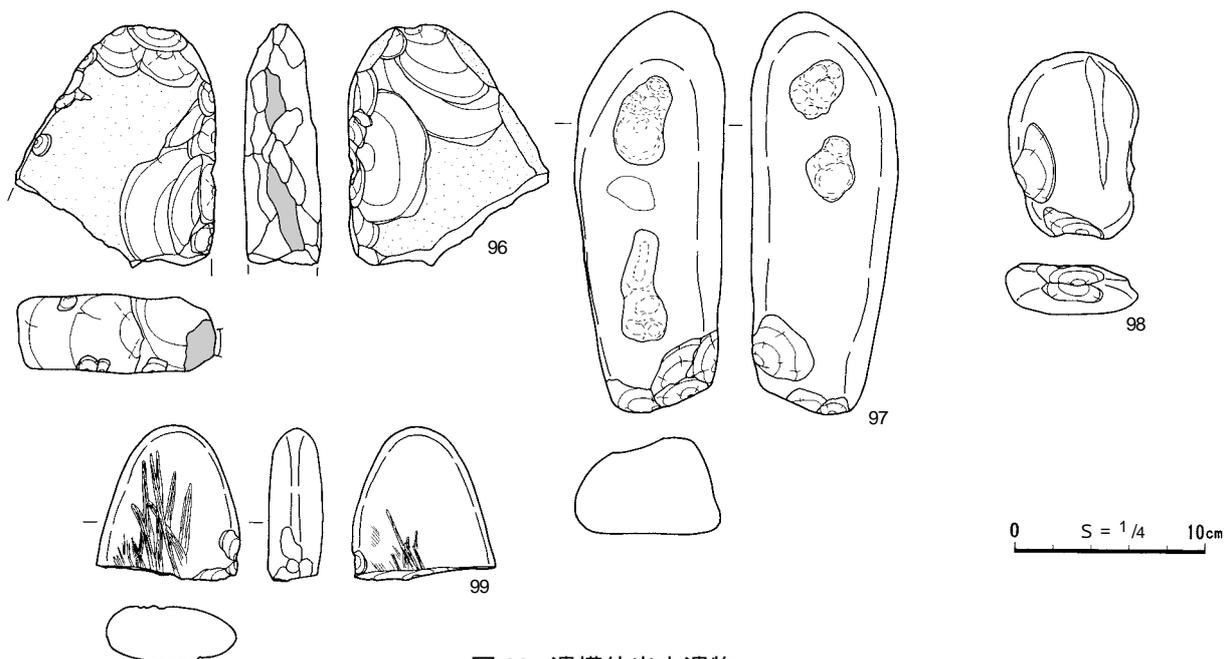


図20 遺構外出土遺物

第6章 自然科学的分析結果

第1節 青森市宮田館遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は7点で、平安時代のものとされる第6号建物跡から検出されたものである。同住居の構築材と用途不明の加工材とされている（表1）。

遺跡は野内川右岸の台地斜面（標高23~28m）に立地している。

2. 方法

同定には調査担当者が採取した炭化材を用いた。そのうちの1片を、担当者の立ち会いのもとで採取し試料とした。試料を室内で自然乾燥させたのち、試料の木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）3面の徒手切片プレパラートを作製し生物顕微鏡で観察する方法（高橋 2002）と、3断面を走査型電子顕微鏡（SEM, 加速電圧 10kV）で観察する方法を併用し同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図版1）。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ・ファイソン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、作製したプレパラートと残った炭化材、ネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はアスナロとシナノキ属の2分類群に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名とその配列は『日本の野生植物 木本』(佐竹ほか 1989)にしたがい、県内での自然分布については『北本州産高等植物チェックリスト』(上野 1991)を参照した。また、一般的な性質については『木の事典 第1・7巻』(平井 1979・1980)も参考にした。

・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata*) ヒノキ科 C1, C2

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型 (Cupressoid)~スギ型 (Taxodioid) で分野あたり1 - 6個。放射組織は単列、10細胞高程度まで。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）(*T. dolabrata* var. *hondai*)がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・シナノキ属 (*Tilia* sp.) シナノキ科 C3, C5, C6, C7, C9

散孔材で、横断面では不定形、複合または単独で分布する。道管は単穿孔をもち、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~4細胞幅、柔組織は短接線状。

シナノキ属は国内に4種自生するが、県内にはシナノキ (*Tilia japonica*) とオオバボダイジュ (*T. maximowicziana*) の2種が自生している。材は軽軟で、加工は容易であるが、保存・耐朽性は低い。器具・家具・建築材やベニヤ材など広い用途に用いられている。民俗学的には、材の利用よりも樹皮の繊維を布や縄にすることで広く知られている。

以上の同定結果を一覧表で示す(表1)。

表1 宮田館(県道)遺跡第6号建物跡出土炭化材の樹種

試料番号	用途・形状	種名
C1	板状	アスナロ
C2	板状	アスナロ
C3	部材	シナノキ属
C5	部材	シナノキ属
C6	部材	シナノキ属
C7	部材	シナノキ属
C9	部材	シナノキ属

4. 考察

試料はアスナロ(2点)とシナノキ属(5点)に同定された。アスナロは隣接する宮田館遺跡^{*1}(高橋 2003MS) や市内新町野遺跡^{*2}(高橋 2000)、同岩渡小谷(2)遺跡^{*3}(高橋 2001)、浪岡町野尻(1)遺跡^{*4}(高橋 2003) など津軽地方の多くの遺跡で住居跡からの出土報告がある。これに対してシナノキ属の報告は、本遺跡の南西約11kmに位置する野木遺跡の水場遺構検出の木枠とされる分割材1点(能城・鈴木 2000)を知るのみで、住居跡からの出土はこれまでなかったようである。全国的にみても報告の稀な樹種であり、その大半は北海道内の遺跡からのものである(山田 1993)。

<注>

*1 平安時代とされるSI-2検出材5点はアスナロとヤナギ属(4)、SI-55検出材7点はアスナロ(6)と不明広葉樹に同定されている。

*2 9世紀後半とされる第10号竪穴住居跡検出材3点はアスナロ・ヤマグワ・キハダに同定されている。

*3 10世紀前後とされる2基の住居跡からの検出材10点はアスナロとクリ(9)に同定されている。

*4 10世紀前半とされるSI-518検出材23点はアスナロとクリ(17)・モクレン属(4)・タケ亜科に同定されている。

[引用文献]

平井信二 1979 『木の事典 第1巻』, かなえ書房.

平井信二 1980 『木の事典 第7巻』, かなえ書房.

能城修一・鈴木三男 2000 「青森県野木遺跡出土木材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第28集 野木遺跡 (第6分冊)』, 21-34, 青森県教育委員会.

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 『日本の野生植物 木本』, 平凡社.

高橋利彦 2000 「新町野遺跡出土炭化材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書 第275集 新町野遺跡』, 178-180, 青森県教育委員会 .

高橋利彦 2001 「青森市岩渡小谷(2)遺跡出土材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第300集 岩渡小谷(2)遺跡』, 84-88, 青森県教育委員会 . (この報文は誤植が多いので注意されたい)

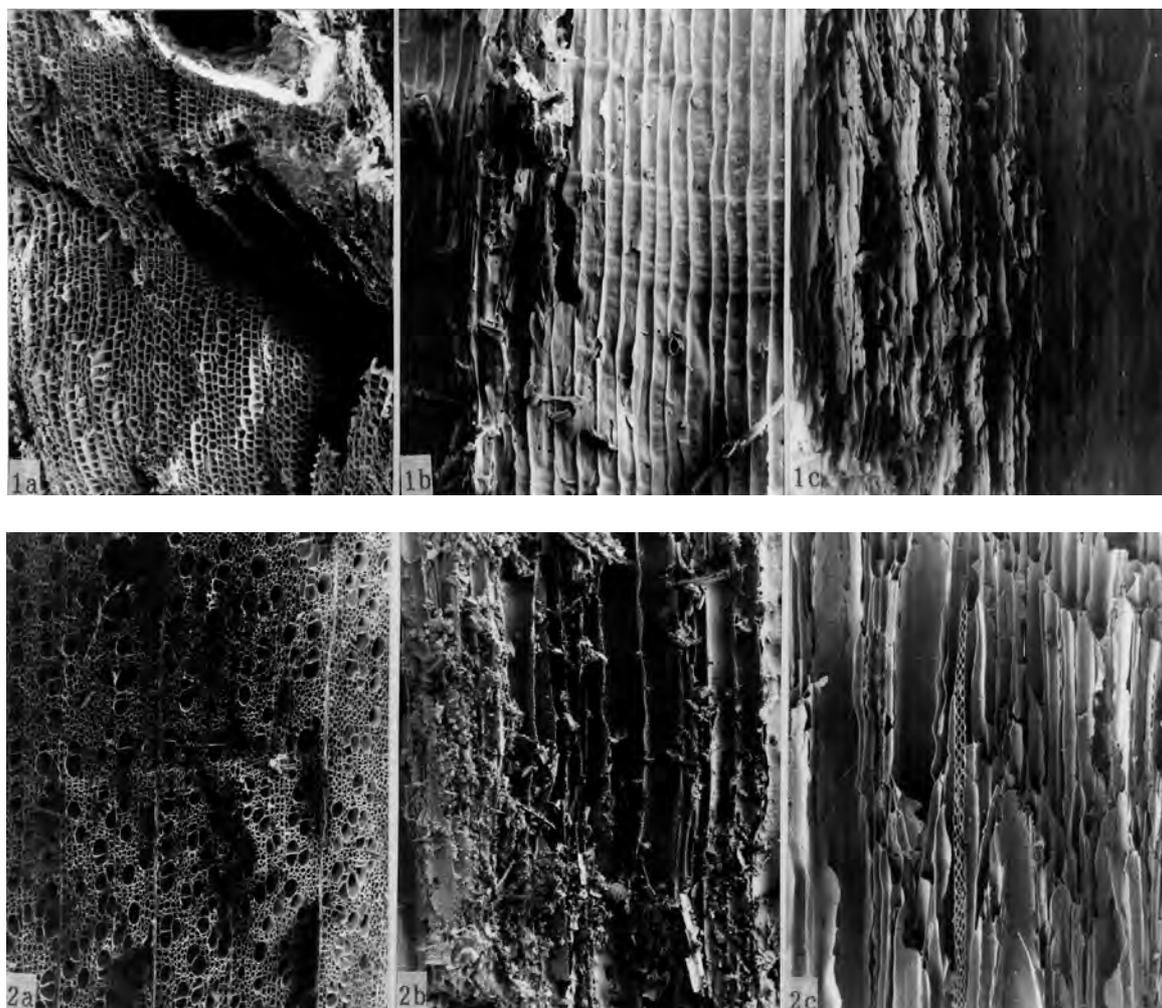
高橋利彦 2002 「浪岡町野尻(1)遺跡出土炭化材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第320集 野尻(1)遺跡』, 65-67, 青森県教育委員会 .

高橋利彦 2003 「野尻(1)遺跡出土材・炭化材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第35集 野尻(1)遺跡』, 180-184, 青森県教育委員会 .

高橋利彦 2003MS 「青森市宮田館遺跡出土材・炭化材の樹種」9pp・4pls., 木工舎「ゆい」. (平成18年度に刊行予定の『宮田館遺跡』に掲載予定)

上野雄規(編) 1991 『北本州産高等植物チェックリスト』, 東北植物研究会 .

山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号, 1-242.



図版1 1. アスナロ C1 2. シナノキ属 C5

a木口 x40 b 柁目 x100 c 板目 x100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ, 柁目では左から右 .

第2節 放射性炭素年代測定結果

(株)地球科学研究所

1. 報告内容の説明

14C age (yBP) : 14C年代測定値

試料の 14C/ 12C比から、単純に現在 (1950年 A D) から何年前 (BP) かを計算した年代。
半減期はリビーの 5568年を用いた。

補正 14C age : 補正 14C年代値

(y BP) 試料の炭素安定同位体比 (13C/ 12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/ 12Cの測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

試料の 13C値を - 25(‰) に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値を用いる。

13C (permil) : 試料の測定 14C/ 12C比を補正するための 13C/ 12C比。

この安定同位体比は、下式のように標準物質 (FDB)の同位体比からの千分偏差 (‰)
で表現する。

$$13C(‰) = \frac{(13C/12C) [試料] - (13C/12C) [標準]}{(13C/12C) [標準]} \times 1000$$

ここで、(13C/ 12C) [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14Cの測定、サンゴの U-Ti年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al., 1998 , Radiocarbon 40(3)) により約 19000yBPまでの換算が可能となった。 *

但し、10,000 y BP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

" The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in radiocarbon, Vol. 40, No.3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No.2, pg317-322, 1993: A simplified approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a " best fit" compilation of modeled data and , although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future . Because of this, It is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results. "

2. 測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる - 線計数法

処理・調整・その他 : 試料の前処理、調整などの情報

前処理 acid- alkali- acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none: 未処理

調整、その他

Bulk- Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する。

分析機関 : BETA ANALYTIC INC.

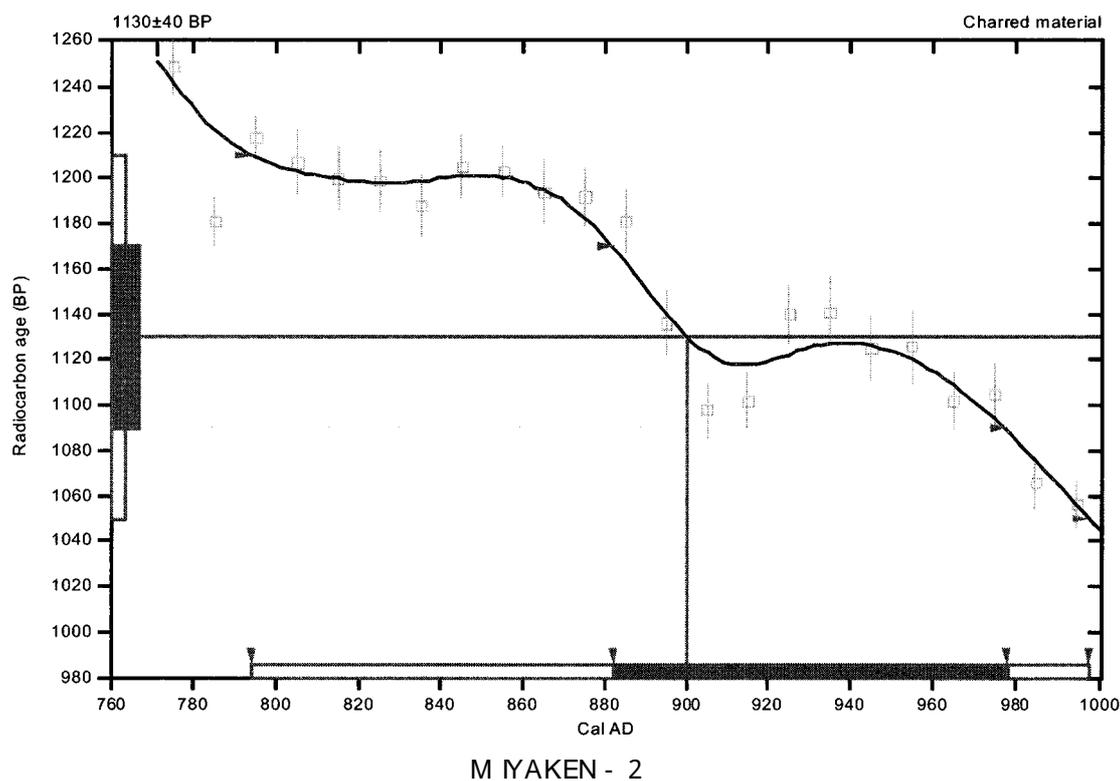
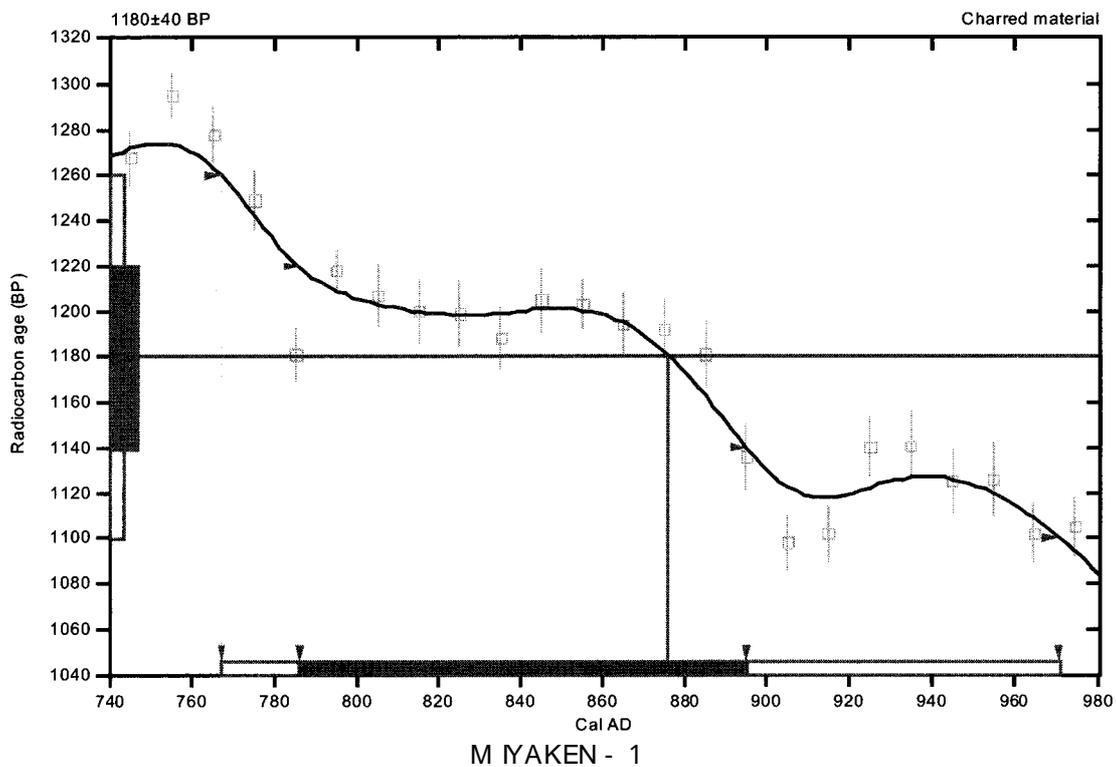
4985 SW 74 Court, Miami FL, U.S.A33155

3. C 14年代測定結果

測定方法はすべて AMS- Standard 試料種は表に記載。前処理は酸 - アルカリ - 酸洗浄である。

年代値は RCYBP (1950A.D.を 0年とする) で表記。モダン リファレンス スタンドは国際的な慣例として NBS Oxalic Acidの C14濃度の 95%を使用し、半減期はリビーの 5568年を使用した。エラーは 1シグマ (68%確率) である。

サンプル名	年度	遺構名	取上	遺構の時期等	状態	ラボ №(Beta-)	C14年代(ybp)	13C 補正C14年代(ybp)	補正暦年代 (2Sigma確率95%)	補正C14年代の較正曲線 上における中間値	補正暦年代 1 (1Sigma確率68%)
MIYAKEN-1	2002	SD-9	C-2	中世 - 近世?	炭化物	173938	1180± 40	-24.8	1180± 40	CalAD770to970	CalAD880
MIYAKEN-2	2002	SD-9	C-3	中世 - 近世?	炭化物	178939	1080± 40	-22.2	1130± 40	CalAD790to1000	CalAD880to980



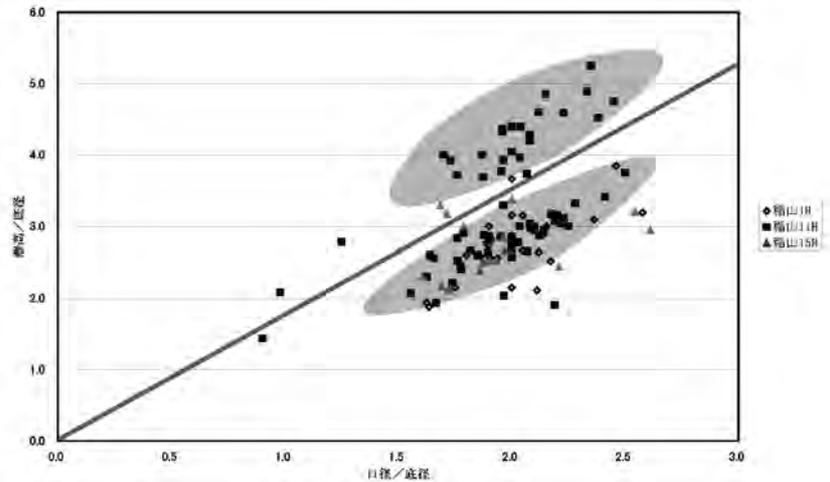
第7章 調査成果に関する考察とまとめ

第1節 縄文土器 群について

縄文土器 群は1～3類の3つに細分され、2類に関してはさらにa・b2つに細分された（第5章第1節参照）。ここでは、それらの編年的位置づけを、近隣の遺跡との比較を交えながら行う。土器には様々な属性が見られるが、ここでは 法量指数・ 口縁部文様帯の幅・ 口縁部文様帯の文様構成・ 胴部文様等の属性についてまず比較する。比較対象とする遺跡及び遺物は、青森市稲山遺跡第1(H)・1(H)・15H)号竪穴住居跡出土土器である。

法量指数

右のグラフは、X軸に口径を底径で割った値を、Y軸に器高を底径で割った値をそれぞれ取り、散布グラフにしたものである。1H・15Hはほぼ同じ分布範囲の中に収まっているが、11HはY軸3.5付近を境にして上下に大きく2つに分かれて分布する。X軸を見るとどの住居もほぼ1.5～2.5の範囲内に収まっている



るが、1Hと15Hは1.8～2.2位の間にややまとまりを見せる。したがって、口径と底径の比率は変化があまり無いが、器高と底径の比率に違いが見られることがわかる。すなわち、11Hの一部は器高が高い1群として独立して考えられる可能性があり、その他は法量指数の面ではあまり差がないことがわかる。

文様帯幅 (cm)	11H	15H	1H
1.0未満	0	0	0
1.0～1.4	0	4	0
1.5～1.9	6	8	1
2.0～2.4	40	17	6
2.5～2.9	10	6	10
3.0～3.4	12	3	6
3.5～3.9	2	3	4
4.0～4.4	5	1	7
4.5～4.9	2	0	1
5.0以上	1	0	5

口縁部文様帯の幅

右表の通り、口縁部文様帯の幅にはそれぞれの住居跡により集中する値が異なる。11Hでは2cm台前半が多く、15Hでは2cm台前半と1cm台後半が多い。1Hでは2cm台後半が多い。

口縁部文様帯の文様構成

右表は口縁部文様帯の文様構成の数量を住居毎にまとめたものである。ここでも住居跡毎に違いが見られる。11Hでは4類（縄文原体の横位回転施文が主文様）が多く、他3種類はほぼ同量である。15Hでは、1～3類

文様構成	11H	15H	1H
1類	12	8	2
2類	14	11	15
3類	17	6	23
4類	34	6	2

（縄文原体の側面圧痕が主文様）共にほぼ同量（2類がやや多いか？）であるが、11Hと比べて4類の割合が激減する。1Hでは15Hと類似した状況であるが、3類がやや多い。

胴部文様の種類

右の表は、各住居跡出土土器の胴部文様の種類と数量を示したものである。11Hと15HではRLRの斜位回転施文・単軸絡条体第1類の縦位回転施文が多く、類似した様相を見せている。1Hは単軸絡条体第1類の縦位回転施文・結束第1種の横位回転施文が多く、多の2つの住居と異なった様相が見られる。両者に共通なのは単軸絡条体第1類の縦位回転施文が一定の割合で見られることである。

	11H	15H	1H
LR斜回	1	1	1
RLR横回	5		
RLR斜回	47	20	1
RL横回	1		
RL斜回	4		4
RR斜回	2		
結束横回		4	8
結束縦回		1	1
結束横回			1
多軸縦回			2
単縦回	19	6	16
単1A縦回			4
櫛歯状沈線			2

から、稲山遺跡出土土器は各住居毎に共通点と相違点を少しずつ併せ持っていることがわかる。下表はそれらをまとめたものである。この表から、法量指数・口縁部文様構成・口唇端部への施文手法の点で11H出土土器は他の2住居

と確実に分離できそうである。また、15Hと1Hは文様帯の幅・胴部文様・口唇端部への施文手法で分離できそうである。

上記のように分離された各住居跡出土資料群は、宮田館遺跡縄文土器群とどのように対応するのであろうか。B区出土土器は破片資料がほとんどであるため、法量指数や

	法量指数	口縁部文様帯幅	口縁部文様構成	胴部文様	口唇端部施文
11H	X X=3.5以上	2cm台前半に集中	4類	RLR斜位回転 単軸絡条体第1類縦位回転	無 跨がせ押圧
15H	1.5 2.0 } 3.5	1cm台後半~2cm台前半に集中	1~2類	その他 (結束1横回 単1A縦回 多軸縦回等)	文 口唇端部前面 口唇端部上面
1H	2.5 3.5	2cm台後半に集中	3類		

器形については詳しいことはいえない。したがって他の属性について見てみると、口縁部文様帯の幅は1.5cm~3.7cm。口縁部文様構成は1~3類が大半。胴部文様はRLRの斜位回転施文が大半であるが、多軸絡条体・単軸絡条体第1類・結束第1種羽条縄文なども少量存在する。口唇端部への施文は端部前面及び上面がある。等の特徴が見られるため、おおむね稲山遺跡1Hと15Hに特徴が類似する。宮田館遺跡縄文土器群は1~3類に細分され、2類はさらにa・b2種類に細分されているが、群1類は11H・15Hの一部に相当すると考えられ、群2類aは15Hに、群2類bはほぼ1Hにそれぞれ相当すると考えられる。

最後に、これらは現行のどの型式に比定できるのか、三内丸山遺跡における層位学的調査成果に基づき考えてみよう。三内丸山遺跡では、No.6 鉄塔部分で円筒下層 a式~b式、第6次調査部分で円筒下層式全般の好資料が得られている。ここでは紙幅の関係上図と特徴を明記するととどめるが、概ね図2のように考えると考えられる。すなわち、宮田館遺跡縄文土器群は円筒下層c~d式に比定され、群2類aは円筒下層d式、群2類bは円筒下層d1~d2式に、群に関しては群2類bと同時期の異系統との折衷土器と考えられる。

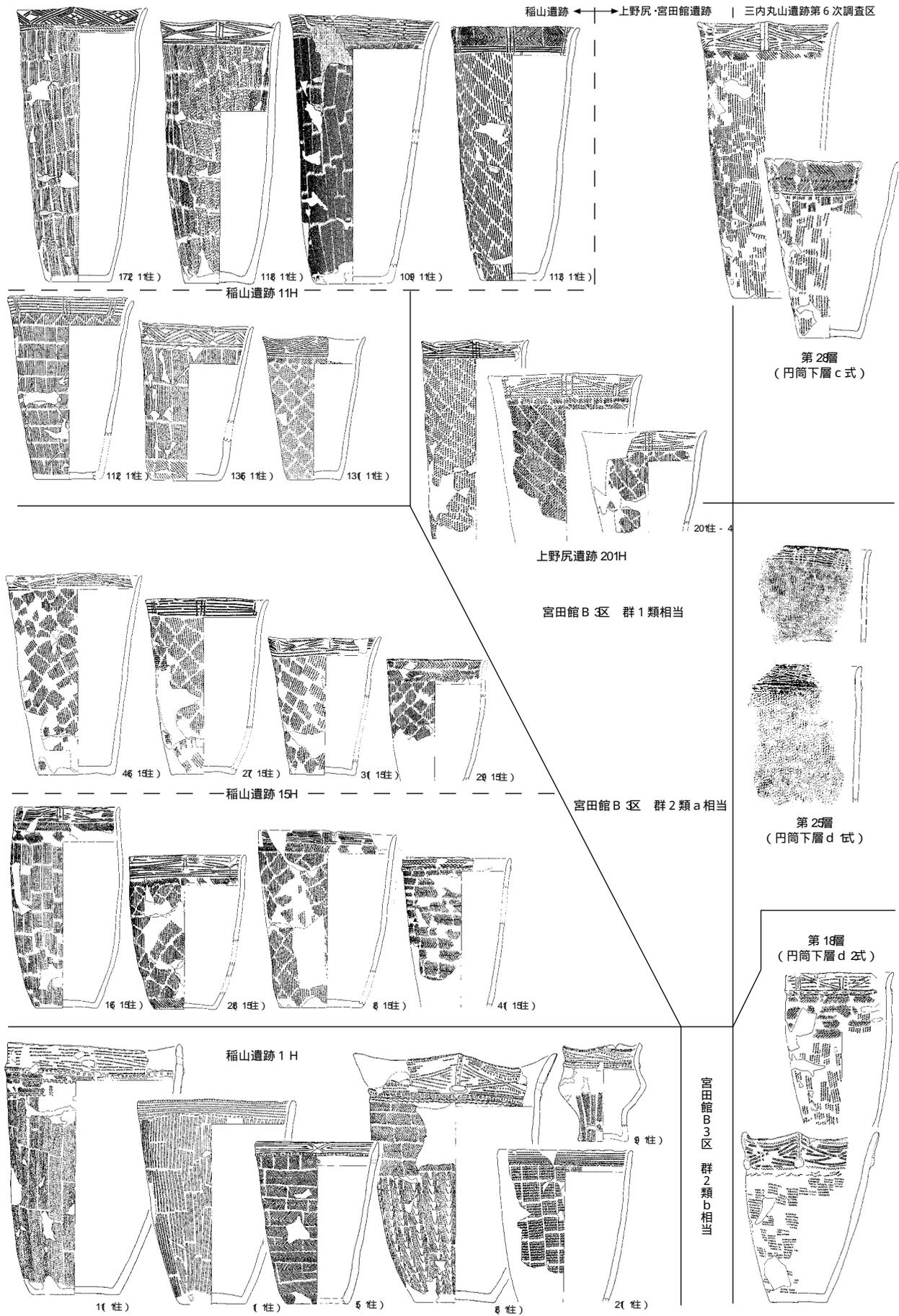


図7-1 第群土器と周辺の遺跡出土土器との関係

第2節 縄文土器及び弥生土器に見られる特殊な原体と施文方法について

縄文時代第 群土器の胴部及び弥生時代第 群土器の胴部には、共通の原体により施文されたほぼ同一の文様がみられる。それらは自縄自巻的縄文原体（遠藤香澄 1988等）により施文された文様である可能性が高い。図 17- 23 図 18- 45・ 46などがそれにあたる。

研究史

この文様及び施文原体については、山内清男が弥生時代後期の十王台式にみられる羽状縄文について、附加条第 1 種の附加条部分のみが施文されたものとしたのが始まりである（山内 1979）。その後この文様は、主に北海道においてクローズアップされることが多くなる。北海道縄文時代早期の東釧路式系土器群の施文原体についてまとめた大沼忠春は、「2 段の原体で、撚りが不均一なため 1 条おきの条が強く押捺されるか、それしか認められないものがある」とし、附加条ではなく 2 段の原体のバリエーションであるという見解を提示した（大沼 1986）。また、北海道南西部の続縄文文化についてまとめた石本省三は、北海道地方で出土する弥生系土器群の縄文施文原体について「一段の縄を折り曲げて次第に撚り合わせる際、力を不均等に加えることによって、縄の上に縄がコイル状に巻きついた形となる独特な原体」とした（石本 1984）。さらに遠藤香澄は新道 4 遺跡の報告書中において、縄文時代早期中茶路式・東釧路式、縄文時代前期円筒下層 c ~ d 式の施文原体について「自縄自巻的縄文」という言葉を用い、それら各型式の文様施文原体が同一であることを示した（遠藤 1988）。これらの先行研究をうけ石井淳は、これらの文様について「縄文回転圧痕 R 1 ~ R 5 ・ L 1 ~ L 4」の合計 9 種類に分類し、その原体が ~ の内いずれかにより施文された可能性を示した上で、「~ の原体により施文された可能性は低い」とし、（2 段の縄を軸縄とし、1 段の縄 2 本を絡げた附加条第 1 種）と（『不均等撚り合わせの縄』）により施文された可能性が高いことを提示した（石井 1997）。ただしここでは、「条を撚り合わせたり附加する際の絡げ方や回転押捺する際の微妙な角度や力加減によっても、回転圧痕には変化が認められることから、厳密に原体を特定することは不可能である」と、この種の文様の施文原体を特定することの難しさも指摘している。

以上研究史を大雑把にみてきたが、この種の文様及び施文原体が、北海道の縄文時代早期～前期および、本州の弥生時代後期に存在することは確かである。

本節ではこのような状況をふまえ、この文様の施文原体の構造について具体的に提示したい。
本遺跡から出土した類似資料の特徴

図 17- 23

縄文時代第 群土器の胴部破片である。胎土中には繊維を多量に含んでいる。他の土器の特徴から円筒下層 d 式に比定される。表面には縦走する縄文がみられるが、その条は 1 条おきに施文が深い。よって浅い条と深い条がセットになるとすれば、条中の節の傾きが右上がりであることから、この原体は 2 段の R L のバリエーションである可能性が考えられる。

図 18- 45

弥生時代第 群土器の胴部破片である。器種は壺の可能性もある。表面に施文されている沈線間には縄文が斜行しているが、その条間は約 1.5mm と広めである（ちなみに条幅は約 0.5mm である）。条中の節の傾きは右上がりであることから、最終段が右撚りの縄が回転施文されていることがわかる。

図 18- 46

弥生時代第 群土器の胴部破片である。器種は甕の口縁直下から頸部にかけての破片である。これらの見かけ上の共通点は以下の通りである。

施文が浅い条と深い条が交互に見える。 施文の浅い条は明確に確認でき無いことが多い。

回転方向に対する見かけの条の角度は一定しない。 条に対する節の角度は鈍角である。

施文原体の構造と施文方法による見かけの違い

「自縄自巻的縄文」と「不均等撚合わせの縄」の違い

以下に記す事柄は、全て筆者による縄文原体の復元実験から得られたものである。したがって、これ以外の状況ができる可能性があることを最初にお断りしておく。

自縄自巻的縄文の原体製作方法は2種類がある。 実際に縄に縄を巻き付ける方法と、 普通に1段の縄を撚った後に片方の条を引き絞る方法である。 で製作する場合、軸が同じ太さの縄であるため、軸が棒の場合と同じ様にうまく巻くのは難しい。そのため、軸になる側の縄を強く撚ることでもう片方の縄が自然と巻きついてくるようにするのが上手に製作する方法である。すなわち は自縄自巻の原体を作り、それを少しづつ戻しながら1段の縄を撚っており、「自縄自巻的」である。 は、撚りをかける力が条により不均等であることから「不均等撚り合わせの縄」といえる。これら2つの見かけの違いは非常に微妙なところであるが、 については撚りが弱い条が巻きつく方の条であることから、節の傾きが より鋭角になることが想定される。ただし、これらを全ての遺跡出土資料について完全に分別することはおそらく不可能であるし、構造自体が全く同じ原体であることから、敢えて違う名称が付けられていることに疑問を感じる。筆者の考えでは、 の方がより実際にあっているのではないかと考えるので「自縄自巻的縄文」の名称を使用した方がよいと考えられる。最後に、施文方法による見かけの違いについて触れておく。「自縄自巻的縄文」の原体が今まで明確にされなかったのは、原体の特殊性もさることながら、その施文手法によるところが大きい。

写真図版 22には各手法により実験施文したものを示す。写真を見た限りでは、通常回転施文は縄文時代早期や前期円筒下層式にみられるものと類似し、節と直行方向に滑らせながら施文したものは弥生時代後期初頭以降に見られるものに類似する。

もちろんこれらの実験により全てが解決するわけではなく、施文の強弱や施文後の器面調整も考え合わせなければならないが、今回行った再整理により、縄文原体や文様の共通理解が深まればよいと考えている。

第3節 宮田館遺跡B区および山下遺跡における平安時代の建物跡について

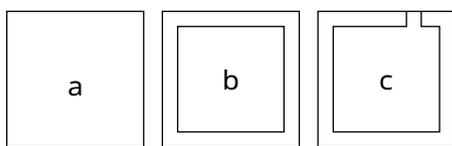
はじめに

ここでは、宮田館遺跡B区及び山下遺跡から検出された平安時代建物跡の特徴を整理する。両遺跡及び地区からは対象となる遺構が1軒検出されている（青森市教委平成15年度分を除く）。それらは青森県動物愛護センター建設予定地の調査（青森県埋文センター：平成12～14年度調査）で検出された同時代の建物跡と様々な点で違いを持っている。

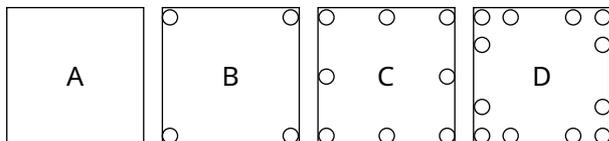
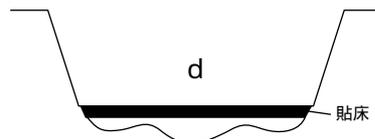
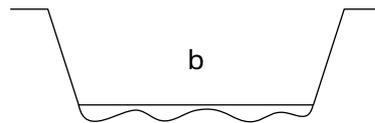
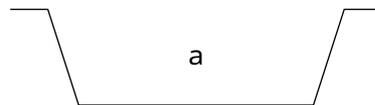
1、建物跡を構成する施設とその組み合わせ

下表には、対象となる建物跡の属性比較表を、下図には分類模式図をそれぞれ示した。

遺跡名	遺構名	竪穴部の規模		主軸方位	カマド構造			カマド位置	柱穴等配置		床構築	付属施設		張出し	備考	
		横軸 (m)	縦軸 (m)		構築材	下部構造	煙道		壁溝	柱穴		掘立部	外周溝			
山下	SI-1	5.6	4.9	N-32	-W	a	1	?	南東壁右寄り	c	A	a	x	x		
山下	SI-2	5.0	3.8	N-11	-W	b	1	A	南壁右寄り	c	A	a		x	x	
山下	SI-3	3.2	2.9	N-36	-W	a	1	?	南東壁左寄り	a	A	a	x	x	x	
山下	SI-4	6.4	7.7	N-36	-W	a	1	?	南東壁右寄り	c	B	a	x		x	
宮田館	B1・SI-1	6.0	5.2	N-148	-E	b	1	?	南東壁右寄り	c	B	a	x	x	x	出入口施設
宮田館	B1・SI-4	3.7	3.7	N-137	-E	b	2	A	南東壁右寄り	b	C	b		x	x	
宮田館	B1・SI-5	4.0	3.2	N-66	-E	b	1	B	北東壁右寄り	c	A	a		x		張出しは拡張
宮田館	B3・SI-1	7.2	6.2	N-48	-E	a	2	B	北東壁右寄り	c	A	a		x	x	
宮田館	B3・SI-3	2.9	2.7	N-141	-W	a	1	A	南西壁右寄り	a	A	a	x	x	x	
宮田館	B3・SI-4	4.3	-	N-18	-W	-	-	-	-	a	C	c	?		x	
宮田館	B3・SI-6	-	5.2	N-77	-E	-	-	-	-	b?	D	a	?	x		張出しは拡張
宮田館	B4・SI-1	3.7	3.5	N-133	-E	b	3	B	南東壁右寄り	c	C	b	x	x	x	
宮田館	B4・SI-2	3.2	2.9	N-100	-E	b	1	B	東壁右寄り	-	C	a	x	x	x	
宮田館	B4・SI-3	3.2	3.0	N-162	-E	a	2	?	南壁右寄り	?	C	a	x	x	x	
宮田館	B4・SI-7										D	c	?	x	x	



壁溝配置の分類



柱穴配置の分類

これらの建物跡は、構成施設の種類により次の4つのパターンに分類される。((内は山下遺跡分))

A：竪穴住居跡（以下竪穴部）単独で建物跡を構成するもの。

Aタイプには7（1）軒が該当した。ちなみに愛護センター部分では大半がAタイプである。

B：竪穴部と掘立柱建物跡（以下掘立部）で建物跡を構成するもの。

Bタイプには3（1）軒が該当した。掘立部の付く位置は全て竪穴部カマド側の壁外側である。

C：竪穴部と外周溝で建物跡を構成するもの。

Cタイプには3（2）軒が該当した。B3・SI04は全体像が不明であるがこの類に含めた。

D：竪穴部・掘立部・外周溝の3つの施設で建物跡を構成するもの。

Dタイプに該当するものは無い。

したがって、まずAタイプが基本パターンとしてあり、B・Cタイプが少量伴う事がわかる。特にB・Cタイプは愛護センター部分には現状で発見されていないので、宮田館北側と南側では建物跡の様相が異なっていることがわかる。次は竪穴部に関してその構造と特徴をまとめる。

2、竪穴部の特徴について

竪穴部の規模と平面的特徴

右の図は竪穴部の規模をカマド側の壁に方向を併せた上で比較したものである。

平面形では、正方形に近いものと、横長の長方形が多数を占めるが、中には縦長の長方形もある。規模的には短辺が3～4mにやや集まる傾向がある。総じて小型から中型の竪穴が主体であり、中型の大きめなものが少量伴う構成である。

床面の構築

分類については上図のとおりであるが、調査した1軒についてはdタイプは見られず、aタイプが量的に多い。

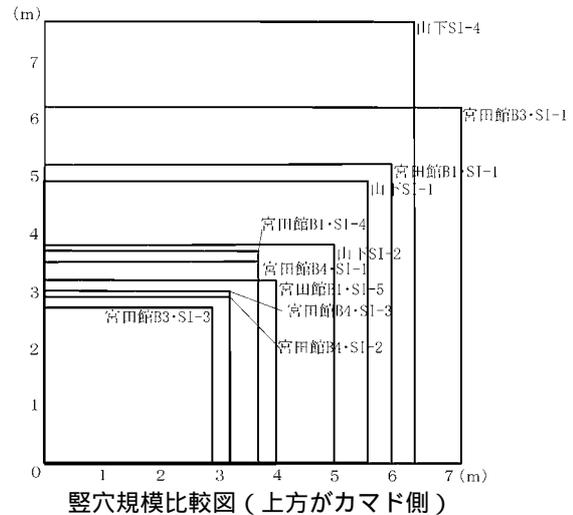
カマドの構造と付く位置

カマドの詳しい上部構造を窺える例は無い。これは建物跡廃絶時における破壊・廃棄行為が行われたためと考えられる。構造は不明であるが、構築材については窺い知ることが出来る。カマド構築材の種類は、a：粘土主体のもの(6例)、b：芯材に礫を使用し、粘土を肉付けするもの(6例)の大きく2種類に分けられる。また、カマドの下部構造に関しては、1：袖の及び範囲にあらかじめ掘方を構築した後、掘方を埋め、床面を構築した上にカマドを構築しているもの(8例)、2：カマド直下に掘方が見られないもの(3例)、袖の直下にのみ掘方の見られるもの(1例)の3種類が見られた。煙道の形状については、A：地下(トンネル)式(3例)、B：半地下式(4例)の2種類がある。

したがって、カマド下部に何らかの掘方を伴うものが多い傾向が看取される。カマドの構築材に関しては、2種類同量のように見えるが、カマドを廃棄する際に心材を抜き採ってしまっている場合等では、bに認定することは難しい。したがって実際にはbの割合はもっと多かった可能性がある。煙道の形状は残存状況により判断しがたい場合があるが、確実にいえることは、地下式・半地下式の両者が存在することである。また、カマドの付け替えについては、竪穴の拡張に伴って行っている例がある。本エリアでは、地下式 半地下式へ付け替えた例(B4-SI-1)も存在する。

柱穴及び壁溝の配置

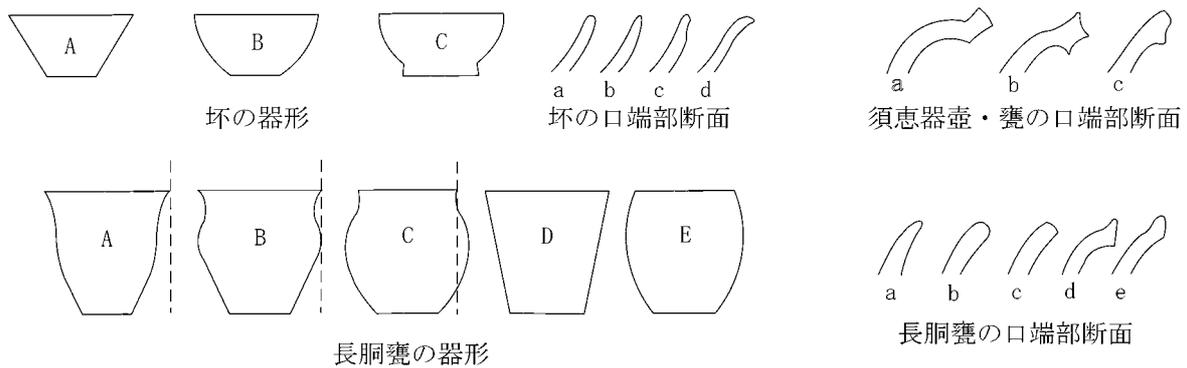
柱穴は、床面中央部に支柱穴を持つものは確認されず、壁溝+壁柱穴のタイプがほとんどである。壁溝については、a：見られないもの(3軒)、b：全周するもの(2軒)、c：カマド部分を除き全周するもの(7軒)の計3タイプが見られた。cの割合が多いことがわかる。柱穴配置と竪穴の規模に関しては資料数が少ないためはっきりとした傾向は見いだせないが、6～7mクラスでも床面中央寄りの支柱穴がはっきりしない点は、浪岡町野尻(1)遺跡における分析結果と大きな違いを見せている。野尻(1)遺跡では5～6mを境に支柱穴を床面中央寄りに持つタイプが増加するという結果が出ている。今後愛護センター部分においても同じ状況であるのか調査すると共に、蛭沢・野木といった周辺の遺跡とも総合的に比較検討し、傾向をつかんでいく必要がある。



第4節 出土土師器・須恵器について

本調査で出土した古代の土器には、土師器坏・長胴甕・埴、須恵器壺・甕などの種類が見られた。ここでは、過去の調査で出土した遺物や、山下遺跡出土土器などと共に、青森市宮田地区周辺の平安時代土器群について現時点でのまとめをする。まとめるにあたって、各器種を再分類した。この分類の対象は本調査の土器群全てだが、過去の調査分については、分析しうるものだけを選別し分類した。

属性の項目と内容（図22）



古代の土器の分類

1、器種：皿・坏・鉢・壺・長胴甕・甕・埴。

2、器形：

坏・皿 A：器壁がほぼ直線的に立上がるもの。B：器壁が内湾しながら立上がるもの。
C：2に高台つくもの。

長胴甕 A：口縁部直径より小さい胴部最大径を持つもの。B：口縁部直径とほぼ同じ胴部最大径を持つもの。
C：口縁部直径より大きい胴部最大径を持つもの。D：頸部に括れが無く、器壁が直線的に立上がるもの。
E：頸部にくびれを持たず、胴部が湾曲し立上がるもの。

3、口端部の形状

皿・坏 a：端部が丸みを帯びるもの。b：端部がやや尖り気味なもの。c：端部が弱く外反するもの。
d：端部が外側につまみ出されているもの。

須恵器長頸壺・甕

a：端部が角張りつつ上方に屈曲しているもの。b：端部が上下・横方向につまみ出されているもの。
c：端部下位が弱くつまみ出されるもの。

長胴甕 a：口縁端部が尖るもの。b：端部が丸みを帯びるもの。c：口縁端部がやや外向きに角張るもの。
d：口縁端部が上方または上下につまみ出されるもの。e：dの程度が弱いもの。

5、黒化处理の有無：a：内面。b：内外面。

6、一次成形技術：1、粘土紐輪積み成形。2、粘土塊引き上げ成形。3、1の後2が用いられた可能性があるもの

7、二次成形技術：1、ロクロナデ。2、タタキ。

8、内外面整形技術

口縁部外面：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、指頭押圧。

口縁部内面：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、指頭押圧。

外面体部上半：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、タタキ。

外面体部下半：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、タタキ。

外面底部付近：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、タタキ。

内面体部上半：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、あて具。

内面体部下半：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、ミガキ。f、あて具。

外底面：a、ヘラナデ。b、ヘラケズリ。c、タタキ。d、高台附加後ナデ。e、無整形。

9、底部切り離し：a、回転糸切り。b、砂底。c、ムシロ圧痕。d、木葉痕。

以上のような観察から得られた大まかな所見を以下に記し現時点でのまとめとする。

土師器坏・皿の特徴

皿については宮田館遺跡1点・山下遺跡1点と非常に少ない。全てロクロ成形によるもので、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形である。

土師器坏については次のような特徴が見られた。〔成・整形技術〕成形技術は全てロクロを使用し粘土塊を引き上げる、いわゆる水挽き或いは玉作りである。成形後内外面にはロクロナデが施されるが、さらにその後内面或いは内外面を磨き上げるものもある。例外的にロクロ成形後外面をケズリ整形し、その後内外面に磨きをかけているものがあった（本報告図6-1）。最終的にミガキが施されるものについては、内面または内外面が黒化处理されているものがほとんどである。ちなみに黒化处理が施される比率は約7割強である。

〔器形と口唇端部の形状〕黒化处理の有無にかかわらず、器形Bすなわち体部が湾曲する器形の比率が高い。器形Cは宮田館遺跡で3点出土し、山下遺跡では出土していない。高台部分は、高さ約1cm程度で、ほぼ垂直または若干外側に開くものがみられる。

〔法量〕口縁から底部まで残存するものが少ないので詳細は不明であるが、口径だけでは10~14cmの間でほぼ同量出土している。

長胴甕の特徴

〔成形・整形技術・器形・口唇端部の形状〕成形技術は輪積み成形が大半を占め、ロクロ成形は2割に満たない僅かな量である。ロクロ成形後、ロクロナデにより整形された口唇端部は、d類のような硬質な雰囲気は弱く、e類のように角の取れたものが多い。輪積みで成形されたものについては外面がケズリ（一部にミガキ）等、内面がヘラナデ（一部にミガキ）等で整形される。器形は器形B・Cが量的に多い。底部外面はいわゆるムシロ圧痕・砂底・手持ちヘラケズリ等が見られる。

〔法量〕全体形を推し量れるものが少ないため口径のみの比較になるが、概ね16~17cmを境に小型と大型に分かれそうである。また、大型のものは外面体部にカマド構築材（粘土）がこびりつくものが見られ、小型のものは口縁部内面約1~1.5cm程度の部分に帯状に煤状の炭化物が付着しているものがよく見られる。従来指摘されているように大型と小型の用途の違いが推定される。

須恵器の特徴

〔器種組成〕須恵器の出土個体数は宮田館遺跡で多くても20個体強であり、土師器に比べると圧倒的に少ない。このことは蛭沢・山下等近隣の遺跡と類似した様相である。組成に関しては、壺と甕でほ

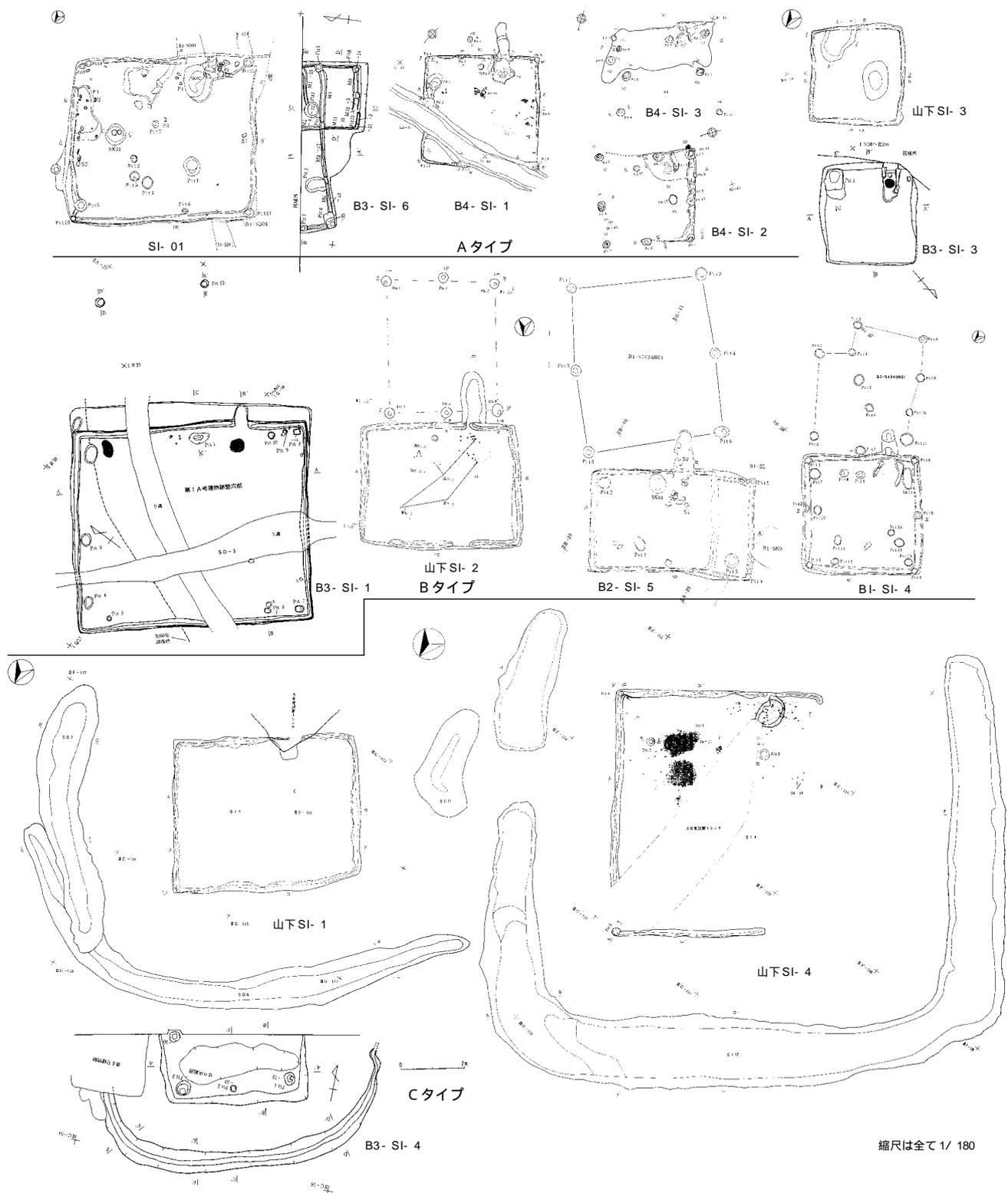


図 7 - 2 古代の建物跡集成図

ぼ9割を占める（坏は山下遺跡1点、宮田館遺跡では現在2点（1点は表採品）が出土したのみ）。壺・甕は、五所川原須恵器窯跡群の所謂持子沢系と類似せず、大半が前田野目系に類似する。前者は白頭山 - 苦小牧火山灰以前の製品と考えられ、後者は火山灰降下以後に操業していたと捉えられている。

小結

以上から宮田館遺跡および山下遺跡出土の古代の土器は、須恵器の組成や形状等の諸特徴から、その帰属時期はほぼ10世紀中葉～後葉であると現時点では考えられる。遺跡全体としての時期幅等については、今後愛護センター部分の整理・報告書作成の過程でさらにその深く追求していく必要がある。

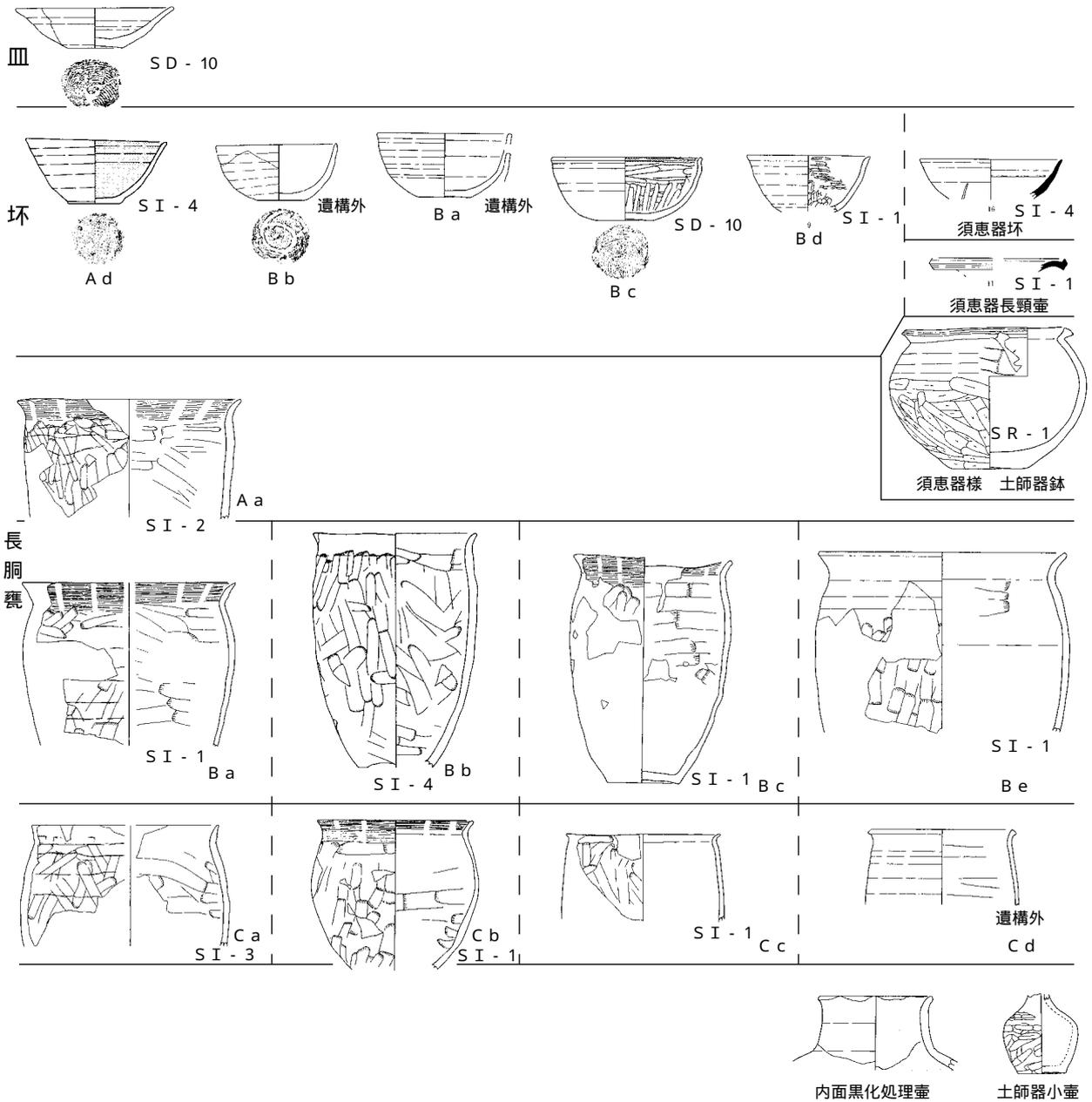


図7 - 3 山下遺跡出土土器

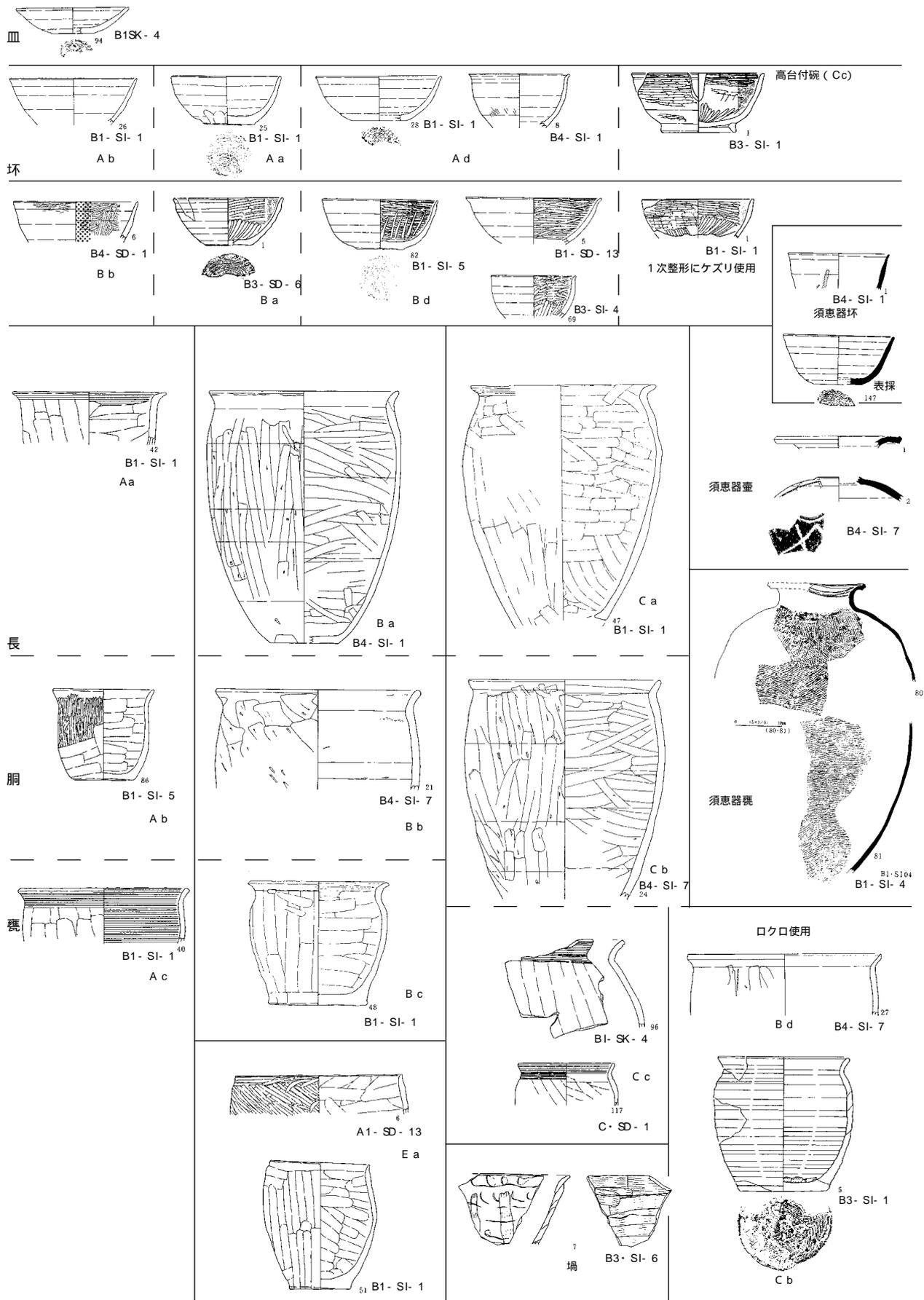


図7-4 宮田館A~C区出土土器

第5節 まとめ

第4次調査では縄文時代から近世に至る各種の遺構が検出され、20箱の遺物が出土した。以下に時期毎の特徴をまとめる。

縄文時代

竪穴住居跡1軒・土坑3基・土器埋設遺構4基・遺物集中地点1箇所を検出した。遺構の時期は縄文時代前期末の円筒下層d式期である。

弥生（続縄文時代）

遺物4片が出土した。弥生時代中期～後期に属する。縄文前期末の土器群の一部と同様の原体をを用いて施文された文様の原体が、自縄自巻的な原体である可能性が高い。

平安時代

建物跡4軒・土坑1基を検出した。白頭山・苫小牧火山灰等の広域テフラが遺構内から検出されなかったため、時期決定は遺物の特徴に頼るしかないが、概ね10世紀中葉（白頭山・苫小牧火山灰降下以降）～後葉と想定される。第6号建物跡からは、炭化材7点が樹種同定分析試料に供され、アスナロ・シナノキ属などの樹種に同定された。

中世～近世

中世に関しては、中国産の青磁碗破片が3片が出土した。また、第8・9号溝跡は、B区の南側にある尾根（館跡本体か？）裾に沿うように構築されていることと、堆積土の状況等から中世に帰属するものと考えられる。中世の館跡と考えられている宮田館との関連が示唆される遺構である。

近世以降では、肥前・唐津等の陶磁器類、明治～大正期と考えられる陶磁器類が出土している。遺構に関しては、古代・中世の遺構を壊して構築されている溝跡（第1～5号）がこの時代にあたりと考えられる。その中で、第4号溝跡は、いわゆる道路状の遺構として捉えうるものである。また、調査区東側の基本土層断面では、明らかに第1層の下に畝状の凹凸面が見られた。おそらくこの時代の所産であろう。第1・2次調査では、同時期の水田等も検出されており、本遺跡付近の生産活動が近世以降明らかに盛んになったことを示唆している。

近代以降

近世以降の土地利用状況に引き続き、現代までB区については耕地として利用されていた事が判明した。また、時期不明であるが、調査区内に2箇所の地下水流路跡が確認された。人為的な遺構では無いものの、宮田館遺跡が位置する青森市宮田地区を考える一助となりうる情報が得られた。

（茅野嘉雄）

【引用・参考文献】

発行者・著者名	刊行年	遺跡名・論文名	シリーズ番号・書籍名
青森県教育委員会	1996	野尻(2)遺跡・野尻(3)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第18集
青森県教育委員会	1997	垂柳遺跡・五輪野遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第21集
青森県教育委員会	1998	野尻(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第23集
青森県教育委員会	1999	野尻(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会	1999	山下遺跡・上野尻遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会	2000	野尻(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
青森県教育委員会	2001	宮田館遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
青森県教育委員会	2002	朝日山(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
青森県教育委員会	2002	朝日山(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
青森県教育委員会	2002	畑内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
青森県教育委員会	2003	宮田館遺跡・三本木遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
青森県教育委員会	2003	宮田館遺跡・米山(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
青森県教育委員会	2003	野尻(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会	2003	上野尻遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第35集
(財)北海道埋蔵文化財センター	1988	新道4遺跡	北海道埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集
蛭沢遺跡発掘調査団	1979	蛭沢遺跡	
青森市教育委員会	2002	稲山遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第62集
青森市教育委員会	2002	稲山遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第66集
青森市教育委員会	2003	市内遺跡(宮田館遺跡)	青森市埋蔵文化財調査報告書第69集
青森市	2003	宮田・滝沢の民俗	青森市市史研究叢書1 民俗調査報告書第1集
八戸市教育委員会	1989	熊野堂遺跡	八戸市埋蔵文化財調査報告書第32集
八戸市教育委員会	2003	大仏遺跡	八戸市埋蔵文化財調査報告書第98集
五所川原市教育委員会	1999	犬走窯跡発掘調査報告書	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
五所川原市教育委員会	2002	M26号窯跡	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
弘前市教育委員会	2001	早稲田遺跡・福富遺跡	
山内清男	1979	「日本先史土器の縄文」	先史考古学会
石本省三	1984	「北海道南部の続縄文文化」	『北海道の研究1』考古編 清文堂
大沼忠治	1986	「縄文原体の変遷 東釧路式土器 - 原体と施文のあり方」	『季刊考古学』第17号 雄山閣
石井 淳	1997	「東北地方天王山式成立期における集団の様相(上) - 土器属性の二者 - 」	『古代文化』第49巻7号
茅野嘉雄	2000	「南郷村畑内遺跡のすり石について」	『研究紀要』第5号 青森県埋蔵文化財調査センター
岩田昭広	2001	「頃恵器のロク口技術を考える」	『研究紀要』第16号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
木村 高	2000	「陸奥地方における平安時代の住居跡」	『考古学ジャーナル』 No462, 2000年8月号
角張淳一	2002	「石器研究の展望」	『利根川』 第22号 利根川同人
東 和幸	2003	「破板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」	『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋文センター
北林八州春	2003	断章青森県の製塩跡考	

剥片石器観察表

整番	図版	番号	出土地点	層位	器種	打点径(mm)	刃部剥離角度	剥離方向	長さ	幅	厚さ	重量	石質	使用痕	図版	番号	出土地点	層位	種類	時期	備考	
18	2	10t-1	SK 10	剥片	剥片		急角度	正	50.0	47.0	16.0	278.9	砂岩	敲打・擦り	15	8溝-22	SD 8	確認面	土製支脚	平安時代	外傾接合	
4	2	4t-1	SK 4	石匙	石匙		急角度	正+反	72.5	19.5	14.5	100.6	砂岩	敲打	127	15	8溝-23	SD 8	確認面	土製支脚	平安時代	中心部に貫通孔
1	3	埋-2	SR 1	有茎石鏃	有茎石鏃		急角度	正	30.0	29.0	4.0	49.9	珪質頁岩	擦痕				SI 1	確認面	鉄製品	平安時代	種子等圧痕?
2	19	74	SI 1	石匙	石匙		急角度	正	50.0	29.0	13.0	48.5	珪質頁岩	敲打	131			SD 8	確認面	焼成粘土塊	平安時代?	スサ入り
37	19	75	T 50	石匙	石匙	3	急角度	正	42.5	47.0	10.0	56.5	珪質頁岩	敲打	132			IT 50	確認面	焼成粘土塊	平安時代?	スサ入り
14	19	76	SD 5	有茎石鏃	有茎石鏃		平刃	正+反	25.0	15.0	4.5	21.0	珪質頁岩	敲打	55			SD 8	覆土	焼成粘土塊	平安時代?	
39	19	77	R 48	石鏃	石鏃	2	急角度	正	30.0	14.0	7.0	35.0	珪質頁岩	敲打								
26	19	78	S 49	二次加工剥片	二次加工剥片		急角度	反	21.0	25.0	10.0	36.5	珪質頁岩	敲打								
51	19	79	T 49	剥片	剥片	3	急角度	正	62.0	65.0	11.5	60.0	珪質頁岩	敲打								
15	19	80	SI 3	覆土	剥片		急角度	正	53.0	28.0	10.0	33.0	珪質頁岩	敲打								
21	19	81	V 52	剥片	剥片		急角度	正	23.5	19.0	5.5	35.0	珪質頁岩	敲打								
11	19	82	SI 4	覆土	二次加工剥片		急角度	正	48.5	57.5	15.0	21.0	珪質頁岩	敲打								
50	19	83	X 59	二次加工剥片	二次加工剥片	2	平刃	反	56.5	56.5	14.0	36.5	珪質頁岩	敲打								
9	19	84	SI 1	確認面	二次加工剥片		平刃	反	21.5	22.0	5.5	31.5	珪質頁岩	敲打								
42	19	85	X 59	剥片	剥片		急角度	正	39.0	23.0	8.5	41.5	珪質頁岩	敲打								
25	19	86	W 55	剥片	剥片	2.5	急角度	正	35.0	45.0	10.0	21.0	珪質頁岩	敲打								
6	19	87	SD 8	覆土	剥片		急角度	正	60.0	22.5	22.0	35.0	珪質頁岩	敲打								
16	19	88	SI 1	確認面	剥片		急角度	正	35.0	45.0	10.0	36.5	珪質頁岩	敲打								
48	19	89	R 48	剥片	剥片	2	急角度	正	21.0	32.0	8.5	31.5	珪質頁岩	敲打								
40	19	90	R 48	剥片	剥片	2	急角度	正	36.5	33.0	11.0	43.5	珪質頁岩	敲打								
17	19	91	SI 1	床面	剥片		急角度	正	31.5	37.5	12.5	41.5	珪質頁岩	敲打								
36	19	92	V 51	剥片	剥片	1	急角度	正	43.5	43.0	13.5	55.0	珪質頁岩	敲打								
46	19	93	W 56	二次加工剥片	二次加工剥片	2	急角度	正	21.5	51.5	20.5	74.7	珪質頁岩	敲打								
3	19	94	SD 8	覆土	剥片	1	急角度	正	61.0	56.0	21.5	76.1	珪質頁岩	敲打								
35	19	95	V 53	剥片	剥片		急角度	正	55.0	63.0	17.0		珪質頁岩	敲打								

礫石器観察表

整番	図版	番号	出土地点	層位	器種	取上番	剥離方向	長さ	幅	厚さ	重量	石質	使用痕	図版	番号	出土地点	層位	種類	時期	備考	
62	2	20	SD 3	底面	擦り石	S-4	正+反	96.0	79.0	31.0	278.9	砂岩	敲打・擦り	15	8溝-22	SD 8	確認面	土製支脚	平安時代	外傾接合	
77	2	4t-2	SK 1	覆土	凹み石	S-1	正+反	53.0	43.5	31.0	100.6	砂岩	敲打	127	15	8溝-23	SD 8	確認面	土製支脚	平安時代	中心部に貫通孔
58	20	96	SI 5	覆土	磨石		正	96.0	79.0	31.0	49.9	珪質頁岩	擦痕				SI 1	確認面	鉄製品	平安時代	
68	20	97	SD 8	覆土	凹み石	S-24	正	159.0	68.5	33.0	484.0	砂岩	敲打	131			SD 8	確認面	焼成粘土塊	平安時代?	種子等圧痕?
42	20	98	SI 6	覆土	石鏃?		正	74.0	51.5	20.5	74.7	砂岩	敲打	132			IT 50	確認面	焼成粘土塊	平安時代?	スサ入り
82	20	99	U 50	剥片	縁刻線?		正	61.0	56.0	21.5	76.1	流紋岩質凝灰岩	敲打	55			SD 8	覆土	焼成粘土塊	平安時代?	スサ入り

土・鉄製品観察表

整番	図版	番号	出土地点	層位	種類	時期	備考
15	8溝-24	SD 8		確認面	磁器	近代	軸・胎土の特徴 砂粒多い
18	58	P 40		表土	青磁	肥前	薄めのグレー・黒粒
18	59	SI 4		外周溝確認面	青磁	中国	薄いグレー・黒粒
18	60	B 51		表土	青磁	中国	やや濃いめのグレー・黒粒
18	61	O 41		表土	磁器		網目文
18	62	IT 4		表土	磁器		肥前
18	63	B 50		表土	陶器(鉄釉)		肥前
18	64			表土	陶器(鉄釉)		近世
18	65	T 50		表土	陶器(鉄釉)		近世
18	66	B 52		表土	陶器(鉄釉)		近世
18	67	B 57		表土	陶器(鉄釉)		近世
18	70	B 52		表土	磁器		近世
18	68			表土	陶器		近世以降
18	69			表土	陶器		近世以降
写21		V 52		表土	磁器		肥前
写21		O 42		表土	磁器		近代
写21		T 50		表土	磁器		近代
写21		V 52		表土	磁器		近代
写21		V 52		表土	磁器		近代

陶磁器類観察表

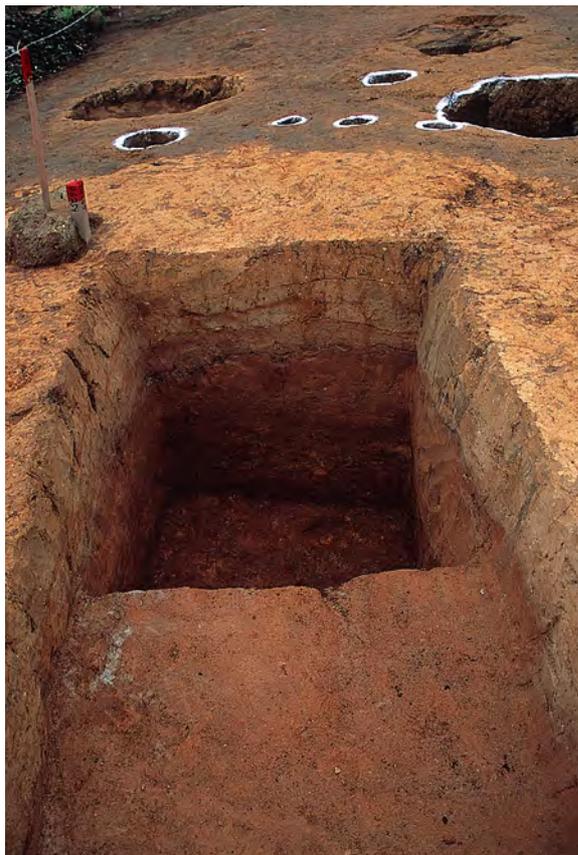
図版	番号	出土地点	層位	種類	器種	部位	推定産地	時期	外面文様	内面文様	備考
15	12溝-3	SD 12	確認面	陶器(鉄釉)	搥鉢	体部	不明	近代	ハケメ		軸・胎土の特徴 砂粒多い
15	8溝-24	SD 8	確認面	磁器	皿?	口縁部		肥前			
18	58	P 40	表土	青磁	柳?	口縁部	中国				薄めのグレー・黒粒
18	59	SI 4	外周溝確認面	青磁	柳	体部	中国				薄いグレー・黒粒
18	60	B 51	表土	青磁	柳	体部	中国				やや濃いめのグレー・黒粒
18	61	O 41	表土	磁器	坏	口縁部					
18	62	IT 4	表土	磁器	柳	口縁部					
18	63	B 50	表土	陶器(鉄釉)	柳?	体部					
18	64		表土	陶器(鉄釉)	鉢?	体部	唐津				
18	65	T 50	表土	陶器(鉄釉)	搥鉢	口縁部	唐津				
18	66	B 52	表土	陶器(鉄釉)	搥鉢	体部	唐津				
18	67	B 57	表土	陶器(鉄釉)	搥鉢	体部	唐津				
18	70	B 52	表土	磁器	柳	口縁部					
18	68		表土	陶器	風炉	体部					刷絵
18	69		表土	陶器	火鉢?	口縁部?					刷絵
写21		V 52	表土	磁器	皿?	底部					ハケメ
写21		O 42	表土	磁器	皿?	口縁部					刷絵
写21		T 50	表土	磁器	柳	口縁部					近代 刷絵
写21		V 52	表土	磁器	皿?	底部					近代 刷絵
写21		V 52	表土	磁器	皿?	底部					近代 刷絵



遺跡の遠景(北西上空から)



調査区南西部の状況



基本土層(IQ-46グリッド付近。 層より下位)



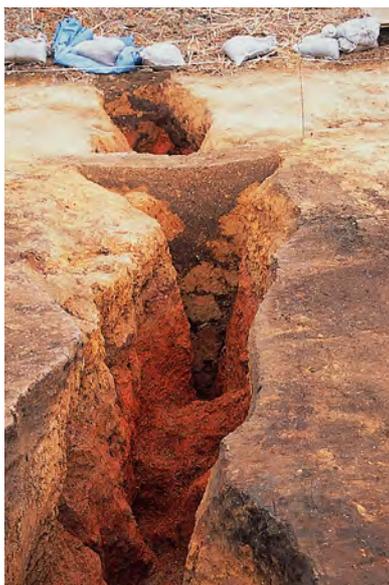
基本土層(B-53グリッド付近)



基本土層(C-50グリッド付近)



地下流路跡 1 土層堆積状況



地下流路跡 2 土層堆積状況



地下流路跡 2 先端部の空洞



写真1 宮田館遺跡・三本木遺跡周辺の環境 この写真は国土地理院の承認を得て、掲載したものである。(昭和2年撮影)



調査区全景(直上から)



地下流路跡 1 土層断面



地下流路跡 1 土層断面



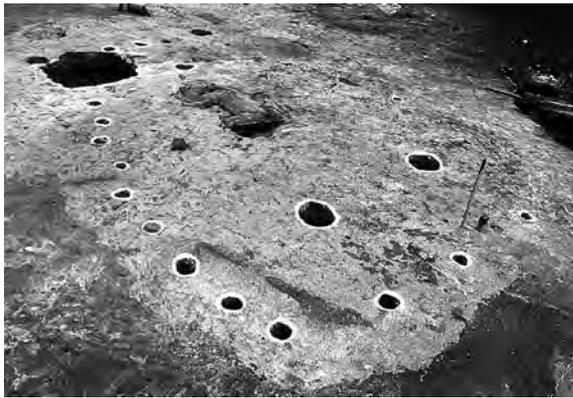
地下流路跡 2



地下流路跡 2 底面の状況



地下流路跡 2 空洞内アップ



第 2 号竖穴住居跡完掘



第 2 号竖穴住居跡完掘



第 4 号土坑土层断面



第 4 号土坑完掘



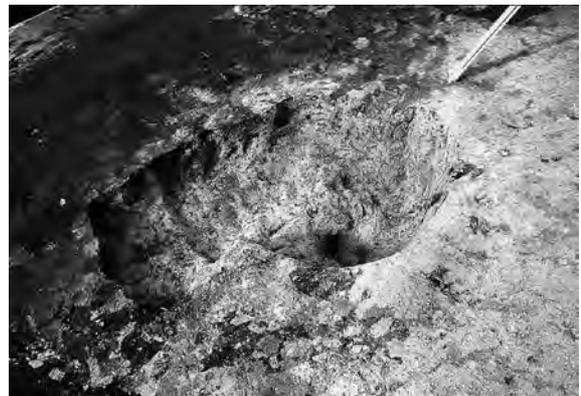
第 4 号土坑遺物出土狀況



第 7 号土坑完掘



第 7 号土坑土层断面



第 8 号土坑完掘



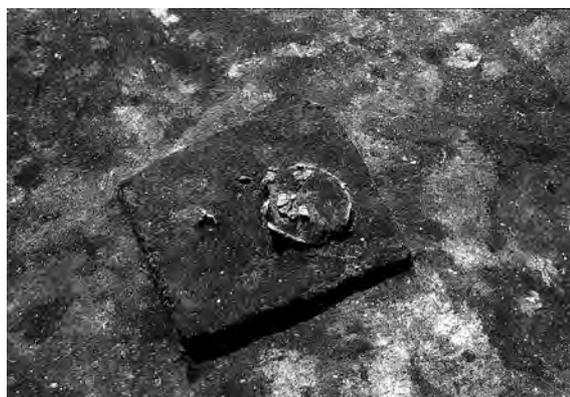
第 8 号土坑土層断面



第 10号土坑完掘



第 10号土坑土層断面



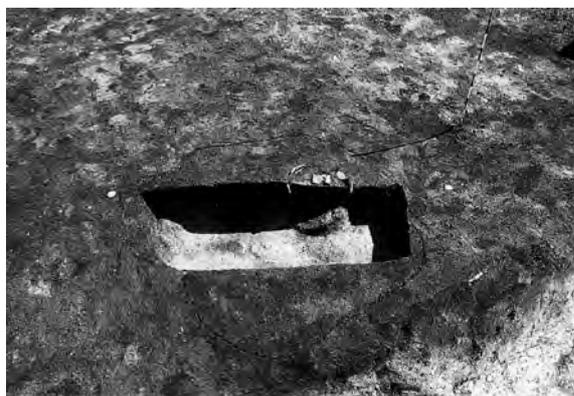
第 1 号土器埋設遺構確認状況



第 1 号土器埋設遺構土層断面



第 2 号土器埋設遺構確認状況



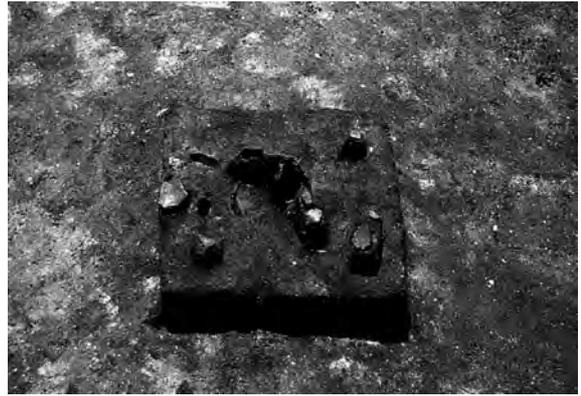
第 2 号土器埋設遺構土層断面



第 3 号土器埋設遺構確認状況



第3号土器埋設遺構土層断面



第4号土器埋設遺構確認状況



第4号土器埋設遺構土層断面



遺物集中地点遺物出土状況



第1号建物跡完掘状況



第1号建物跡完掘



第1号建物跡土層断面



第1号建物跡土層断面



第1号建物跡土層断面



第1号建物跡カマド完掘



第1号建物跡カマド完掘



調査区全景(西側から)



第3号建物跡完掘



第3号建物跡土層断面



第3号建物跡土層断面



第3号建物跡 Pit1 遺物出土状況



第3号建物跡カマド完掘



第3号建物跡カマド完掘



第3号建物跡カマド堀方完掘



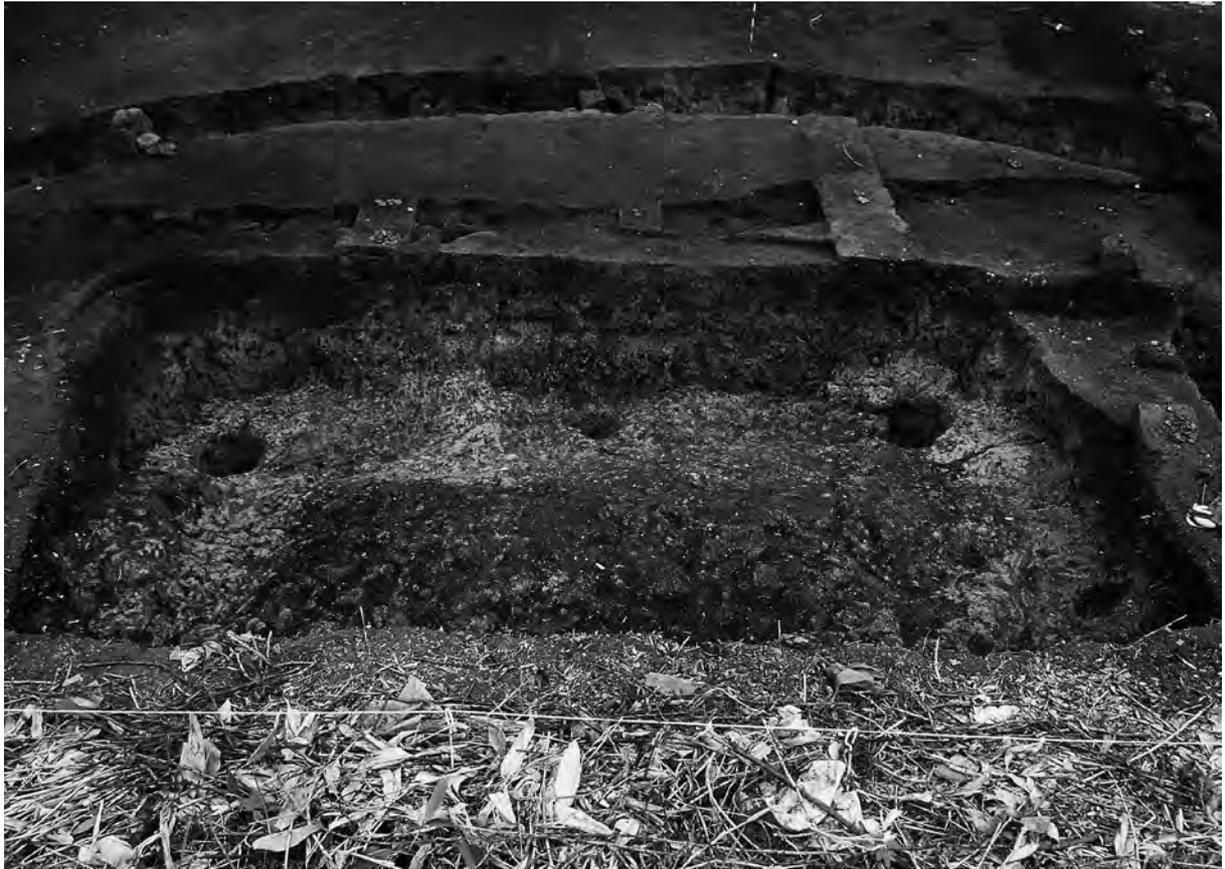
第4号建物跡完掘



第4号建物跡土層断面



第4号建物跡竪穴部堀方完掘



第4号建物跡竪穴部完掘



第4号建物跡外周溝東側先端部



第4号建物跡外周溝遺物出土状況



第4号建物跡外周溝西側先端部



第4号建物跡外周溝土層断面



第4号建物跡外周溝土層断面



第6号建物跡完掘



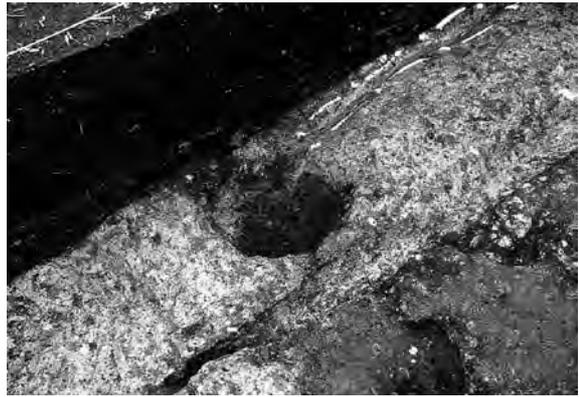
第6号建物跡張り出し部完掘 (SK-9含む)



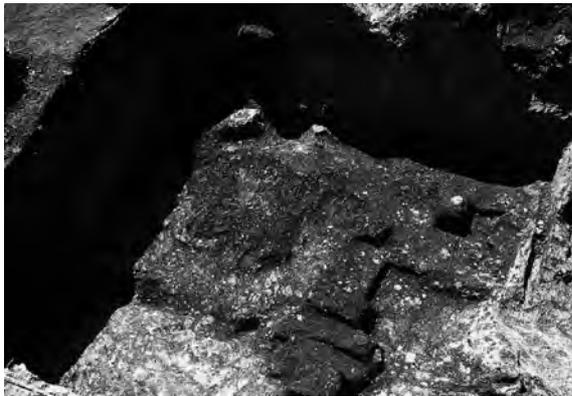
第6号建物跡土層断面



9号土坑完掘状況



第6号建物跡PIT1炭化物出土状況



第6号建物跡張り出し部炭化材出土状況



第6号建物跡張り出し部掘方土層断面



第3号土坑完掘状況



第1号溝跡完掘状況



第1号溝跡土層断面



第2号溝跡完掘状況



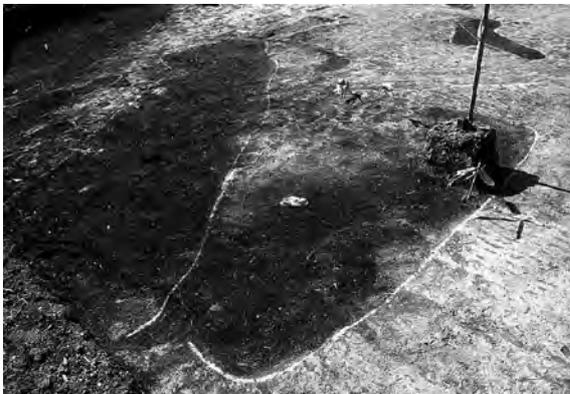
第3号溝跡完掘状況



第3号溝跡確認状況



第3号溝跡土層断面



第4号溝跡確認状況(右隣は第3号土坑)



第4号溝跡底面溝確認状況



第4号溝跡土層断面



第4号溝跡底面溝土層断面



第 4 号溝跡完掘狀況



第 4 号溝跡完掘狀況



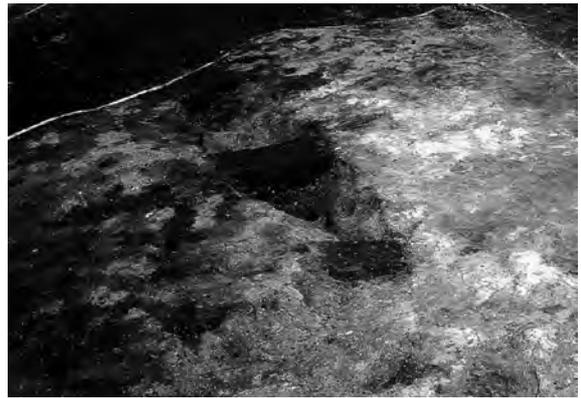
第 5 号溝跡底面溝完掘狀況



第 5 号溝跡土層断面



第 5 号溝跡完掘状況



第 6 号溝跡土層断面及び完掘状況



第 8 号溝跡土層断面



第 8 号溝跡完掘状況



第 8 号溝跡土層断面



第 8 号溝跡土層断面



第 8 号溝跡東端部



第 9 号溝跡遺物出土状況



第 9 号溝跡西端部完掘状況



第 9 号溝跡土層断面



第1号溝跡完掘状況



第1号溝跡完掘状況



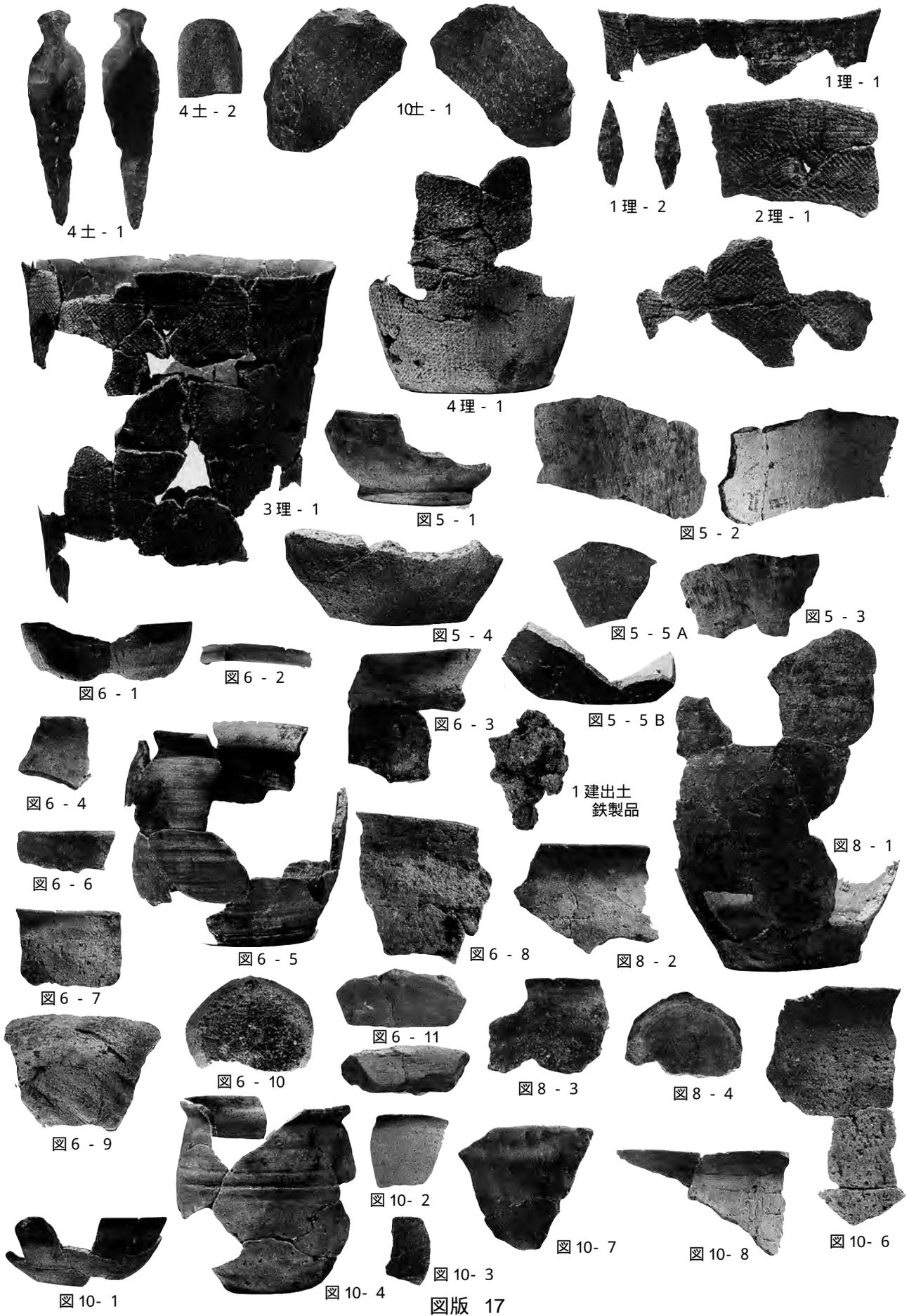
第12号溝跡土層断面



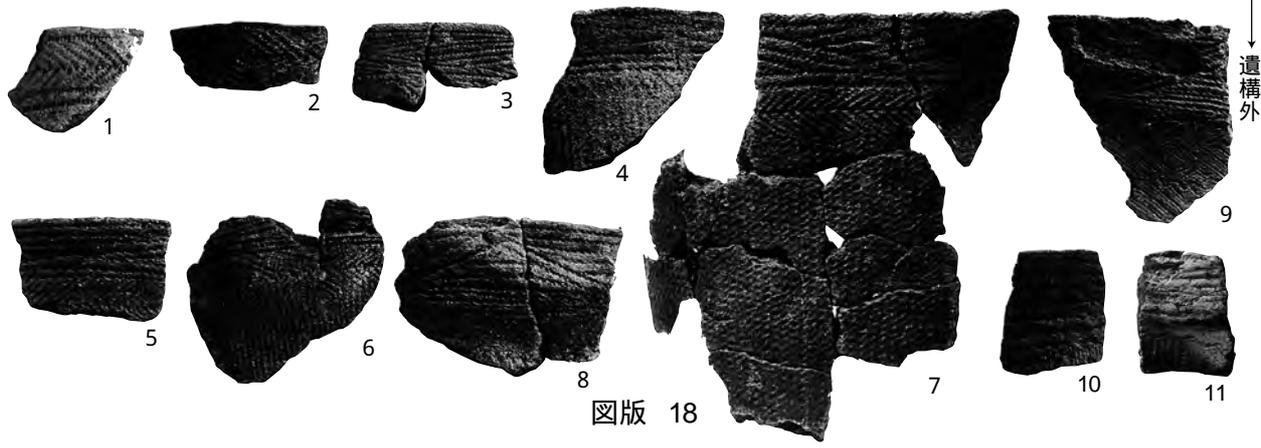
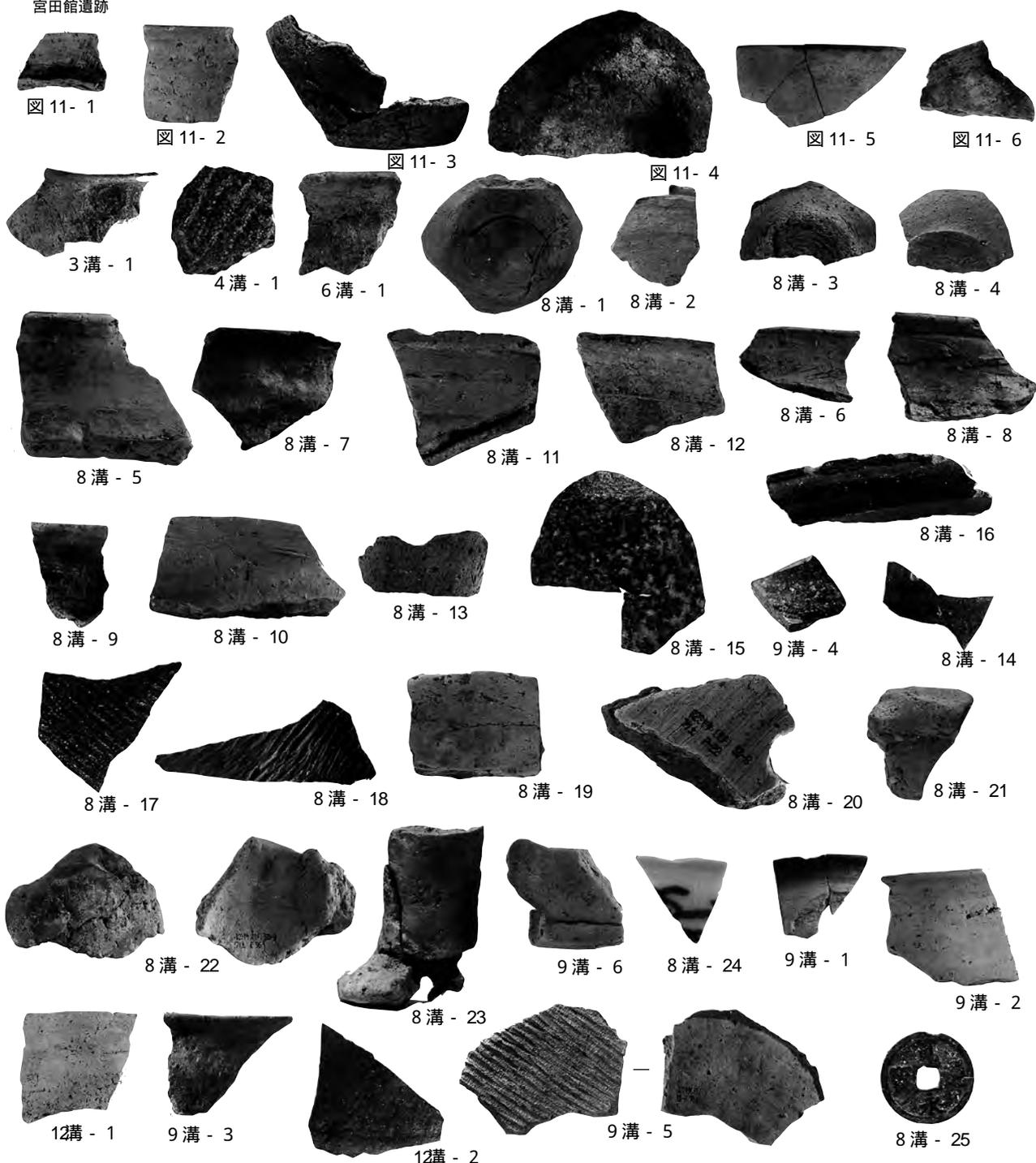
第12号溝跡完掘状況

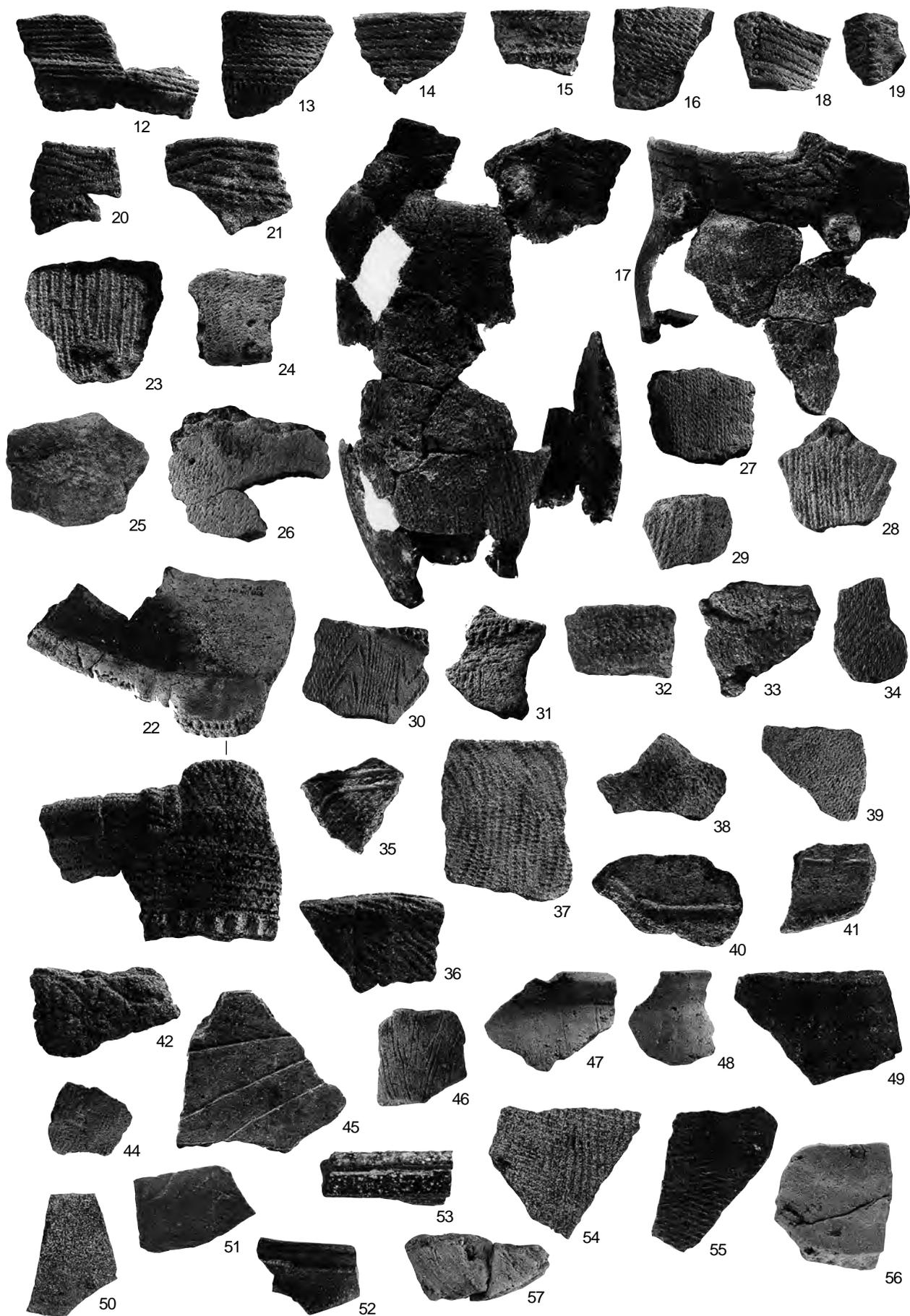


第13号溝跡完掘状況



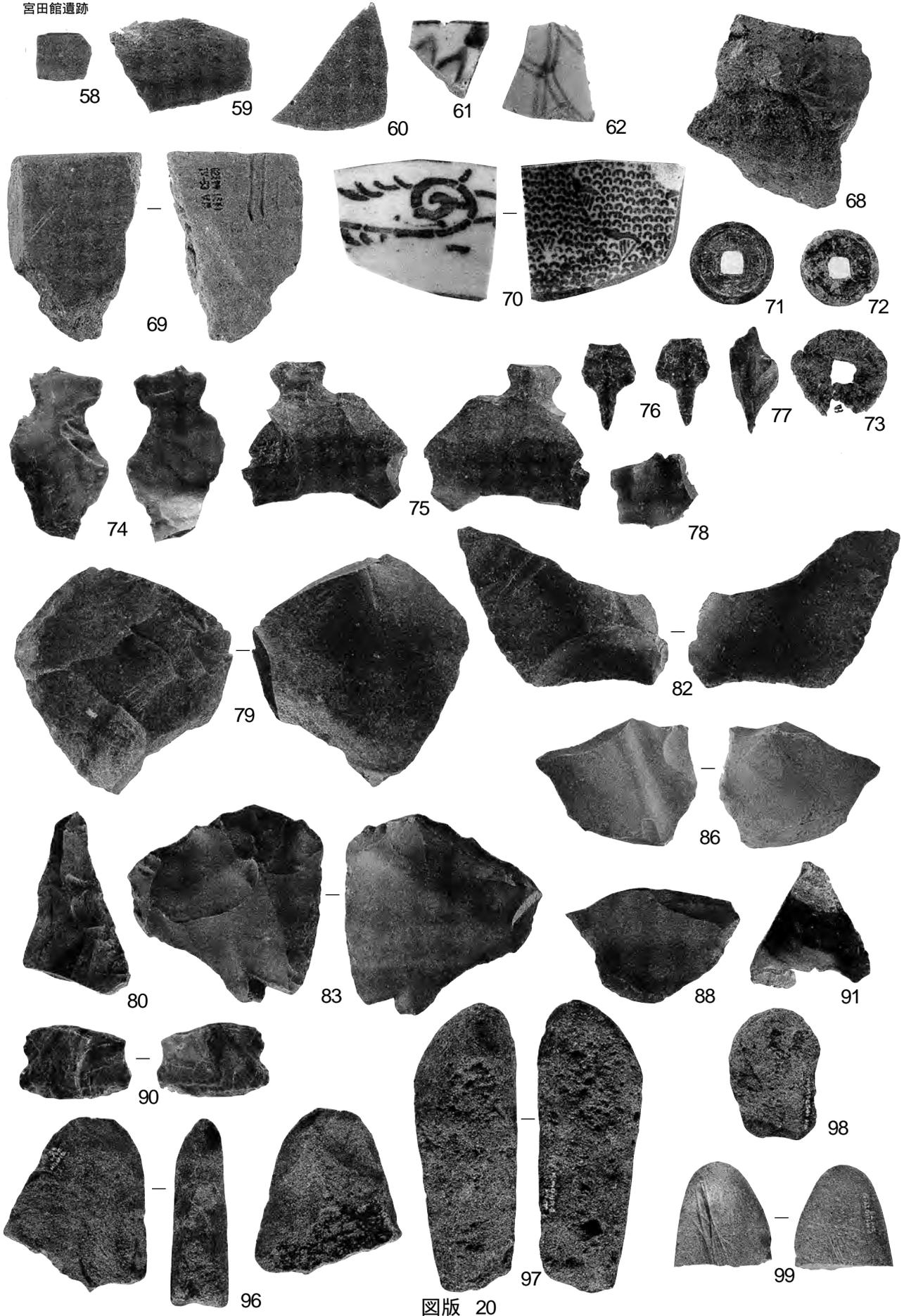
宮田館遺跡



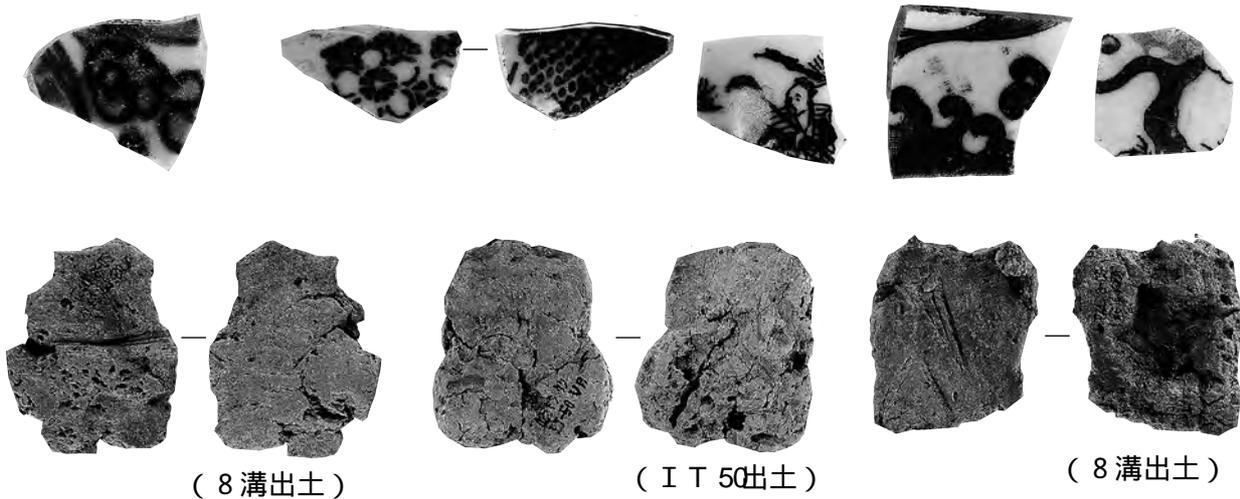


图版 19

宮田館遺跡



図版 20



(8溝出土)

(IT50出土)

(8溝出土)



図 18- 73X 線写真

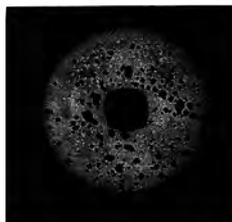
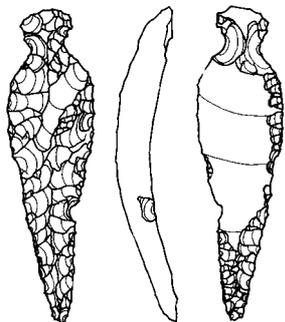
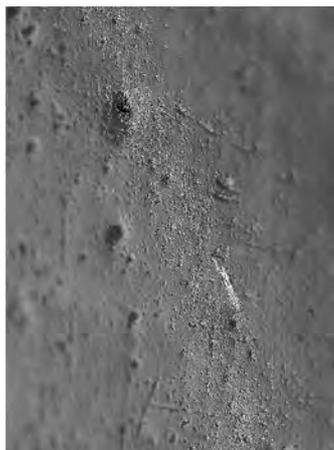


図 18- 72X 線写真

第1号建物跡出土鉄製品
X線写真



4土 - 1



刃部に平行した線状痕と光沢がみられる
光沢は肉眼でも明瞭に観察できる

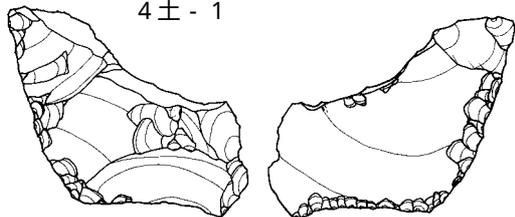


図 19- 82



全体的に摩耗した様子がうかがえるが
線状痕はみられない

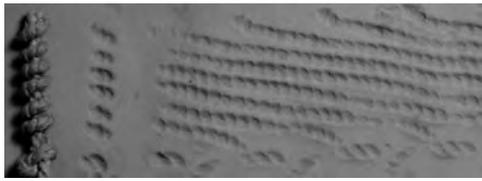


図 19- 84

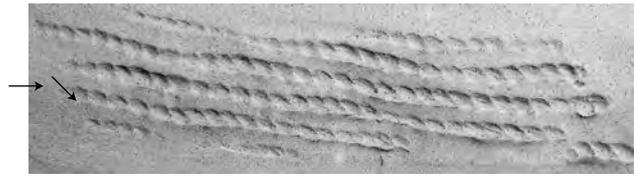


刃部に平行した線状痕と光沢が見られる

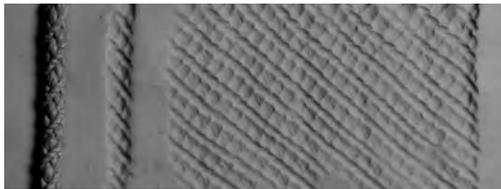
石器縁辺部にみられた使用痕の顕微鏡写真 (× 10)



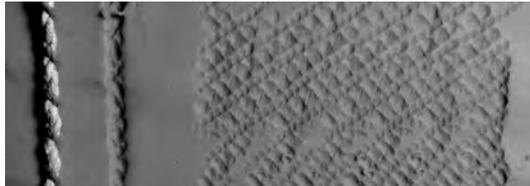
自縄自巻横回転(R L)



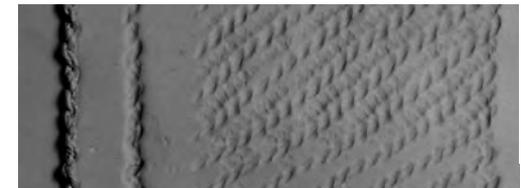
自縄自巻的(R L)節直行方向スライド施文



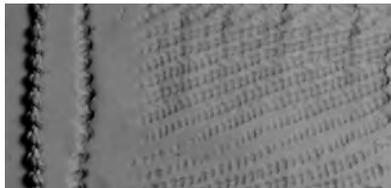
石井 1997- (太い L R に細い R 2 本を付加)



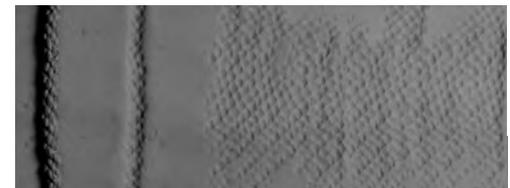
石井 1997- (細い L R に細い R 2 本を付加)



石井 1997- (太さの違う R 2 本を撚った L R)



石井 1997- (不均等撚り合わせの縄(L R))



石井 1997- に近似(自動自巻的縄文(L R))



石井 1997- (直前段多糸(R 4 本) L R))

○同一原体を強(上段) 弱(下段) を付けて施文している。

石井 1997- (直前段撚戻し R R)
写真図版 22

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやただていせき
書名	宮田館遺跡
副書名	青森環状野内線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第365集
編集者名	茅野嘉雄
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内 152-15 017-788-5701・5702 Fax 017-788-5702
発行年月日	西暦2004年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東緯			
みやただていせき 宮田館遺跡	あおもりしおおあざ 青森市大字 みやたあざたまみず 宮田字玉水 294-4 他	02201	01278	40	140	20020415 ~ 20020630	1,310㎡	青森環状野内線 道路建設に伴う 事前調査
				50	50			
				00	27			
				日本測地系 (JGD2000)				
				北緯	東緯			
				40	140			
				50	50			
				15	16			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
宮田館遺跡	集落跡	縄文時代前期	竪穴住居跡	1軒	円筒下層d式土器 石鏃・石匙・半月状 扁平打製石器	縄文・弥生・平安時代 ・中・近世の複合遺跡。	
	散布地	縄文時代中期 ~後期	土坑	3基			弥生時代中期末の土 器数片
			土器埋設遺構	4基			
	散布地	弥生時代	遺物集中地点	1箇所			
	集落跡	平安時代	建物跡	4軒	土師器・須恵器・石 器(砥石等)・支脚 ・製塩土器・鉄製品	平安時代後期(10c中 葉)の集落跡を検出。 外周溝を伴う建物跡1 軒を検出	
散布地	中世以降	土坑	1基				
			溝跡	11条	中国産青磁椀数片 肥前系陶磁器 近現代の陶磁器	中世の溝跡を検出。 近世以降の溝跡検出。	
			柱穴跡	16基			
					遺物総量	20箱	地下水流路跡2箇所

青森県埋蔵文化財調査報告第 365 集

宮田館遺跡

- 青森環状野内線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

発行年月日 2004年(平成16年)2月27日

発行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15

017-788-5701・5702 Fax 017-788-5702

印刷 青森相互印刷株式会社

〒038-0013 青森市久須志四丁目1-25

TEL 017-766-5161 FAX 017-766-5162
